

平成17年度

研究 紀要

Vol.35

◎ 研究チーム等の研究

- 1 教育調査チーム
- 2 学校評価研究チーム
- 3 情報化推進研究チーム
- 4 eラーニングによる研修に関するプロジェクト研究チーム
- 5 教育相談チーム

◎ 指導主事の個人研究

- 1 中学校保健体育科
- 2 高等学校家庭科

◎ 長期研究員の研究

- 1 中・高等学校英語科
- 2 情報教育
- 3 小学校生徒指導
- 4 中学校理科
- 5 小学校音楽科
- 6 小学校学級活動
- 7 中学校英語科

福島県教育センター

はじめに

昨年の10月に中央教育審議会は、「新しい時代の義務教育を創造する」(答申)をまとめました。この答申を踏まえ、①教育の目標を明確にして結果を検証し質を保障する、②教師に対する揺るぎない信頼を確立する、③地方・学校の主体性と創意工夫で教育の質を高める、④確固とした教育条件を整備するの4つの戦略を基に、今後、学習指導要領の見直しなど、必要な制度の改正や事業の推進が図られます。また、これらを踏まえ今年の1月に、「国際社会の中で活躍できる心豊かでたくましい人づくり」を目指し、「どの子にも豊かな教育」を与えられるようにすることを理念として、今後重点的に取り組むべき関連施策が「重点行動計画」としてまとめられました。

このような教育改革が現在推し進められている背景には、次のような教育をめぐる現状や課題があります。学校で、家庭で、社会で、これまでは考えられなかったような青少年による重大事件など様々な問題が発生しています。これは、都市化や少子化の進展や、青少年の社会性、規範意識や道徳心の低下が原因とも指摘されています。個人の自由や権利のみが過度に強調されてきた社会的傾向とともに、児童生徒をめぐる環境が大きく変化し、児童生徒が人や社会との関係の中で自分を磨く機会が減少していることも大きく関係していると指摘されています。児童生徒の学力については、読解力など知識や技能を活用する力が必ずしも十分に身に付いていないなどの課題があります。そのために、児童生徒に基礎・基本をしっかりと身に付けさせ、それを活用しながら自ら学び自ら考え、よりよく問題を解決する力などの「確かな学力」を育成する必要があります。また、規範意識や倫理観、命を大切にすること、豊かな感性など、豊かな人間性や社会性を育むことが重要です。このため、学校などにおいて、道徳教育の充実、奉仕・体験活動や読書活動、キャリア教育などの推進を図るとともに、問題行動や不登校に適切に対応することも重要な課題です。

これらの教育課題の解決を図り、「確かな学力」、「豊かな心」、「健やかな体」の3方向から「生きる力」を身に付けた児童生徒の育成を図るためには、各学校が自校の児童生徒の実態を的確にとらえ、柔軟な発想のもと明確なビジョンをもって保護者や地域社会と手を携えて学校経営や学習指導に取り組んでいかなければなりません。

教育センターではこのような教育の現状と課題を、県内全域調査により基礎データを収集していち早くとらえ、教育改善につながる基礎的・実践的な研究を各学校と連携しながら行い、改善の方向を提案、提供しています。

- 教育調査チーム 「ふくしまの教職意識調査」
『『ふくしまの学習意識』に関する調査<第3年次>』
 - 学校評価研究チーム 「学校評価を生かした学校組織活性化の在り方」
 - 情報化推進研究チーム 「授業づくりにおける効果的なIT活用とその支援の在り方の研究」
- これらの調査・研究の成果は、報告書や研究集録として各学校や教育機関にお送りしました。さらに調査・研究チーム以外のチームにおいても、研究に取り組んできました。
- eラーニングによる研修に関するプロジェクト研究チーム 「研修に生かすネットワーク利用に関する研究」
 - 教育相談チーム 「生きる力を育てる授業実践プログラム開発に関する研究
<第3年次>—学級（ホームルーム）活動を中心に—」

これらの調査・研究の成果は今後の教育センターの講座に反映してだけでなく、平成17年7月に開設したカリキュラムセンターの機能をより最大限に生かして、各学校等との関わりをより密接にしていきたいと考えています。具体的には、各学校や教育委員会、研究会や研修会に指導主事を講師として派遣する事業をさらに充実していきたいと考えています。

教育センターでは、指導主事、長期研修員の個人研究も推進しています。理論研究を基盤に据えて、学習指導や教育相談について、各学校において日々の教育活動に直接役立つ実践研究を行ってきました。

この「研究紀要第35集」は、こうしたチームや個人の調査・研究の成果をまとめたものです。紙面の限りもあり、十分に意を尽くせない面もありますが、各学校がそれぞれの教育課題の把握や解決、教育実践の充実を図る上で役立てていただければ幸甚に思います。

おわりに、調査・研究のご協力を賜りました調査協力校や調査研究校、研究協力員の皆様、並びに関係機関の方々に対しまして、心より感謝申し上げます。

平成18年3月

福島県教育センター所長 青木 崇郎

《 総 目 次 》

◎研究チーム等の研究

1 教育調査チーム

ふくしまの教職意識調査（研究紀第180号 分類基準J01-01）

「教員の資質・能力」を「基盤となる資質」、「実践的指導力」、「経営的能力」、「多様な資質・能力」の4観点から19項目の資質・能力ととらえた。とらえた資質・能力をもとにして、現在、過去、将来の視点から、教員の教職に関する意識を把握した。

「ふくしまの学習意識」に関する調査<第3年次>

（研究紀第181号 分類基準J01-01）

県内小中学校各21校及び県立学校20校の調査協力を得て、生活状況・学習に関する意識・保護者の子ども観・保護者の教育行政等に対する要望の4観点の調査内容から、平成17年度の本県における児童・生徒の生活状況及び学習に関する意識を把握した。

2 学校評価研究チーム（研究紀第182号 分類基準E01-05）

学校評価を生かした学校組織活性化の在り方

今年度は、学校組織の活性化を図るための手立てを明らかにすることを研究の目的とした。

そのために、学校組織の実態を調査し、課題から組織活性化の手がかりを明らかにした。それを基に各学校において、組織活性化を図るための実践プログラムを開発し、研究協力校において有効性を検証した。

3 情報化推進研究チーム（研究紀第183号 分類基準Z01-02）

授業づくりにおける効果的なIT活用とその支援の在り方の研究

授業改善を目的に、ITネットワークを活用し、福島県内の教員が連携する「教員ネットワーク」のモデルを構築した。授業づくりに役立つ資料とそれぞれがもつ指導方法を共有するシステムにより、授業改善しようとする教員の主体性を支援する。また、そのための教育センターのコーディネート の在り方を研究した。

4 eラーニングによる研修に関するプロジェクト研究チーム（研究紀第184号 分類基準Z01-02）

研修に生かすネットワーク利用に関する研究

研修者の意欲向上の一手段として、講座の事前・事後の研修者との情報のやりとりに、ネットワークを利用することを考えた。6つの講座を対象に、研修内容に関するコンテンツの配信や電子メールの利用、アンケート調査等を試み、研修意欲向上に有効なネットワーク利用の具体的な方法や内容に関する研究を行った。

5 教育相談チーム（研究紀第185号 分類基準F09-01）

生きる力を育てる授業実践プログラム開発に関する研究<第3年次>

—学級（ホームルーム）活動を中心に— ……………

本研究は、「生きる力を育てる授業実践プログラム」の開発を学級（ホームルーム）活動を中心に進め、県内各学校に提示するものである。プログラム（小学校第6学年, 中学校第3学年, 高等学校第3学年）を研究協力員と共同開発し、教育センターWebページに掲載し普及に努めた。

◎指導主事の個人研究

1 中学校保健体育科（研究紀第186号 分類基準G06-03）

小・中・高等学校の連携を重視した保健授業の在り方

—「喫煙」を共通教材としたモデルプランの構築— ……………

自らの健康を適切に管理, 改善していくための資質や能力を身に付けさせるためには, 各校種で指導すべき基礎・基本を押さえ, 児童生徒の発達段階に応じた授業を行うことが必要である。本研究では, 各校種に共通する単元から「喫煙」を取り上げ, 小・中・高等学校の連携を重視したモデルプランの作成に取り組んだ。

2 高等学校家庭科（研究紀第187号 分類基準G07-05）

高等学校におけるテーブルコーディネート指導の在り方 ……………

専門科目「フードデザイン」の新しい内容であるテーブルコーディネートの指導法の研究である。食事を作ることから食べるころまでを指導する総合的な題材を構成し, その実践研究を通して, 食事を総合的にデザインする意識を育むことができた。また, 食生活に関する新しい視点での指導法の可能性を見いだすことができた。

◎長期研究員の研究

1 中・高等学校英語科（研究紀第188号 分類基準G09-01）

英語リスニング意欲を高める英語リスニング指導の工夫

—Authenticな教材と予測を生かした活動の観点から— ……………

中学3年生と高校3年生を対象に, 外国映画の場면을教材化し, 予測を生かしたリスニング活動を行うことで, リスニング意欲の向上を試みた。リスニング力と学習スタイルに応じた群分けを行い, 学習スタイルに対応した指導を通して, リスニング意欲の変容を実証的に検証した。

2 情報教育（研究紀第189号 分類基準Z01-02）

学校を変える学校情報化からのアプローチ

—一人一人が関わることができるスクログ(学校用CMS)の活用を通して— ……………

学校の情報化を切り口として, 教育活動におけるITの効果を研究した。教職員一人一人が関われるコンテンツ・マネジメント・システムと情報化推進リーダーの支援を通して, ブログを活用した学校Webの活性化への効果と, 学習支援システムを利用した授業の改善への取組みについて, その有効性を検証した。

3 小学校生徒指導（研究紀第190号 分類基準F08-01）

心の通った「あいさつ」「言葉づかい」の定着を図る工夫

—学校全体での取り組みから— ……………

「基本的生活習慣を図るためのグランドデザイン」を基に、全校的な指導体制の基、学級活動の時間や学校生活の様々な場面、そして家庭や地域との連携を通して、心の通った「あいさつ」「言葉づかい」について指導の改善を図った。学級活動では、発達段階に応じた学習の展開を工夫し、児童の内面に働きかけながら習慣化を図る取り組みを行った。

4 中学校理科（研究紀第191号 分類基準G04-03）

生徒の原子・分子概念の形成を目指した理科指導法の工夫 ……………

中学校理科「化学変化と原子・分子」の学習において、生徒に原子・分子概念の形成が図れるような単元構成の工夫を行った。具体的には、生徒の学習内容の構造化に役立つ概念地図の段階的活用や、単元を通しての原子・分子モデルの活用を図り、その有効性を検証した。

5 小学校音楽科（研究紀第192号 分類基準G05-03）

基礎・基本を身に付けながら、進んで歌唱活動に取り組むことができる授業の工夫 ……………

小学校高学年の歌唱活動において、歌うことに自信をもち、進んで表現活動に取り組む児童の育成を目指した。歌唱活動を楽しむための「音楽活動の基礎的な能力」を培いながら、児童一人一人に合った課題のめたせ方やグループ活動を有効に使った学び合う授業展開について実践研究を行った。

6 小学校学級活動（研究紀第193号 分類基準G11-03）

集団の連帯意識と望ましい人間関係を育てる学級活動(1)の在り方 ……………

児童一人一人に自己存在感や有用感を感得させ、集団の連帯意識や望ましい人間関係が醸成されるような学級活動(1)の在り方について研究を行った。そのために、学級の支持的風土づくりの教師の基本姿勢を3つに整理し、各活動における「身に付けさせたい力とその手立て」を明確にして実践研究を行った。

7 中学校英語科（研究紀第194号 分類基準G09-02）

コミュニケーション能力の育成を目指した英語指導の工夫

—互いのよさを認め合うコミュニケーション活動を通して— ……………

実践的コミュニケーション能力育成を目指し、英語運用力を育てる指導の方策を探った。生徒の興味関心を高める題材の選択と生かし方に関する教材分析に基づき、スキル面の指導と表現への意欲や態度を育てる指導との関連を図った授業実践を行った。

教育調査チーム

ふくしまの教職意識調査

「ふくしまの学習意識」に関する調査〈第3年次〉

「ふくしまの学習意識」に関する調査〈第3年次〉
ふくしまの教職意識調査

ふくしまの教職意識調査

《目次》

I	調査の目的	1
II	調査の概要	1
1	教員の資質・能力	1
2	調査内容	1
3	調査対象	1
4	調査期間	1
5	調査方法	1
6	調査結果と考察	1
III	調査結果からの一提言	9

「ふくしまの学習意識」に関する調査＜第3年次＞

《目次》

I	調査の趣旨	10
II	調査の概要	10
1	調査内容	10
2	調査方法	10
3	調査の実際	10
4	調査結果	10
III	調査のまとめと考察	15
1	平成17年度の中学2年生の平日と休日の生活時間帯の平均的な姿	15
2	平成17年度のまとめと考察	15

ふくしまの教職意識調査

教育調査チーム

I 調査の目的

教員の教職に関する意識を質問紙法によって調査することにより、教職に関する意識の現状と課題を明らかにし、教員の資質・能力向上のための一資料として活用できるようにすることを目的として、調査を進めた。

II 調査の概要

1 教員の資質・能力

教養審答中等を参考にして、下図のように「基盤となる資質」、「実践的指導力」、「経営的能力」、「多様な資質・能力」の4つの観点をもとにした19項目を「教員の資質・能力」ととらえた。

<教員の資質・能力についての4つの観点とその構造図>

【実践的指導力】	【経営的能力】	【多様な資質・能力】
◎各教科などの専門知識・理解 ◎児童生徒の成長・発達に関する知識・理解 ◎授業の力（子ども理解、指導力、授業構想力、教育技術、教材理解力・分析力） ◎生徒指導の力 ◎教育内容の構成力 （指導計画作成、教育課程編成力）	◎協調・協力・協議の能力 ◎学級経営能力（集団経営、教室経営） ◎学年経営能力 ◎対人関係能力 ◎分掌経営能力（教育指導、分掌事務、研修） ◎総合的課題解決能力 ◎学校経営能力（マネジメント、リーダーシップ）	◎人権、福祉、ボランティア、外国語コミュニケーション、情報活用などに関する力
【基盤となる資質】		
◎教育愛と使命感 ◎幅広い教養と豊かな人間性 ◎社会性 ◎服務規律の遵守 ◎自己教育力（研修への意欲） ◎心身の健康		

2 調査内容

- (1) 教職に対するやりがい
- (2) 現在の意識
- ① 基盤となる資質（○教育愛と使命感，○幅広い教養と豊かな人間性，○社会性，○心身の健康，○服務規律の遵守，○自己教育力）
- ② 実践的指導力（○各教科等の専門知識・理解，○児童生徒の成長・発達に関する知識・理解，○授業の力，○生徒指導の力，○教育内容の構成力）
- ③ 経営的能力（○協調・協力・協議の能力，○学級経営能力，○学年経営能力，○対人関係能力，○分掌経営能力，○総合的課題解決能力，○学校経営能力）
- ④ 多様な資質・能力（○多様な資質・能力）

- (3) 教員として最も必要な資質・能力
- (4) 学習指導に関して力を入れていること
- (5) 学習指導に関して保護者と連携を図っていること
- (6) 現在の社会における男女の地位意識
- (7) 男女がともに仕事，家庭，育児等に積極的に参加していくために必要なこと
- (8) これまでの教職における歩みを振り返って
 - ①満足感
 - ②行き詰まり感
- (9) 現在職務を遂行する中で問題だと感じていること
- (10) 今後5年以内の目標
- (11) 現在特に心がけて行っていること

3 調査対象

- (1) 調査対象者
 - ・公立小学校教諭 185件
 - ・公立中学校教諭 164件
 - ・県立学校教諭 167件
- (2) 調査協力校（抽出校）
 - ・公立小学校 14校
 - ・公立中学校 10校
 - ・県立高等学校 6校
- (3) 回答者の属性
 - ・年代別 20代48名，30代190名，40代199名，50代74名，不明5名
 - ・男女別 男性271名，女性229名，不明16名

4 調査期間

- ・平成17年7月12日（火）～
- 平成17年7月27日（水）

5 調査方法

- ・質問紙法による調査

6 調査結果と考察

(1) 現在の意識

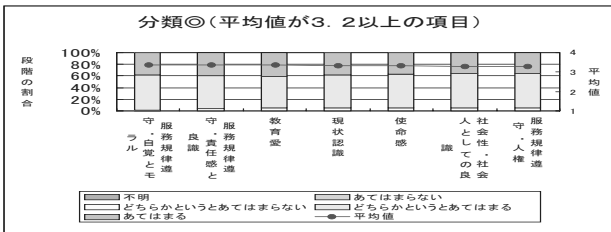
① 34項目の意識結果の分類と現状認識

項目間の意識の違いをはっきりさせるために、34項目の意識結果を項目全体の平均値であった3.0を基準にして次の4種類に分類した。

- 分類◎：平均値が3.2以上の項目
- 分類○：平均値が3.0以上3.2未満の項目
- 分類△：平均値が2.8以上3.0未満の項目
- 分類●：平均値が2.8未満の項目

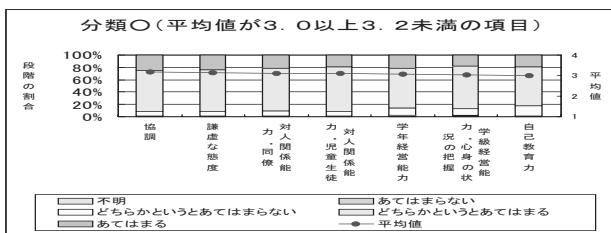
*平均値：「あてはまらない」を1ポイント、「どちらかというとはてはまらない」を2ポイント、「どちらかというとはまる」を3ポイント、「あてはまる」を4ポイントとして段階ごとの人数を乗じて合計ポイントを算出し、それを全体人数で割り、平均を求めた値(小数第3位を四捨五入し、小数第2位までの値で表示)

ア 分類◎：平均値が3.2以上の項目



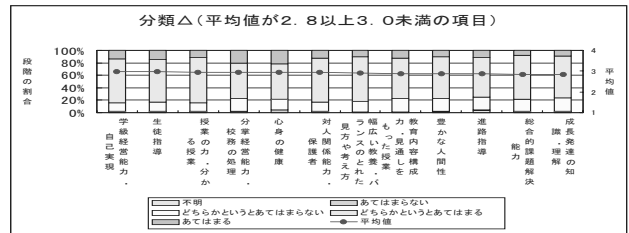
分類◎に分類される項目は、ほとんどの教諭が「あてはまる」または「どちらかというとはまる」を回答しており、「基盤となる資質」に関する内容がほとんどである。教職員の不祥事が問題となっているが、児童生徒の人権や社会人としての良識、教職のモラルについて、ほとんどの教諭は、高い意識をもっていると感じていることが分かる。

イ 分類○：平均値が3.0以上3.2未満の項目

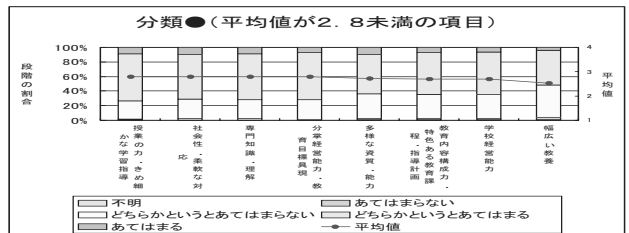


分類○に分類される項目は、分類◎よりも「どちらかというとはてはまらない」または「あてはまらない」と回答する教諭の割合が高くなるものの、多くの教諭が「あてはまる」または「どちらかというとはまる」と回答している。「経営的能力」に関する内容がほとんどで、児童生徒との関係や同学年教師、同僚、管理職との関係について、多くの教諭は、やや高い意識をもっていると感じていることが分かる。

ウ 分類△：平均値が2.8以上3.0未満の項目



分類△に分類される項目は、分類○より「あてはまる」または「どちらかというとはまる」と回答する教諭の割合が低くなり、「どちらかというとはてはまらない」または「あてはまらない」と回答する割合が高くなっている。学習指導や生徒指導、学級経営、分掌事務などの「実践的指導力」に関する内容と、豊かな情操や人間味、心身の健康などの「基盤となる資質」に関する内容が多い。それらの内容について、多くの教諭は、自己をやや厳しく見つけていることが分かる。

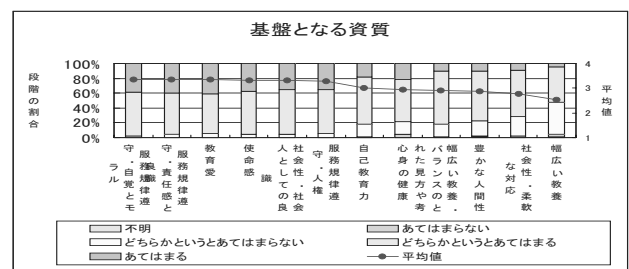


ウ 分類●：平均値が2.8未満の項目

分類●に分類される項目は、分類△よりさらに「あてはまらない」または「どちらかというとはてはまらない」と回答する教諭の割合が高くなっている。その内容としては、学習指導の「実践的指導力」や学校経営の「経営的能力」、幅広い教養や社会性の「基盤となる資質」などに関する内容である。これらの内容について、多くの教諭は、自己を厳しく見つけていることが分かる。

②「教員の資質・能力についての4つの観点」ごとの分類と現状認識

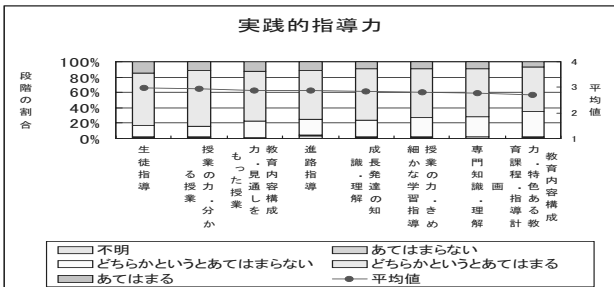
ア 基盤となる資質



意識の分類 ◎ ○ △ ●

「基盤となる資質」の多くの項目について、高い意識をもっていると感じているが、幅広い教養、社会性(社会の変化への対応)等については、まだまだ十分ではないと自己を厳しく見つめている。

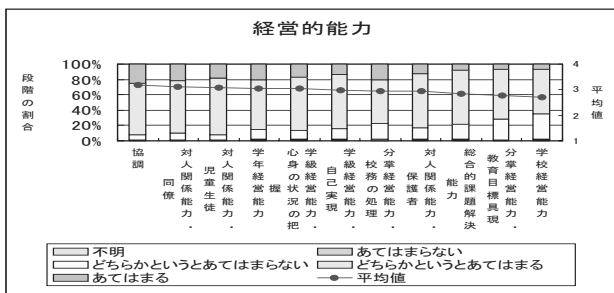
イ 実践的指導力



意識の分類 △ △ △ △ △ ● ● ● ● ●

「実践的指導力」に関しては、どの項目もまだまだ十分ではないと、自己を厳しく見つめていることが分かる。

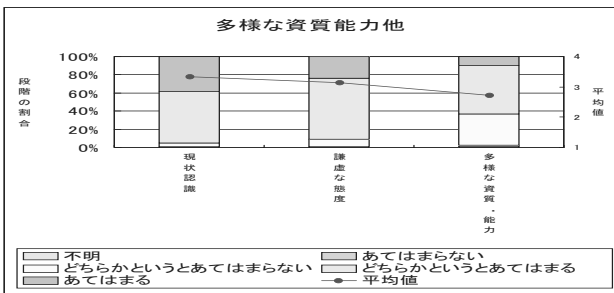
ウ 経営的能力



意識の分類 ○ ○ ○ ○ ○ ○ △ △ △ ● ● ● ● ●

「経営的能力」についての教諭全体の現在の意識からは、学校内で良好な人間関係を築きながら校務を遂行する姿がうかがえる。しかし、学級経営能力(自己実現)や分掌経営能力(校務処理)(教育目標具現)、対人関係能力(保護者)、総合的課題解決能力、学校経営能力については、自己を厳しく見つめていることが分かる。

エ 多様な資質・能力他



意識の分類 ○ ○ ●

「多様な資質・能力他」では、自己を厳しく見つ

めている項目は、多様な資質・能力であり、高い意識をもっていると感じている項目は、謙虚な態度や現状認識である。

③「教員の資質・能力についての4つの観点」からとらえた「現在の意識」

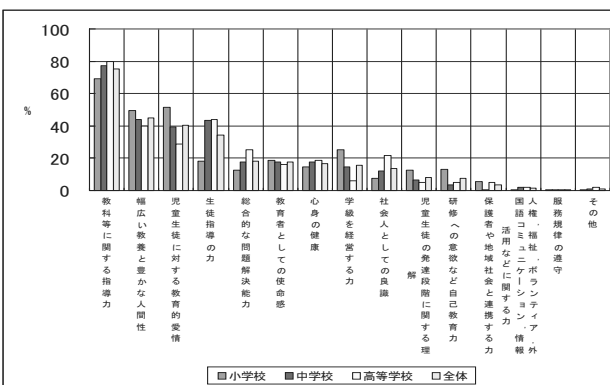
「教員の資質・能力についての4つの観点」に教諭全体の「現在の意識」を4つの分類(分類◎, 分類○, 分類△, 分類●)で表した。

【実践的指導力】 △授業の力 △生徒指導の力 △児童生徒の成長・発達に関する知識・理解 ●教育内容の構成力 ●各教科等の専門知識・理解	【経営的能力】 ○協調・協力・協議の能力 ○学級経営能力 ○学年経営能力 ○児童生徒との関係 ○同僚との関係 △保護者との関係 △分掌経営能力 △総合的課題解決能力 ●学校経営能力	【多様な資質・能力】 ●人権、福祉、ボランティア、外国語コミュニケーション、情報活用などに關する力
【基盤となる資質】 ◎教育愛と使命感 ○自己教育力 △心身の健康 ◎服務規律の遵守 ○社会性 ●幅広い教養と豊かな人間性		

(2) 教員として最も必要な資質・能力

調査対象教諭全体が「教員として最も必要な資質・能力」として回答している主なものは、「教科等に関する指導力」(実践的指導力)、「幅広い教養と豊かな人間性」(基盤となる資質)、「生徒指導の力」(実践的指導力)である。

<教員として最も必要な資質・能力>複数回答(3項目)



校種別に見ると、小学校教諭が選択しているのは、「教科等に関する指導力」, 「児童生徒に対する教育的愛情」, 「幅広い教養と豊かな人間性」, 「学級を経営する力」(経営的能力)の順である。他校種の教諭と比較して「児童生徒に対する教育的愛情」, 「学級を経営する力」を選択する割合が高い。

中学校教諭が選択しているのは、「教科等に関する指導力」, 「幅広い教養と豊かな人間性」, 「生徒指導の力」, 「児童生徒に対する教育的愛情」の順であ

る。

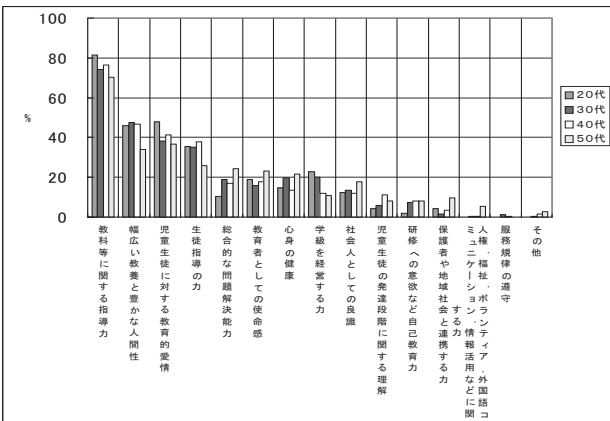
高等学校教諭が選択しているのは、「教科等に関する指導力」、「生徒指導の力」、「幅広い教養と豊かな人間性」、「児童生徒に対する教育的愛情」の順である。

中学校教諭と高等学校教諭は、小学校の教諭と比較して「生徒指導の力」を選択する割合が高い。

校種によって、学校教育法に明示されている「対象とする児童・生徒（各校種）の教育の目的や目標」の違いや学級担任制と教科担任制の違い等により、重点の置き方などが多少異なっている。

年代別に「教員として最も必要な資質・能力」を見てみると、20代教諭が選択しているのは、「教科等に関する指導力」、「児童生徒に対する教育的愛情」、「幅広い教養と豊かな人間性」、「生徒指導の力」、「学級を経営する力」の順である。他年代の教諭と比較して「教科等に関する指導力」、「児童生徒に対する教育的愛情」、「学級を経営する力」を選択する割合が高い。

<年代別に見る教員として最も必要な資質・能力>
複数回答(3項目)



30代教諭が選択しているのは、「教科等に関する指導力」、「幅広い教養と豊かな人間性」、「児童生徒に対する教育的愛情」、「生徒指導の力」、「学級を経営する力」の順である。

40代教諭が選択しているのは、「教科等に関する指導力」、「幅広い教養と豊かな人間性」、「児童生徒に対する教育的愛情」、「生徒指導の力」、「教育者としての使命感」の順である。

50代教諭が選択しているのは、「教科等に関する指導力」、「児童生徒に対する教育的愛情」、「幅広い

教養と豊かな人間性」、「生徒指導の力」、「総合的な問題解決能力」の順である。他年代の教諭と比較して「総合的な問題解決能力」、「社会人としての良識」、「心身の健康」を選択する割合が高い。

教諭自身の経験年数やキャリアによって、重点の置き方などが多少異なっている。

多くの教諭は、「授業の力」と「生徒指導の力」を中心とする「実践的指導力」、「幅広い教養と豊かな人間性」と「教育愛と使命感」、「心身の健康」などの「基盤となる資質」、さらに「学級経営能力」と「総合的課題解決能力」などの「経営的能力」を「教員として最も必要な資質・能力」と意識している。これを「教員の資質・能力についての4つの観点」に図示すると次のようになる。

<調査対象教諭の意識する「教員として最も必要な資質・能力」>

【実践的指導力】	【経営的能力】	【多様な資質・能力】
・授業の力(小・中・高) ・生徒指導の力(小・中・高)	・学級経営能力(小・高) ・総合的課題解決能力(中・高)	
【基盤となる資質】		
・教育愛(小・中・高)と使命感(小・中)		・心身の健康(中)
・幅広い教養と豊かな人間性(小・中・高)		

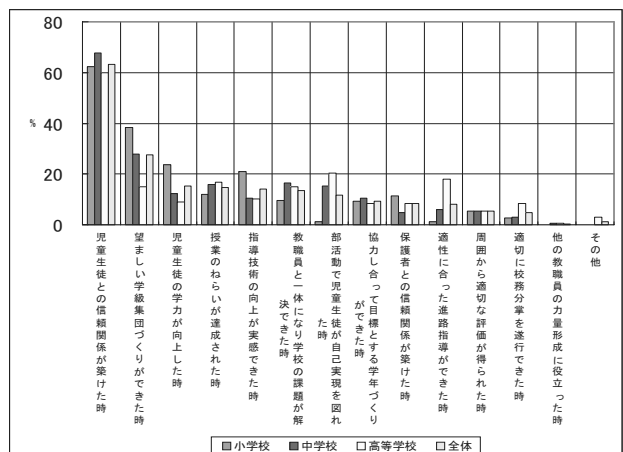
※太字の項目は、選択した割合(教諭全体)が30%以上

(3) これまでの教職の歩みを振り返って

① 教職における満足感

調査対象教諭全体が「教職における満足感」として選択しているのは、「児童生徒との信頼関係が築けた時」が一番多く、次いで、「望ましい学級集団づくりができた時」、「児童生徒の学力が向上した時」、「授業のねらいが達成された時」、「指導技術の向上が実感できた時」の順である。

<教職における満足感>複数回答(2項目)



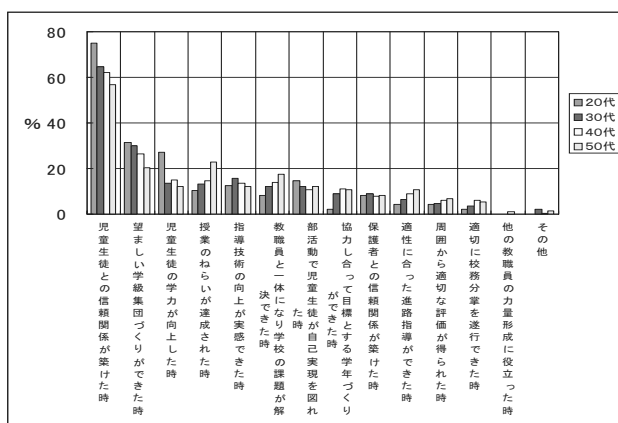
校種別に見ると、小学校の教諭が選択しているのは、「児童生徒との信頼関係が築けた時」、「望ましい学級集団づくりができた時」、「児童生徒の学力が向上した時」、「指導技術の向上が実感できた時」の順である。他校種と比較して、「望ましい学級集団づくりができた時」を選択する割合が高い。

中学校の教諭が選択しているのは、「児童生徒との信頼関係が築けた時」、「望ましい学級集団づくりができた時」、「教職員と一体になり学校の課題が解決できた時」、「授業のねらいが達成された時」の順である。

高等学校の教諭が選択しているのは、「児童生徒との信頼関係が築けた時」、「部活動で児童生徒が自己実現を図れた時」、「適性に合った進路指導ができた時」、「授業のねらいが達成された時」の順である。他校種と比較して、「部活動で児童生徒が自己実現を図れた時」、「適性に合った進路指導ができた時」を選択する割合が高い。

学校教育法に明示されている「対象とする児童・生徒（各校種）の教育の目的や目標」の違いや学級担任制と教科担任制の違い等により、重点の置き方などが多少異なっている。

<年代別に見る教職における満足感>複数回答(2項目)



年代別に「教職における満足感」を見てみると、

20代教諭が選択しているのは、「児童生徒との信頼関係が築けた時」、「望ましい学級集団づくりができた時」、「児童生徒の学力が向上した時」、「部活動で児童生徒が自己実現を図れた時」の順である。他年代と比較して、「児童生徒との信頼関係が築けた時」、「児童生徒の学力が向上した時」を選択する割合が高い。

30代教諭が選択しているのは、「児童生徒との信頼関係が築けた時」、「望ましい学級集団づくりができた時」、「指導技術の向上が実感できた時」、「児童生徒の学力が向上した時」の順である。

40代教諭が選択しているのは、「児童生徒との信頼関係が築けた時」、「望ましい学級集団づくりができた時」、「児童生徒の学力が向上した時」「授業のねらいが達成された時」の順である。

50代教諭が選択しているのは、「児童生徒との信頼関係が築けた時」、「授業のねらいが達成された時」、「望ましい学級集団づくりができた時」、「教職員と一体になり学校の課題が解決できた時」の順である。他年代と比較して、「授業のねらいが達成された時」、「教職員と一体になり学校の課題が解決できた時」を選択する割合が高い。

教諭自身の経験年数やキャリアによって、重点の置き方などが多少異なっているが、多くの教諭は、「授業の力」と「生徒指導の力」を中心とする「実践的指導力」、「学級経営能力」と「協調」などの「経営的能力」を発揮し、成果が実感できた時に満足感も得られるようである。これを「教員の資質・能力についての4つの観点」に図示すると次のようになる。

<「教員の資質・能力についての4つの観点」>

からとらえた「教職における満足感」>

【実践的指導力】 ・授業の力(小・中・高) ・生徒指導の力(中・高)	【経営的能力】 ・対人関係能力児童生徒(小・中・高) ・学級経営能力(小・中・高) ・協調・協力・協議の能力(中・高)	【多様な資質・能力】
【基盤となる資質】		

※太字の項目は、選択した割合(教諭主体)が20%以上

次に「教職における満足感」と「現在の意識」(3頁参照)を比較してみる。「実践的指導力」では、「授業力」、「生徒指導の力」については、まだまだ十分ではないと認識しながらも、成果が実感できた時に満足感を得られると意識する教諭が多い。

「教職における満足感」に関連した必要な資質・能力は、ほとんどが「教員として最も必要な資質・能力」(4頁参照)に含まれている。そのため、「教員として最も必要な資質・能力」としている項目の力量がより高まれば、より質の高い満足感を得ることができると考える。

これらのことから、客観的な現状認識を踏まえて自己目標を設定し、その達成度を高め、質の高い満足感を得られるようにしていくことが望まれる。

② 行き詰まりを感じたことの有無

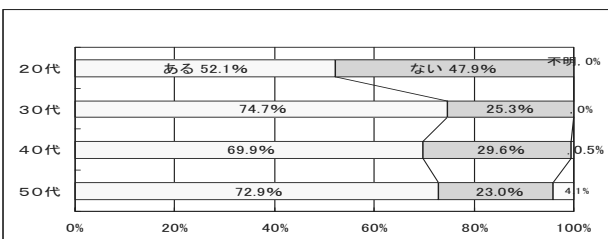
「教職に対する行き詰まりの有無」について教諭全体の回答を見ると、「ある」の回答が70.7%、「ない」の回答が28.5%である。

校種別に見ると、どの校種も約7割の教諭が「ある」と回答し、約3割の教諭が「ない」と回答している。

<行き詰まりを感じたことの有無>単位(%)

	ある	ない	不明
小学校	70.9	28.1	1.0
中学校	71.4	28.0	0.6
高等学校	70.1	29.3	0.6
全体	70.7	28.5	0.8

<年代別に見る行き詰まりを感じたことの有無>



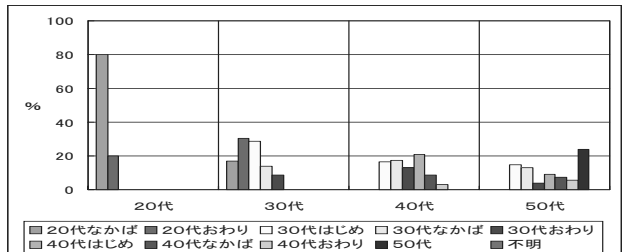
「教職に対する行き詰まりの有無」を年代別に見てみると、20代では、「ある」と回答している教諭が52.1%と、他年代と比較して割合が低くなっている。

30代で「ある」と回答している教諭は74.7%、40代では69.9%、50代では72.9%である。30代以上では、7割程度の教諭が「ある」と回答している。20代から30代にかけて、「ある」と回答している教諭の割合が急激に高くなっている。

③ 特に行き詰まりを感じた年代

「特に行き詰まりを感じた年代」を明らかにするために、現在の年代を考慮して「各年代ごとに特に行き詰まりを感じた年代」をとらえた。

<各年代の特に行き詰まりを感じた年代>



20代では「20代なかば」が圧倒的に高い。30代では「20代おわり」が一番高く、次いで「30代はじめ」が高い。40代では「40代はじめ」が一番高く、次いで「30代なかば」「30代はじめ」が高い。50代では「50代」の割合が一番高く、次いで「30代はじめ」「30代なかば」が高い。

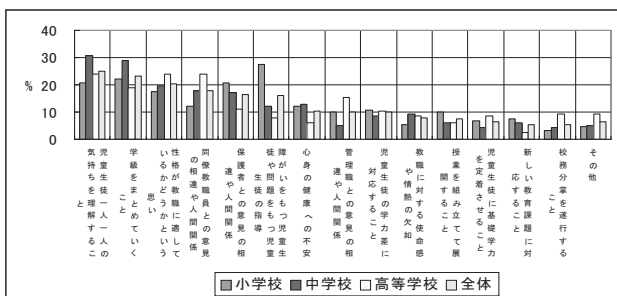
④ 行き詰まりを感じるもととなったこと

「行き詰まりを感じるもととなったこと」として教諭全体が回答している主なものは、「児童生徒一人一人の気持ちを理解すること」、「学級をまとめていくこと」、「性格が教職に適しているかどうかという思い」、「同僚教職員との意見の相違や人間関係」、「保護者との意見の相違や人間関係」である。

多くの教諭は、「生徒指導の力」を中心とした「実践的指導力」、「協調・協力・協議の能力」、「学級経営能力」、「対人関係能力」などの「経営的能力」を「行き詰まりを感じるもととなったこと」と意識している。これを「教員の資質・能力についての4つの観点」に図示すると次頁のようになる。「行き

詰まりを感じるもとなつたこと」と「教職における満足感」（4頁参照）とを比較すると、ほとんどが同じ資質・能力の項目になっている。つまり、児童生徒との信頼関係や学級集団づくりなどは、ある時は満足感になり、ある時は行き詰まり感にもなる。

<行き詰まりを感じるもとなつたこと>複数回答(2項目)



<「教員の資質・能力」についての4つの観点からとらえた「行き詰まりを感じるもとなつたこと」>

【実践的指導力】 ・生徒指導の力(児童生徒理解)(障がいや問題をもつ児童生徒の指導)	【経営的能力】 ・学級経営能力(学級をまとめる) ・協調・協力・協議の能力 ・対人関係能力(児童生徒)(保護者との関係)(同僚との関係)	【多様な資質・能力】
【基盤となる資質】 (・性格が適しているか)		

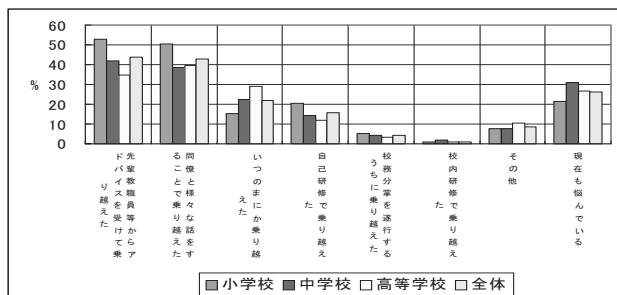
※太字の項目は、選択した割合(教諭主体)が20%以上

⑤ 行き詰まりを感じるもとなつたことをどのように乗り越えたか

「行き詰まりを感じるもとなつたことをどのように乗り越えたか」を教諭全体で見ると、「先輩教員等からアドバイスを受けて乗り越えた」、「同僚と様々な話をすることで乗り越えた」、「いつのまにか乗り越えた」、「自己研修で乗り越えた」が挙げられる。しかし、どの校種も3割弱の教諭が現在も悩んでいる。

<行き詰まりを感じるもとなつたことを

どのように乗り越えたか>複数回答



(4) 「教職に対するやりがい」と「行き詰まり感」との関連

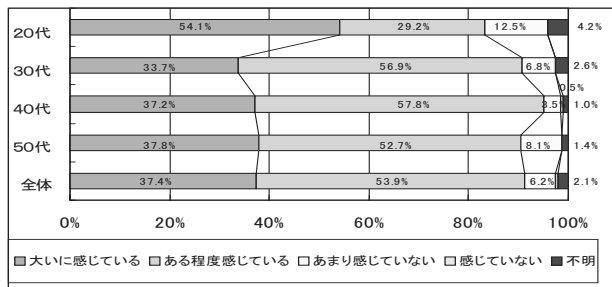
① 教職に対するやりがい

対象教諭が教職に対してどの程度やりがいを感じているかを見てみると、「大いに感じている」34.4%、「ある程度感じている」53.9%、「あまり感じていない」6.2%、「感じていない」0.4%、不明2.1%である。

年代別に見てみると、20代教諭は、他年代と比較して、やりがいを「大いに感じている」と回答している割合が高い。しかし、30代になるとその割合は低くなり、その後の年代は同程度で推移する。また、20代教諭は、他年代と比較して、「あまり感じていない」割合もやや高くなっている。

やりがいを大いに感じながら教職にあたることが、教諭自身にとっても児童生徒にとっても、より望ましいことである。やりがいを大いに感じているとまでは言えない教諭の回答の裏には、何らかの意識が関連していると考えられる。

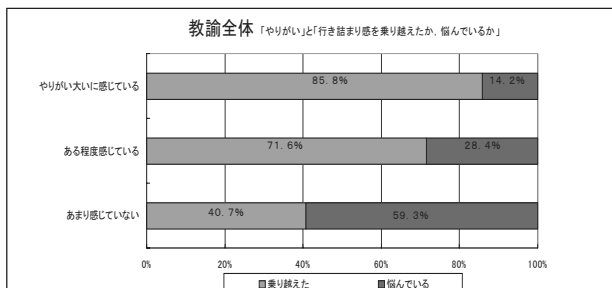
<教職に対するやりがい>



② 「教職に対するやりがい」と「行き詰まり感」との関連

「教職に対するやりがい」と「行き詰まり感を乗り越えたか、現在も悩んでいるか」との結果をクロス集計して、その関連を探ってみた。

<「やりがい」と「行き詰まり感を乗り越えたか、現在も悩んでいるか」とのクロス集計(教諭全体)>



「現在も悩んでいること」

- ・児童生徒一人一人の気持ちを理解すること
- ・学級をまとめていくこと
- ・性格が教職に適しているかどうかという思い
- ・同僚教職員との意見の相違や人間関係 等

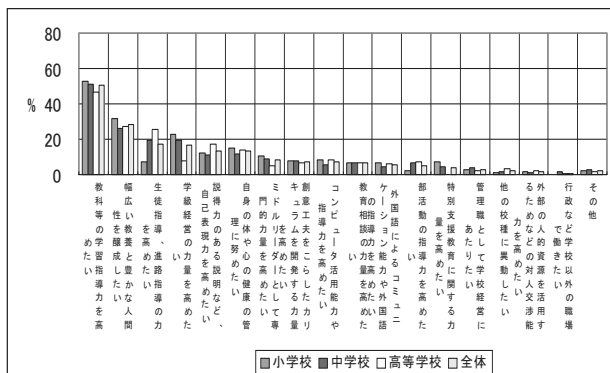
教諭全体においても、また、どの年代においても「教職に対するやりがい」を「大いに感じている」教諭は、「行き詰まり感を乗り越えた」割合が高く、「現在も悩んでいる」割合は低くなっている。逆に、「ある程度感じている」、「あまり感じていない」教諭は、「行き詰まり感を乗り越えた」割合が低く、「現在も悩んでいる」割合は高くなっている。

「やりがい」という大きな概念を「行き詰まり」という視点で見えてみると、このように「やりがいを大いに感じている」教諭は、多くが行き詰まりを乗り越え、そうでない教諭は、現在も悩んでいることが分かった。つまり、行き詰まりを乗り越えられるか、また、どのようにして乗り越えるかが、その後の教職におけるやりがいに大きな影響を与えると考える。

(5) 今後5年以内の目標

「今後5年以内の目標」としては、「教科等の学習指導力を高めたい」の割合が最も高く、多くの教諭が目標としている。次いで、「幅広い教養と豊かな人間性を醸成したい」、「生徒指導、進路指導の力を高めたい」、「学級経営の力量を高めたい」、「説得力のある説明など、自己表現力を高めたい」、「自身の体や心の健康管理に努めたい」の順である。

〈今後5年以内の目標〉複数回答（2項目）

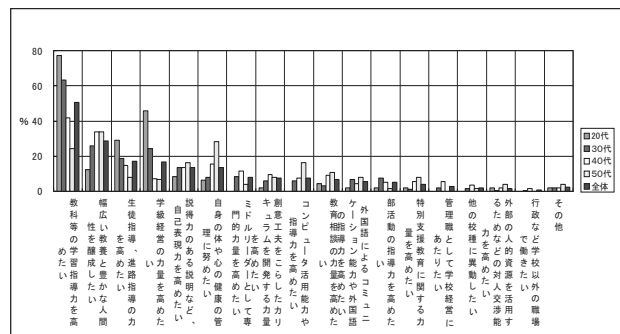


小学校教諭が選択しているのは、「教科等の学習指導力を高めたい」、「幅広い教養と豊かな人間性を醸成したい」、「学級経営の力量を高めたい」、「自身の体や心の健康管理に努めたい」の順である。中学校教諭とともに「学級経営の力を高めたい」の割合が高等学校教諭の割合より高い。

中学校教諭が選択しているのは、「教科等の学習指導力を高めたい」、「幅広い教養と豊かな人間性を醸成したい」、「生徒指導、進路指導の力を高めたい」、「学級経営の力量を高めたい」の順である。

高等学校教諭が選択しているのは、「教科等の学習指導力を高めたい」、「幅広い教養と豊かな人間性を醸成したい」、「生徒指導、進路指導の力を高めたい」、「説得力のある説明など、自己表現力を高めたい」の順である。「生徒指導、進路指導の力を高めたい」の割合が他校種より高い。

〈年代別に見る今後5年以内の目標〉複数回答（2項目）



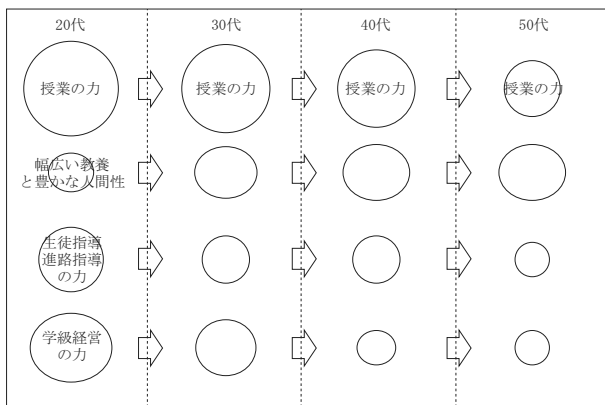
「今後5年以内の目標」を年代別に見てみると、20代の教諭は、「教科等の学習指導力を高めたい」、「学級経営の力量を高めたい」、「生徒指導、進路指導の力を高めたい」の割合が他年代より高い。

50代の教諭は、「幅広い教養と豊かな人間性を醸成したい」、「自身の体や心の健康管理に努めたい」、「コンピュータ活用能力や指導力を高めたい」の割合が他年代より高い。

年代が上がるにつれて、「教科等の学習指導力を高めたい」、「学級経営の力量を高めたい」、「生徒指導、進路指導の力を高めたい」を目標とする割合が低くなっている。逆に、年代が上がるにつれて、「幅広い教養と豊かな人間性を醸成したい」、「自身の体や心の健康管理に努めたい」を目標とする割合は高くなっている。

調査結果をもとにした年代ごとの「今後5年以内の目標」の重点の置き方を図示した。また、『「教員の資質・能力についての4観点」からとらえた「今後5年以内の目標」』を見ても分かるように、「教員として最も必要な資質・能力」として高い割合である項目が、「今後5年以内の目標」でも挙げられている。

＜調査に見る年代別今後5年以内の目標模式図＞



＜「教員の資質・能力についての4つの観点」からとらえた「今後5年以内の目標」＞

【実践的指導力】 ・授業の力 ・生徒指導の力	【経営的能力】 ・学級経営能力	【多様な資質・能力】 ・自己表現力
【基盤となる資質】 ・幅広い教養と豊かな人間性 ・体や健康の管理		

※太字の項目は、選択した割合（教諭主体）が15%以上

III 調査結果からの一提言

「やりがい」や「満足感」、「行き詰まり感」を中心とした、教職における意識を関連図に示してみた。多くの教諭は、自分の資質・能力を把握し、目標を定め、その目標達成に向けて努力する中で、時として行き詰まりを感じ、悩んでしまうことがある。行き詰まりを感じた時に、それを乗り越えられるかどうか、また、どのようにして乗り越えられるかがその後のやりがいに大きな影響を与えるものと考えられる。

行き詰まりを乗り越えるためには、自分自身の力量を高めるために自己研修に励むことが大切である。また、周りのサポートも重要である。校内の管理職や先輩教職員、同僚教職員、県や市町村の関係各機関等の組織としての支援が、行き詰まりを乗り越え

るための大きな力になる。

行き詰まりを乗り越えられた教諭は、自分の成長を自覚し、自信が深まる。また、児童生徒の成長した姿から、自分が児童生徒の成長に貢献できていることを感得することができる。さらには、行き詰まりを乗り越える過程を通して、校内では、児童生徒や他の教職員、保護者の方々との信頼関係がさらに深まり、校外では、県や市町村の関係各機関等との人的ネットワークがより強いものになると考える。

行き詰まりを乗り越えることができた教諭は、それまでの行き詰まり感もやりがいに変わることができ、さらなる高い目標を設定し、これまで以上にやりがいを感じながら取り組み、質の高い満足感を積み重ねることができる。児童生徒も、やりがいを感じながら教職に取り組む教諭の姿勢に共感し、児童生徒と教諭の信頼関係はさらに深まることと考える。

このようなことがスパイラル的に繰り返されれば、教諭の資質・能力がさらに向上し、教師として、人間として、大きく成長していくと考える。



「ふくしまの学習意識」に関する調査〈第3年次〉

教育調査チーム

I 調査の趣旨

本県における児童・生徒の生活状況及び学習に関する意識について、経年で（少なくとも5年間）現状調査を行うことによって、本県の課題を明確にし、今後の教育施策に生かす基礎資料を得ることを目的として、調査を進めた。今年度の調査は、その第3年次にあたる。

II 調査の概要

1 調査内容

- (1) 生活状況の観点から、①生活時間帯②基本的な生活習慣③余暇利用④家族との関わりの4項目
- (2) 学習に関する意識の観点から、①教科学習②教師の関わり③家庭学習の現状④自己向上の願い⑤コンピュータの利用⑥将来の目標の6項目
- (3) 保護者の子ども観の観点から、①生活時間帯②余暇利用③子どもへの関わり④家庭学習の様子⑤希望する進路⑥子どもの学習への期待の6項目
- (4) 保護者の教育行政に対する要望の観点から、①学習環境②人間性・社会性の育成③学校・家庭・地域の連携④教育行政等に要望することの4項目
上記4観点20項目の調査内容から、本県における児童・生徒の生活状況及び学習に関する意識、保護者の子ども観、保護者の教育行政等に対する要望を把握する。

2 調査方法

調査方法は、経年調査をふまえてアンケートによる回答で行った。

生活・学習状況に関する調査対象者の生活圏（従来の教育事務所単位）毎の意識を反映させるために、地域性等の社会的条件を考慮して、一昨年度抽出した小中学校各21校及び県立学校20校に調査の協力を得た。調査対象と標本数は、小学校第3学年児童・保護者974件、小学校第6学年児童・保護者1,034件（質問項目数計82）、中学校第2学年生徒・保護者1,094件（質問項目数計82）、県立学校第2学年生徒・保護者1,429件（質問項目数計87）であった。

3 調査の実際

- ◇ 4月 「ふくしまの学習意識」調査計画作成
- ◇ 5月 各関係機関への調査内容の説明及び協力依頼
- ◇ 6月 調査要項等の発送
- ◇ 7月 調査協力校でのアンケート実施（7月11日～7月19日）とアンケート用紙の回収
- ◇ 8～11月下旬 調査標本数4,531件（小3…974件、小6…1,034件、中2…1,094件、高2…1,429件）、質問項目毎（小学生、中学生82、高校生87）の集計
- ◇ 12～2月中旬 調査分析会議による調査分析
- ◇ 3月 調査結果報告書及び研究紀要へのまとめ

4 調査結果

質問項目毎の調査結果については、紙面の都合上、全て掲載することができないため、「クロス集計結果」と「過年度と今年度のデータ比較結果」のみ掲載する。なお、福島県教育センターWebサイトに詳しい調査結果を公開するので、詳細についてはご覧いただきたい。（<http://www.center.fks.ed.jp/>）

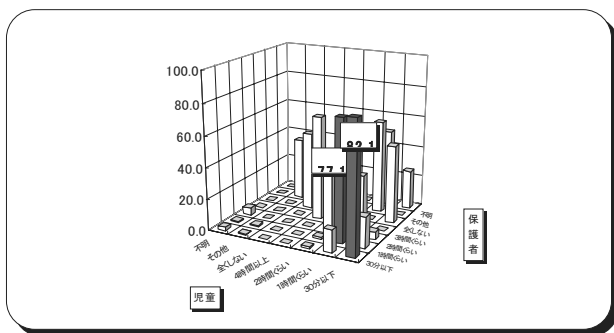
(1) クロス集計結果

平成17年度のふくしまの学習意識調査結果の中の「児童生徒と保護者の学習に関する意識」「児童生徒自身の学習に関する意識」について、児童生徒とその保護者、児童生徒自身の質問項目間で、相関関係をみるためにそれぞれクロス集計を行った。Excelアンケート太閤ver3.0を利用し、クロス集計を行った質問項目でクロスデータ値が70.0%以上の相関関係があるものを取り上げて示す。

① 児童生徒と保護者の学習に関する意識

ア. 平日の学習時間

		保護者が回答した子どもの平日の学習時間						
		30分以下	1時間くらい	2時間くらい	4時間以上	全くしない	その他	不明
児童 の 学 習 時 間	30分以下	82.1	14.3	0.9	0.0	0.0	0.4	2.2
	1時間くらい	19.8	77.1	1.3	0.0	0.0	0.9	0.9
	2時間くらい	4.8	42.9	47.6	0.0	0.0	0.0	4.8
	3時間くらい	0.0	33.3	0.0	66.7	0.0	0.0	0.0
保護 者 の 学 習 時 間	全くしない	50.0	0.0	0.0	0.0	50.0	0.0	0.0
	その他	0.0	60.0	0.0	0.0	0.0	40.0	0.0
	不明	25.0	50.0	0.0	0.0	25.0	0.0	0.0



<クロス集計結果・小学校3年生の表とグラフの例(数値は%)>

小学3年生の「1時間くらいまで」の学習時間については、児童と保護者の意識に77.1%以上の相関関係がみられる。小学6年生の「1時間くらい」の学習時間については、児童と保護者の意識に75.0%以上の相関関係がみられる。全体的なクロス集計結果をみても、校種が進むにつれ、児童生徒と保護者の意識に相関関係を示す値が小さくなる傾向がある。

イ. 休日の学習時間

小学3年生の「全くしない」と「2時間くらいまで」の学習時間については、児童と保護者の意識に72.4%以上の相関関係がみられる。小学6年生の「1時間くらいまで」の学習時間については、児童と保護者の意識に75.0%の相関関係がみられる。中学2年生の「1時間くらいまで」の学習時間については、生徒と保護者の意識に70.0%の相関関係がみられる。全体的なクロス集計結果をみても、校種が進むにつれ、児童生徒と保護者の意識に相関関係を示す値が小さくなる傾向がある。

ウ. 家庭学習の内容

小学3年生と小学6年生、中学2年生の「宿題」と「自主学習」については、児童生徒と保護者の意識にそれぞれ86.3%以上、78.2%以上、73.6%以上の相関関係がみられる。高校2年生の「宿題」については、生徒と保護者の意識に72.8%の相関関係がみられる。全体的なクロス集計結果をみても、校種が進むにつれ、児童生徒と保護者の意識に相関関係を示す値が小さくなる傾向がある。

エ. 家庭学習で大切にしていること

小学3年生と小学6年生、中学2年生の「読み・書き・計算等の知識理解を重視した学習」については、児童生徒と保護者の意識にそれぞれ94.2%、93.4%、71.1%の相関関係がみられる。全体的なクロス

集計結果をみても、校種が進むにつれ、児童生徒と保護者の意識に相関関係を示す値が小さくなる傾向がある。

オ. 進学希望先

中学2年生と高校2年生の「四年制大学まで」については、生徒と保護者の意識にそれぞれ74.0%、82.9%の相関関係がみられる。全体的なクロス集計結果をみても、校種が進むにつれ、「四年制大学」への進学についての児童生徒と保護者の意識に相関関係を示す値が大きくなる傾向がある。

カ. 学習する目的意識

小学3年生の「学習する楽しさを知るため」と「自分自身の人生を豊かにするため」については、児童と保護者の意識に74.6%以上の相関関係がみられる。高校2年生の「将来就きたい職業に役立てるため」については、生徒と保護者の意識に76.3%の相関関係がみられる。

キ. 宿題をする時の姿

小学3年生と小学6年生、中学2年生の「短い時間に集中して正確に行う姿」については、児童生徒と保護者の意識にそれぞれ78.5%、78.1%、73.2%の相関関係がみられる。全体的なクロス集計結果をみても、校種が進むにつれ、児童生徒と保護者の意識に相関関係を示す値が小さくなる傾向がある。

ク. 習い事

小学3年生の「興味や関心を高める」と「体力をつける」については、児童と保護者の意識に73.7%以上の相関関係がみられる。

ケ. 会話内容

小学3年生と小学6年生の「友達や先生のこと」については、児童と保護者の意識にそれぞれ71.3%、79.3%の相関関係がみられる。

コ. 手伝いの内容

小学3年生の「食器等の準備」「食事の後片付け」「買い物」「お風呂洗い」「洗濯物の後片付け」「弟や妹の世話」については、児童と保護者の意識に72.2%以上の相関関係がみられる。小学6年生の「掃除」「洗濯」「食器等の準備」「食事の後片付け」「お風呂洗い」「洗濯物の後片付け」については、児童と保護者の意識に71.9%以上の相関関係がみられ

る。

サ. 授業の工夫と教科指導に関する期待

小学3年生の児童の意識「話し方や説明の仕方を工夫している」「一人一人に応じた指導を工夫している」と保護者の意識「分かりやすい授業」に71.3%以上の相関関係がみられる。小学6年生の児童の意識「分かりやすい教材や実験・観察等の教具を工夫している」「自分でじっくり考えて解決する時間をつくっている」「コンピュータ等の情報機器を活用している」と保護者の意識「分かりやすい授業」に70.6%以上の相関関係がみられる。中学2年生の生徒の意識「話し方や説明の仕方を工夫している」「板書やノートの取り方を工夫している」「プリントやワークシートを工夫している」「分かりやすい教材や実験・観察等の教具を工夫している」「コース別学習を工夫している」「一人一人に応じた指導の工夫をしている」「体験的な活動の場を工夫している」「自分でじっくり考えて解決する時間をつくっている」「コンピュータ等の情報機器を活用している」と保護者の意識「分かりやすい授業」に72.5%以上の相関関係がみられる。高校2年生の生徒の意識「分かりやすい教材や実験・観察等の教具を工夫している」「コース別学習の工夫をしている」と保護者の意識「分かりやすい授業」に71.1%以上の相関関係がみられる。

② 児童生徒自身の学習に関する意識

ア. 家庭学習に関する指導と平日の学習時間

小学6年生で「図書館等の公共施設の利用の仕方について指導している」と回答した児童の81.8%が「1時間くらい」学習している。

イ. 家庭学習に関する指導と家庭学習の内容

小学3年生と小学6年生、中学2年生の家庭学習に関する指導「家庭学習の時間について指導している」「予習・復習・宿題等の学習内容について指導している」「効果的な家庭学習の仕方について指導している」「家庭学習への保護者の関わり方について指導している」「図書館等の公共施設の利用の仕方について指導している」と家庭学習の内容「宿題」に、それぞれ90.5%、73.3%、70.9%以上の相関関係がみられる。また、小学校6年生の家庭学習の指

導「家庭学習への保護者の関わり方について指導している」と家庭学習の内容「自主学習」に86.7%の相関関係がみられる。

ウ. 家庭学習に関する指導と家庭学習で大切にしていること

小学3年生の家庭学習に関する指導「家庭学習の時間について指導している」「予習・復習・宿題等の学習内容について指導している」「効果的な家庭学習の仕方について指導している」「家庭学習への保護者の関わり方について指導している」「図書館等の公共施設の利用の仕方について指導している」と家庭学習で大切にしていること「読み・書き・計算等の知識理解力の定着」に76.2%以上の相関関係がみられる。小学6年生の家庭学習に関する指導「家庭学習の時間について指導している」と家庭学習で大切にしていること「読み・書き・計算等の知識理解力の定着」に70.8%の相関関係がみられる。また、小学6年生の家庭学習に関する指導「家庭学習への保護者の関わり方について指導している」と家庭学習で大切にしていること「読み・書き・計算等の知識理解力の定着」に86.7%の相関関係がみられる。中学2年生の家庭学習に関する指導「効果的な家庭学習の仕方について指導している」と家庭学習で大切にしていること「読み・書き・計算等の知識理解力の定着」に70.0%の相関関係がみられる。高校2年生の家庭学習に関する指導「家庭学習への保護者の関わり方について指導している」と家庭学習で大切にしていること「読み・書き・計算等の知識理解力の定着」に77.8%の相関関係がみられる。

エ. 授業の工夫と学校の授業に対する意識

小学3年生の授業の工夫「体験的な活動の場を工夫している」と学校の授業に対する意識「教室の外で行う体験学習が楽しい」に79.1%の相関関係がみられる。

オ. 授業の工夫と授業が分からない時の対応

小学6年生の授業の工夫「分かりやすい教材や実験・観察等の教具を工夫している」と授業が分からない時の対応「友達に聞く」に74.2%の相関関係がみられる。中学2年生の授業の工夫「自分でじっくり考えて解決する時間をつくっている」と授業が分

からない時の対応「友達に聞く」に71.7%の相関関係がみられる。高校2年生の授業の工夫「話し方や説明の仕方を工夫している」「板書やノートの取り方を工夫している」「プリントやワークシートを工夫している」「分かりやすい教材や実験・観察等の教具を工夫している」「コース別学習の工夫をしている」「体験的な活動の場を工夫している」「自分でじっくり考えて解決する時間をつくっている」「コンピュータ等の情報機器を活用している」と授業が分からない時の対応「友達に聞く」に73.9%以上の相関関係がみられる。

カ. 苦手教科と得意になりたい教科

小学3年生で「国語」を苦手教科にしている児童は、76.4%が「国語」を得意教科にしたいと考えている。小学6年生で「算数」を苦手教科にしている児童は、76.8%が「算数」を得意教科にしたいと考えている。中学2年生で「数学」「英語」を苦手教科にしている生徒は、76.2%以上で苦手教科を得意教科にしたいと考えている。高校2年生で「数学」「英語」を苦手教科にしている生徒は、70.7%以上で苦手教科を得意教科にしたいと考えている。

キ. 平日の学習時間と平日に学習したい時間

高校2年生の平日の学習時間が「4時間以上」の生徒は、80.0%が「4時間以上」平日に学習したいと考えている。全体的なクロス集計結果をみると、中学2年生と高校2年生は、現在の学習時間より多くの学習時間を希望している傾向がみられる。

ク. 休日の学習時間と休日に学習したい時間

高校2年生の休日の学習時間が「5時間以上」の生徒は、88.9%が「5時間以上」を、「4時間くらい」の生徒は、89.3%が「5時間以上」をそれぞれ休日に学習したいと考えている。全体的なクロス集計結果をみると、小学3年生と中学2年生、高校2年生は、現在の学習時間より多くの時間を希望している傾向がみられる。

(2) 過年度と今年度のデータ比較結果

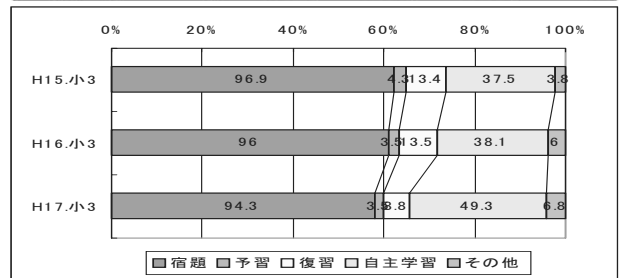
同一調査項目（81項目）について、過年度と今年度のデータを比較した。78項目については同じような傾向がみられたが、特に複数の校種に渡って、データの変化が見られた3つの調査項目のデータのみ掲

載する。

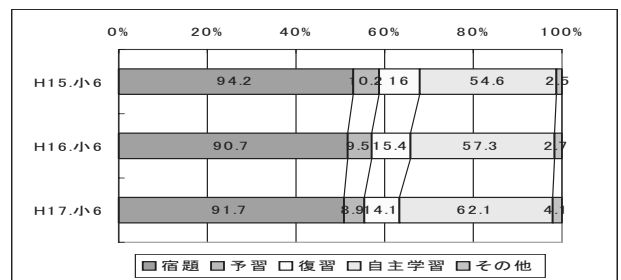
<上から平成15年度・平成16年度・平成17年度の順にデータを掲載する。>

① 家庭学習の内容（複数回答）

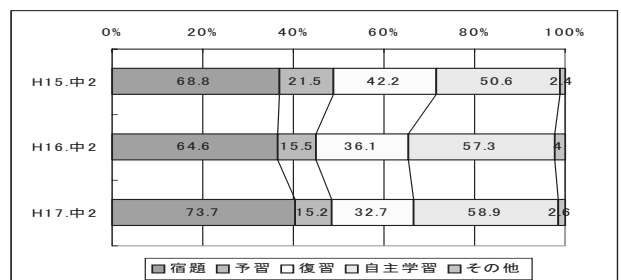
	宿題	予習	復習	自主学習	その他
小3	96.9	4.3	13.4	37.5	3.8
小6	94.2	10.2	16.0	54.6	2.5
中2	68.8	21.5	42.2	50.6	2.4
高2	64.0	28.1	26.0	34.9	8.5
	宿題	予習	復習	自主学習	その他
小3	96.0	3.5	13.5	38.1	6.0
小6	90.7	9.5	15.4	57.3	2.7
中2	64.6	15.5	36.1	57.3	4.0
高2	47.6	20.2	31.9	32.7	9.6
	宿題	予習	復習	自主学習	その他
小3	94.3	3.5	8.8	49.3	6.8
小6	91.7	8.9	14.1	62.1	4.1
中2	73.7	15.2	32.7	58.9	2.6
高2	58.1	19.6	28.8	27.4	9.5



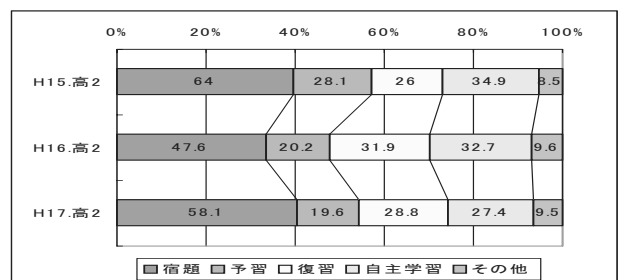
<小学3年生>



<小学6年生>



<中学2年生>



<高校2年生>

3年間の経年変化をみると、小学3年生と小学6年生は「自主学習」、中学2年生は「宿題」と「自主学習」の割合がそれぞれ増加している。高校2年

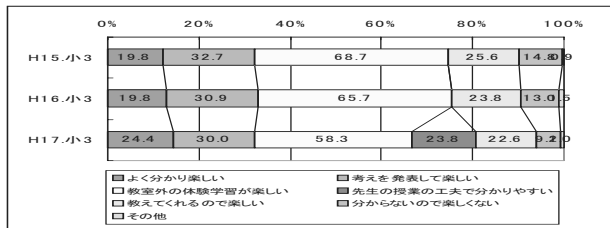
生は「宿題」の割合が年ごとに大きく変化している。平成15年度の小学6年生の調査結果と平成17年度の中学2年生の調査結果を比較すると、「宿題」の割合が減少し、「予習」と「復習」の割合が増加しており、校種ごとの特徴が出ている。

② 学校の授業に対する意識（複数回答）

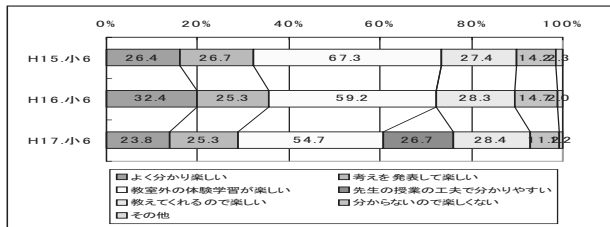
	よく分かり楽しい	考えを発表したり楽しい	教室外の体験学習が楽しい	教えてくれるので楽しい	分からないので楽しくない	その他
小3	19.8	32.7	68.7	25.6	14.8	0.9
小6	26.4	26.7	67.3	27.4	14.2	2.3
中2	25.3	13.4	52.1	22.6	26.9	7.9
高2	18.2	4.6	30.6	22.0	43.1	11.4

	よく分かり楽しい	考えを発表したり楽しい	教室外の体験学習が楽しい	先生の授業の工夫で分かりやすい	教えてくれるので楽しい	分からないので楽しくない	その他
小3	19.8	30.9	65.7	23.8	13.0	1.5	
小6	32.4	25.3	59.2	28.3	14.7	2.0	
中2	27.2	11.5	47.7	25.4	26.3	6.6	
高2	26.4	4.7	27.7	23.8	38.7	9.8	

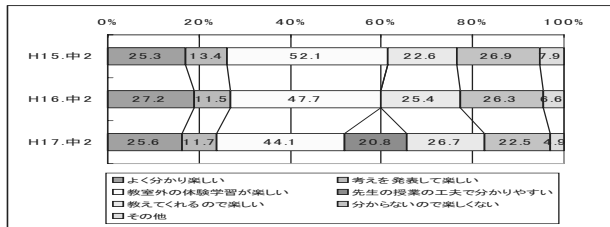
	よく分かり楽しい	考えを発表したり楽しい	教室外の体験学習が楽しい	先生の授業の工夫で分かりやすい	教えてくれるので楽しい	分からないので楽しくない	その他
小3	24.4	30.0	58.3	23.8	22.6	9.2	1.0
小6	23.8	25.3	54.7	26.7	28.4	11.2	1.2
中2	25.6	11.7	44.1	20.8	26.7	22.5	4.9
高2	20.4	3.5	20.3	13.9	27.0	37.3	10.6



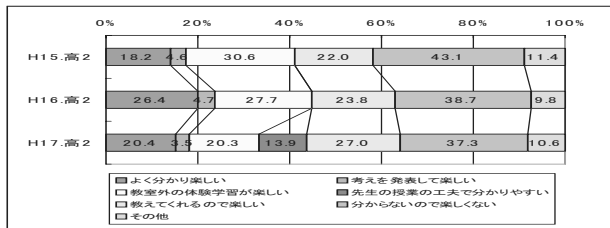
<小学3年生>



<小学6年生>



<中学2年生>



<高校2年生>

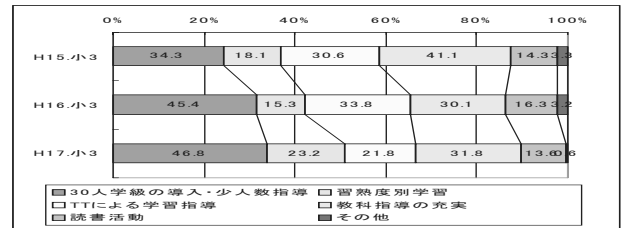
3年間の経年変化をみると、どの校種とも「教室外の体験学習が楽しい」「分からないので楽しくない」の割合が減少している。今年度の調査から回答項目に「先生の工夫で分かりやすい」を設定したが、「よく分かり楽しい」と合わせた割合から、授業内容が分かりやすいと感じている児童生徒が増加しているようだ。

③ 保護者の学習環境に対する要望（複数回答）

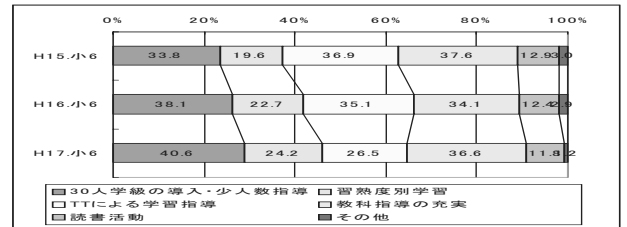
	30人学級の導入	習熟度別学習	TTによる学習指導	教科指導の充実	読書活動	その他
小3	34.3	18.1	30.6	41.1	14.3	3.3
小6	33.8	19.6	36.9	37.6	12.9	3.0
中2	37.5	25.0	35.3	35.3	12.2	0.9
高2	25.9	22.5	24.3	35.6	8.8	2.9

	30人学級の導入	習熟度別学習	TTによる学習指導	教科指導の充実	読書活動	その他
小3	45.4	15.3	33.8	30.1	16.3	3.2
小6	38.1	22.7	35.1	34.1	12.4	2.9
中2	28.6	25.6	32.9	36.4	11.3	2.1
高2	29.1	23.5	25.9	33.0	8.6	2.3

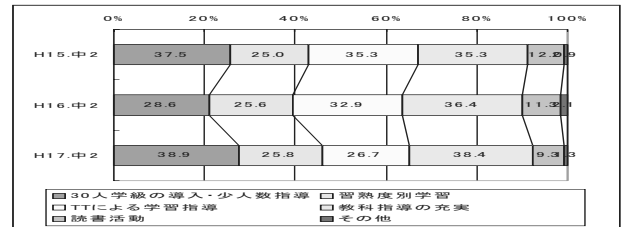
	少人数指導	習熟度別学習	TTによる学習指導	教科指導の充実	読書活動	その他
小3	46.8	23.2	21.8	31.8	13.6	0.6
小6	40.6	24.2	26.5	36.6	11.8	1.2
中2	38.9	25.8	26.7	38.4	9.3	1.3
高2	38.9	26.9	15.5	31.1	8.6	1.4



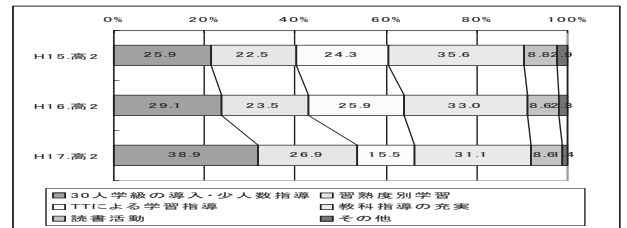
<小学3年生>



<小学6年生>



<中学2年生>



<高校2年生>

県教育委員会の方針として、平成17年度から小・中学校全学年への「30人程度学級の導入」、「TT」や「習熟度別学習」への支援が行われている。その選択は各市町村教育委員会ごとに任せられているが、3年間の経年変化をみると、保護者の要望としてどの校種とも「TTによる学習指導」の割合が減少し、「習熟度別学習」の割合が増加している。さらに、今年度の新設回答項目である「少人数指導」への期待が大きい。

Ⅲ 調査のまとめと考察

1 平成17年度の中学2年生の平日と休日の生活時間帯の平均的な姿（調査実施時期…7月）

調査データの平均値と最も多く回答した時間を基に、本県における中学2年生の平均的な生活状況を校種別に平日と休日に分けて図式化してみた。

<平日の生活時間帯の平均的な姿>

6:30起床	7:00 歯磨きや洗顔・朝食・トイレ・学習用具の準備・登校	[学校] 16:02 ~ 18:24 週 3.9 回部活動 帰宅後	テレビ(2時間)・手伝い(10分間)・読書(30分間)・宿題(1時間)	23:00就寝
		19:08 ~ 20:46 週 1.5 回習い事		

<休日の生活時間帯の平均的な姿>

起床	歯磨きや洗顔・朝食・トイレ	9:19 ~ 13:09 週 0.9 回部活動	手伝い(10分間)・読書(30分間)・宿題(2時間)	就寝
		15:33 ~ 17:23 週 0.4 回習い事	昼食・夕食・会話・相談・入浴 テレビ(2時間)	

2 平成17年度のまとめと考察

(1) 児童生徒の生活状況について

家庭内での様子をみた時、基本的な生活習慣としての歯磨きや洗顔、朝食をきちんと摂ることは、家庭での習慣付けによってか、よく身に付いている。ただ、睡眠については、校種が進むにつれ就寝時刻がおよそ1時間ずつ遅くなり、睡眠時間もおよそ1時間ずつ少なくなっていくという現状がみられた。

家庭での手伝いについては、それをしている児童生徒が55.2%~70.0%いたことから、家族の一員としての役割を果たして生活している児童生徒の姿が想像される。

困った時に相談する人は、家族の中で母親の占める割合が全体的に多い。校種が進むにつれ、父親の

関わりが少ない上に一層少なくなっており、友達等の家族以外に相談相手を求める傾向が見られた。相談内容としては、校種が進むにつれて「学習のこと」や「友達のこと」から「将来のこと」へ変化しているのが特徴的である。3年間の経年変化を見ると、昨年度の調査結果から小・中学生で「友達のこと」の相談の割合が高くなっており、人間関係作りに配慮しなければならない。

家庭の外での姿としては、目的意識をもって部活動や習い事をし、自己を高めようとしている児童生徒の姿が見える一方、何もしていない児童生徒が比較的多く、特に高校生の数値が高い。読書については、どの校種とも「自分で選んだ好きな本を読んでいる」割合が一番多いが、「全く読まない」の割合が18.1%~45.1%あった。

- 基本的な生活習慣は、よく身に付いている。
- 校種が進むにつれて、就寝時間が遅くなり、睡眠時間も短くなる。
- 家庭での手伝いはよくできており、役割を果たしている。
- 困った時に相談する人は、母親の占める割合が全体的に多い。
- 相談相手は母親が多く、校種が進むにつれて友達が増える。内容は「学習・友達のこと」から「将来のこと」に変化する。
- 目的意識をもって部活動や習い事をしている児童生徒が比較的多くいる反面、特に高校生に何もしていない生徒が多くいる。

- 「TIMSS2003」によると、日本の中学2年生の平均読書時間は0.9時間(国際平均0.9時間)であった。本県の中学2年生の平均読書時間は0.44時間であり、昨年度よりさらに0.01時間少なくなっている。昨年度実施した教育課程(届)調査によると、小・中学校では、読書を日課表に位置付けて指導している学校が多いが、家庭での読書習慣が身に付くよう今後も支援していく必要性を感じる。

(2) 児童生徒の学習に関する意識について

今年度は、児童生徒の学習に関する意識について、質問項目数を増やしたことによって、より詳細な姿が明らかになった。

学習する目的意識は、小学生は「テストで良い点

数を取りたいから」、中学生は「希望する高校や大学に入りたいから」、高校生は「将来、就きたい職業に役立てたいから」が一番多い回答であった。校種が進むにつれ、将来を見据えて学習している様子がうかがえる。児童生徒とその保護者の回答をクロス集計してみると、小学3年生では「学習する楽しさを知るため」「自分自身の人生を豊かにするため」、高校2年生では「将来、就きたい職業に役立てるため」について、児童生徒とその保護者の意識にそれぞれ74.6%以上の相関関係がみられた。小学6年生と中学2年生では、70.0%以上の相関関係はみられなかった。

家庭学習では、どの校種とも「読み・書き・計算等の知識・理解を重視した学習」を大切にしている。「読み・書き・計算等の知識・理解を重視した学習」について、児童生徒とその保護者の回答をクロス集計してみると、小学生では93.4%以上、中学生では71.1%の相関関係がみられた。高校生では、70.0%以上の相関関係はみられなかった。また、先生の家庭学習の指導では「予習・復習・宿題等の学習内容」が一番多く、児童生徒も「宿題」を58.1~94.3%の割合で一番多くしている。さらに、3年間の経年変化をみると、小学3年生と小学6年生は「自主学習」、中学2年生は「宿題」と「自主学習」の割合がそれぞれ増加している。高校2年生は「宿題」の割合が年ごとに大きく変化している。平成15年度の小学6年生の調査結果と今年度の中学2年生の調査結果を比較すると、「宿題」の割合が減少し、「予習」と「復習」の割合が増加しており、校種ごとの特徴が出ている。

家庭での学習時間は、平日の小・中学生は「1時間くらい」、高校2年生は「全くしない」、休日の小学3年生は「30分間以下」、小学6年生は「1時間くらい」、中学2年生は「2時間くらい」、高校2年生は「全くしない」が、一番多い回答であった。高校2年生で「全くしない」と回答したのが、平日では30.5%、休日では34.1%いた。

宿題については、「短い時間に集中して、正確にする」という回答が比較的多かった。限られた時間で正確性を求める意識があるようだ。予習や復習等

の家庭学習への取り組みでは、小学生は「自主的に学習している」割合が高いが、中学生になると「時間を決めるが、ただただ学習してしまう」という割合が増えている。高校生は「宿題を仕方なくしている」の割合が他校種に比べて9.7%以上多い。家庭学習に関する意識として、現在の自分自身の学習時間や学習の仕方に対する不満は、小学生よりも中学・高校生の割合が高い。

学校の授業に対する意識として、中学生までは「教室外の体験学習が楽しい」、高校2年生は「分からないことがあるのであまり楽しくない」という回答が一番多かった。3年間の経年変化をみると、どの校種とも「教室外の体験学習が楽しい」「分からないことがあるのであまり楽しくない」の割合が減少している。今年度の調査から回答項目に「先生の工夫で分かりやすい」を設定したが、「よく分かり楽しい」と合わせた割合から、授業内容が分かりやすいと感じている児童生徒が増加しているようだ。先生の授業の工夫として、小学生では「話し方や説明の仕方」、中・高校生では「プリントやワークシート」を一番工夫していると回答している。授業が分からない時の対応として、小学3年生は「先生に聞く」、小学6年生以上は「友達に聞く」という回答が一番多かったが、一方「そのままにしておく」の割合が、小学生では7.4~7.6%、中学生では14.4%、高校生では19.5%あった。学校の授業に対する意識「分からないので楽しくない」と「授業内容が分からない時の対応」をクロス集計してみると、70.0%以上の相関関係はみられなかった。高い相関関係はみられなかったが、授業内容が分からなくて楽しくないが、そのままにしている小学生が33.3~34.5%、中学生が35.0%、高校生が36.6%いた。

学習をできるようにするための意識についてみると、どの校種とも学校における授業の大切さを感じている。また、学習して良かったと感じるのは、小学3年生は「親や先生が、努力を認めてほめてくれた時」、小学6年生以上は「一生懸命に学習して成績を向上させた時」と回答している。

将来の目標については、昨年度と同様に「こんな仕事をしてみたいという目標がある」という回答が、

どの校種とも一番多く、学校や家庭で、児童生徒への適切な指導や支援があったと考えられる。

以上の様子から、児童生徒の学習意識に応えた授業や家庭学習への支援の大切さが感じられる。

- ・ 校種が進むにつれて、将来を見据えて学習している。
- ・ 家庭学習では、「知識・理解を重視した学習」を大切にしている。
- ・ 先生は「予習・復習・宿題等の学習内容」を指導しており、児童生徒も「宿題」が一番多くしている。
- ・ 宿題については、限られた時間で正確性を求めている。
- ・ 3年間の経年変化をみると、小学3年生と小学6年生は「自主学習」、中学2年生は「宿題」と「自主学習」の割合がそれぞれ増加している。
- ・ 家庭での学習時間は、中学生までは増加しているが、高校生になると減少している。
- ・ 家庭学習への取り組みでは、小学生は「自主的に学習している」割合が高いが、中学生になると「時間を決めるが、だらだら学習してしまう」という割合が増えている。
- ・ 現在の自分自身の学習時間や学習の仕方に対する不満は、小学生よりも中学・高校生の割合が高い。
- ・ 学校の授業では、中学生までは「教室外の体験学習が楽しい」、高校2年生は「分からないことがあるのであまり楽しくない」と感じている割合が多い。
- ・ 先生は、小学生では「話し方や説明の仕方」、中・高校生では「プリントやワークシート」を授業で工夫している。
- ・ 授業が分からない時には、小学3年生は「先生に聞く」、小学6年生以上は「友達に聞く」等の対応をしている。
- ・ 学習をできるようにするためには、学校における授業の大切さを感じている。
- ・ 小学3年生は「親や先生が、努力を認めてほめてくれた時」、小学6年生以上は「一生懸命に学習して成績を向上させた時」に学習して良かったと感じる。
- ・ 将来の目標については、昨年度と同様に「こんな仕事してみたいという目標がある」が、一番多い。

「TIMSS2003」によると、日本の中学2年生の宿題をする平均時間は1.0時間（国際平均1.7時間）であった。本県の中学2年生の平均学習時間は、平日1.2時間、休日1.6時間であり、昨年度より平

日0.1時間、休日0.1時間増加している。将来を見通したキャリア教育が推進され、家庭学習に対しても具体的な指導をしている効果が、学習時間や学習内容に表れてきている。

- ・ 授業内容を分からないままにしている割合について、3年間の経年変化をみると、わずかではあるが増加傾向を示している。やはり、分からなくてそのままにしている児童生徒に対して、日々の授業の中で具体的な手立てを講じる必要性を感じる。

(2) 保護者の子ども観について

校種が進むにつれ保護者は、家庭生活における児童生徒の自主性や自立性を尊重していると回答している。子どもとの会話内容では、どの校種とも「子どもの一日の出来事」が一番多く、その日の動向に関心を寄せている。児童生徒とその保護者の回答をクロス集計してみると、小学生では「友達や先生のこと」の回答項目については、71.3%以上の相関関係がみられた。その他の回答項目と中学生以上のクロス集計では、70.0%以上の相関関係はみられなかった。

子どもの学習に対しては、どの校種とも関心が高く、「就きたい職業に役立てるため」「子ども自身の人生を豊かにするため」等、将来を見据えて学習して欲しいと期待している。子どもの学習をみている人では、子どもの家庭学習に母親が中心となって関わり、必要に応じて支援を行っている様子がうかがえる。子どもの家庭学習への取り組みでは、概ね、宿題を含めて「自主的に学習している」という姿が保護者の目に映り、家庭学習については「集中して効果的な学習」「計画的、自主的な学習」という姿を期待している割合が多かった。宿題も「短時間に集中して、正確にする」への期待が多い。

学校に対しての期待では「基礎学力の定着や向上」が一番多く、願いの高さがうかがえた。教科指導に対する期待は、「分かりやすい授業」が他の回答項目に比べてとても多かった。

子どもの進学先の希望では、どの校種とも「四年制大学まで」が一番多い。どの進学先の希望でも、進学させたい理由としては、中学生までは「やりがいのある職業に就いて欲しいから」、高校生では

「子どもの希望がそこにあるから」という回答がそれぞれ一番多かった。

習い事に関する意識では、小学生までは児童と保護者の意識は「興味や関心があるから」で、ほぼ同じ傾向であったが、中学生と高校生では「勉強ができるようになりたい」という生徒の意識と「興味や関心を高めて欲しい」という保護者の意識とにずれがあった。

- ・ 校種が進むにつれ、家庭生活における児童生徒の自主性や自立性を尊重している。
- ・ 会話内容では、「子どもの一日の出来事」が一番多い。
- ・ 子どもの学習に関心が高く、将来を見据えて学習して欲しいと期待している。
- ・ 子どもの家庭学習に母親が中心となって関わり、必要に応じて支援を行っている。
- ・ 宿題を含めて「自主的に学習している」ように映り、家庭学習については「集中して効果的な学習」「計画的、自主的な学習」、宿題も「短時間に集中して、正確にする」への期待が多い。
- ・ 学校に対しては、「基礎学力の定着や向上」を期待している。
- ・ 教科指導に対しては、「分かりやすい授業」を期待している。
- ・ 「四年制大学まで」進学して欲しいと考えている。
- ・ 進学させたい理由としては、中学生までは「やりがいのある職業に就いて欲しいから」、高校生では「子どもの希望がそこにあるから」がそれぞれ一番多かった。
- ・ 習い事に関する意識では、中・高校生と保護者の意識にずれがあった。

- ・ 3年間の経年変化をみても、3年間変わらずに、どの校種とも子どもの学習に対する関心が高く、将来を見据えて学習して欲しいと期待している。子どもの学習には、母親が中心となって関わり、四年制大学まで進学して欲しいと希望している。子どもの学習への支援では、小学3年生の保護者の「学習を促し、分かるまで教える」という具体的な支援を行う割合が、30.5%、37.8%、41.1%と増加傾向を示している。

(4) 保護者の教育行政等に対する要望について

保護者の教育行政等に対する要望については、今年度も自由記述が多かった。

学習環境に対しては、「少人数指導」「教科指導の充実」への期待が大きい。県教育委員会の方針として、今年度から小・中学校全学年への「30人程度学級の導入」,「TTによる学習指導」や「習熟度別学習」への支援が行われており、その選択は各市町村教育委員会ごとに任せられている。これらの施策により、保護者の教育行政等に対する要望が実現され、少人数教育の充実によって、基礎学力の向上への期待にも応えられる可能性が高まっている。3年間の経年変化をみると、保護者の要望としてどの校種とも「TTによる学習指導」の割合が減少し、「習熟度別学習」の割合が増加している。さらに、今年度の新設回答項目である「少人数指導」への期待が大きい。

また、人間性・社会性の育成では、どの校種とも「道徳教育の充実」を期待している。さらに、学校・家庭・地域の連携については、「保護者や地域住民に学校を開いて、学校の取組みを説明すること」の大切さを感じている保護者が多かった。

Q.26の保護者の声として、学習指導の充実(回答者33名)、児童生徒の教育に直接関わる教員の人間性や指導力の向上(回答者27名)への願いが多かった。また、各市町村に対して60名、各学校に対して55名と多くの要望があり、各市町村や各学校に対する期待の大きさがうかがえた。

- ・ 学習環境に対しては、「少人数指導」「教科指導の充実」への期待が大きい。
- ・ 3年間の経年変化をみると、学習環境に対する要望は、「TTによる学習指導」の割合が減少し、「習熟度別学習」の割合が増加している。さらに、今年度の新設回答項目である「少人数指導」への期待が大きい。
- ・ 人間性・社会性の育成では、3年間とも「道徳教育の充実」を期待している割合が一番大きい。
- ・ 学校・家庭・地域の連携については、3年間とも「保護者や地域住民に学校を開いて、学校の取組みを説明すること」の大切さを感じている割合が一番大きい。
- ・ 教育行政等に対する要望についての自由記述は、福島県に対する要望が減少し、各市町村に対する要望が増加している。

学校評価研究チーム

学校評価を生かした学校組織活性化の在り方

学校評価を生かした学校組織活性化の在り方

学校評価を生かした学校組織活性化の在り方

《目 次》

I 研究の趣旨	19
1 学校評価研究のこれまでの経緯	19
2 研究テーマ設定の理由	19
II 研究の概要	20
1 学校組織に関する意識調査	20
2 学校組織活性化の手がかり	21
3 学校組織活性化の実践プログラムの作成	23
4 研究協力校に対する学校評価の支援	26
III 研究のまとめ	31
1 今年度の研究の取組み	31
2 成果	31
3 課題	32

学校評価を生かした学校組織活性化の在り方

学校評価研究チーム

I 研究の趣旨

1 学校評価研究のこれまでの経緯

(1) 学校評価実践上の課題

学校評価とは、各学校が学校としての機能をどの程度果たしているのかを明らかにして、その結果をもとに学校運営の改善を図ることである。

これまでも学校では年度初めに目標が設定され、年度末には反省が行われている。反省実施のためほとんどの学校で、アンケート調査などが実施されてきた。しかし、これまで多くの学校で行われてきた評価活動については、次のような課題が見られた。

- ① 1年間の重点目標をつくるだけで、具体的な手立てが十分考えられなかった。
- ② 調査、反省をし、結果を公表することに主眼が置かれがちであった。
- ③ 評価結果を改善に生かす動きが少なかった。

これらの課題を解決し、学校改善につながる実効ある学校評価の仕組みづくりが求められてきた。

(2) 学校改善につながる学校評価システムの確立に向けて

本チームでは、平成14年度から学校評価に関する研究を進め、平成15年度には、『学校評価の試案』の中で、学校評価（学校の自己評価）のシステムを提案した。

これは、学校が教育目標をもとに計画を立て(Plan)、実践し(Do)、自らの取組みを評価し(Check)、改善につなげる(Action)という一連のマネジメントサイクルを学校運営の中に体系付けるというものである。

(3) 学校の組織的な取組みを促す『学校経営・運営ビジョン』

さらに『学校評価の試案』では、計画の段階で『学校経営・運営ビジョン』を教職員の協働で作成し、それをもとに実践・評価することを提案してきた。(図 目標設定と『学校経営・運営ビジョン』参照)

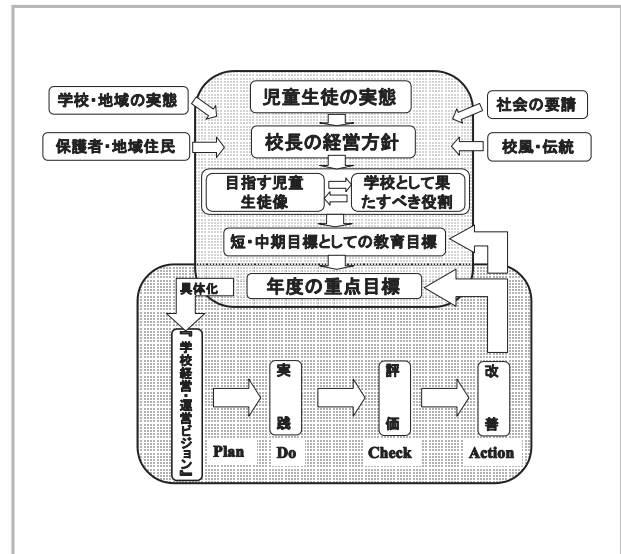


図 目標設定と『学校経営・運営ビジョン』

『学校経営・運営ビジョン』とは、教育目標を受けてその年度に実践すべき重点目標を具体化し、取組みの手立てや達成基準としての指標を示したものである。『学校経営・運営ビジョン』は、学校の取組みを保護者や地域住民に知らせる手段となるばかりでなく、教職員が教育活動に取組む際に目的意識を共有し、組織的な活動を促す役割を果たすものである。

(4) 学校の自己評価と外部評価

平成16年度に本チームは、県の学校評価モデル事業を通して研究を進め、『学校評価の実践』として外部評価の在り方について提案した。すなわち、外部評価を、外部評価員や学校評議員によって学校の自己評価システムを客観的に評価するものととらえた。

2 研究テーマ設定の理由

外部評価によって評価されるべき学校の自己評価システムは、校長の経営方針を踏まえながら、全教職員が学校の教育目標に基づいた組織的な実践や評価活動を促すものでなければならない。従って、本チームで提案してきた『学校経営・運営ビジョン』

を掲げた学校評価システムを確立することによって、学校の組織活性化につながるのではないかと考えた。

そこで本年度は組織体としての学校に焦点をあて、学校評価の取組みの中でどのように学校の組織活性化を図っていくのか、その具体的な手立てを研究することにした。

II 研究の概要

本研究では、教職員への意識調査により学校組織の実態と課題を明らかにした。また、小・中・県立学校へ訪問し、管理職や学校評価の担当者からの聞き取りを通して、学校評価による学校の組織活性化の実践事例や学校評価実施上の課題を把握した。これらの調査によって得られた実態と課題を踏まえ、学校評価を活用して組織活性化を図る手段を具体的に提案した。

さらに、福島市内の二つの研究協力校において、本チームの提案による組織活性化の手立てを組み込んだ学校評価の実践により、その有効性と課題を検証した。

1 学校組織に関する意識調査

(1) 学校組織について感じる事～学校評価研修会での声

教職員が学校組織の実態と課題をどのようにとらえているのかを明らかにするために、平成17年5月に県教育センターで行われた「学校評価研修会」の参加者（県立学校の学校評価実務担当者が対象）に、「学校組織について感じる事・考える事」についての意識調査を実施した。この調査の自由記述の部分をもとめると次のようになる。

- ① 校務の増大と負担感・多忙感（仕事の偏り・多忙感・校務の増大・複数の校務）
- ② 教職員の意思疎通と協力体制（コミュニケーションや意思疎通の難しさ・教職員の協力）
- ③ 校務や組織の見直し（従来の組織の検証や見直し・組織のスリム化）
- ④ 教職員の意識改革（教職員の問題意識や意欲の不足・保守性・外部からの刺激・開かれた学校）

⑤ リーダーシップの重要さ（管理職のリーダーシップ・組織の調整役の存在）

このように、「個人の意識」から「教職員同士の協力体制」「分掌配置や組織体系」「教職員をまとめるリーダーシップの在り方」など、学校組織について教職員が課題と感じていることが分かった。

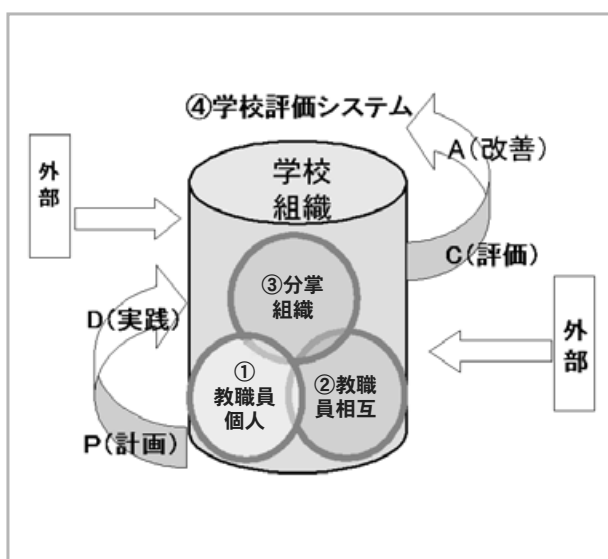
(2) 学校組織に関する意識調査の実施

① 調査のねらい

学校評価研修会の声を受け、調査対象を多様な学校・年齢層に広げ、学校組織についての教職員の意識をアンケート調査によってとらえた。そして、調査結果から課題と実態を明らかにして学校の組織活性化の手がかりを得ることにした。

② 学校組織のとらえ方

アンケート調査を進めるにあたって、学校組織を下図のように「教職員個人」「教職員相互」「分掌組織」の観点からとらえ、さらに、学校組織が評価活動によって学校改善を図ろうとする「学校評価のシステム」の機能についても調査することにした。



③ 調査の観点

ア 教職員個人

学校組織を支えているのは、学校目標の実現を意識した教職員一人一人の教育実践である。従って、教職員個人の教育活動の在り方と学校組織との関わりを調査の観点の一つ目とした。

イ 教職員相互

教育活動の多くは、教職員同士の連携で行われて

いる。従って、教職員同士の関わり合いや連携や協力関係の実態を調査の観点の二つ目とした。

ウ 分掌組織

学校全体として組織的な実践を行うために、分掌組織同士の関わりが重要である。従って、分掌組織の在り方や仕事量の適切性を調査の観点の三つ目とした。

エ 学校評価システム

学校は、日常の教育活動や学校運営において、マネジメントサイクルを機能させ、学校改善に生かされなければならない。従って、学校評価システムの機能を調査の観点の四つ目とした。

④ 調査の概要

学校組織に関する意識調査は以下のような手順で進められた。

- | | |
|--------|---|
| ア 調査期間 | 平成17年8月から9月 |
| イ 調査対象 | 県立学校10校の教職員546名
(常勤の教職員、実習教諭・実習助手・養護教諭および講師等を含む) |
| ウ 調査方法 | 4段階の評定法(SD法)で質問し、学校組織に関する自由記述欄も設けた。学校ごとに回収し、491名(回収率89.9%)の回答が得られた。 |
| エ 調査内容 | 「教職員個人」「教職員相互」「分掌組織」「学校評価システム」の4つの観点から21の項目について質問をした。 |

⑤ 調査結果と学校組織の課題

調査結果は次ページに示した**グラフ 学校組織に関する意識調査の結果(設問ごとの平均)**のようになった。

調査結果をもとに、「教職員個人」「教職員相互」「分掌組織」「学校評価システム」の4つの観点から学校組織の課題を明らかにした。

ア 教職員個人

教職員個人の取組みが学校での教育活動に反映されているという意識が、他の項目と比較して低かった。学校の教育目標に基づいた実践や振り返りの機会が少ないことや、教育目標を意識する場面があまりないことが考えられる。

イ 教職員相互

教職員が直面する学校の課題に対して他の教職員と協力しながら取り組んでいるという意識は高いが、教職員相互が力量を高め合う雰囲気があるとする回答の平均は低かった。

ウ 分掌組織

学校における組織見直しの動きがあるという回答の平均が低く、仕事量が適切で負担にならないとする回答の平均も低かった。

エ 学校評価システム

学校を変えていこうとする教職員の意識は比較的高く、学校評価の必要性についても認識していることがうかがえる。しかし、個人目標を設定する際に『学校経営・運営ビジョン』を考慮しているという割合が比較的低かった。

2 学校組織活性化の手がかり

(1) 「学校組織活性化」の具体的な手がかり

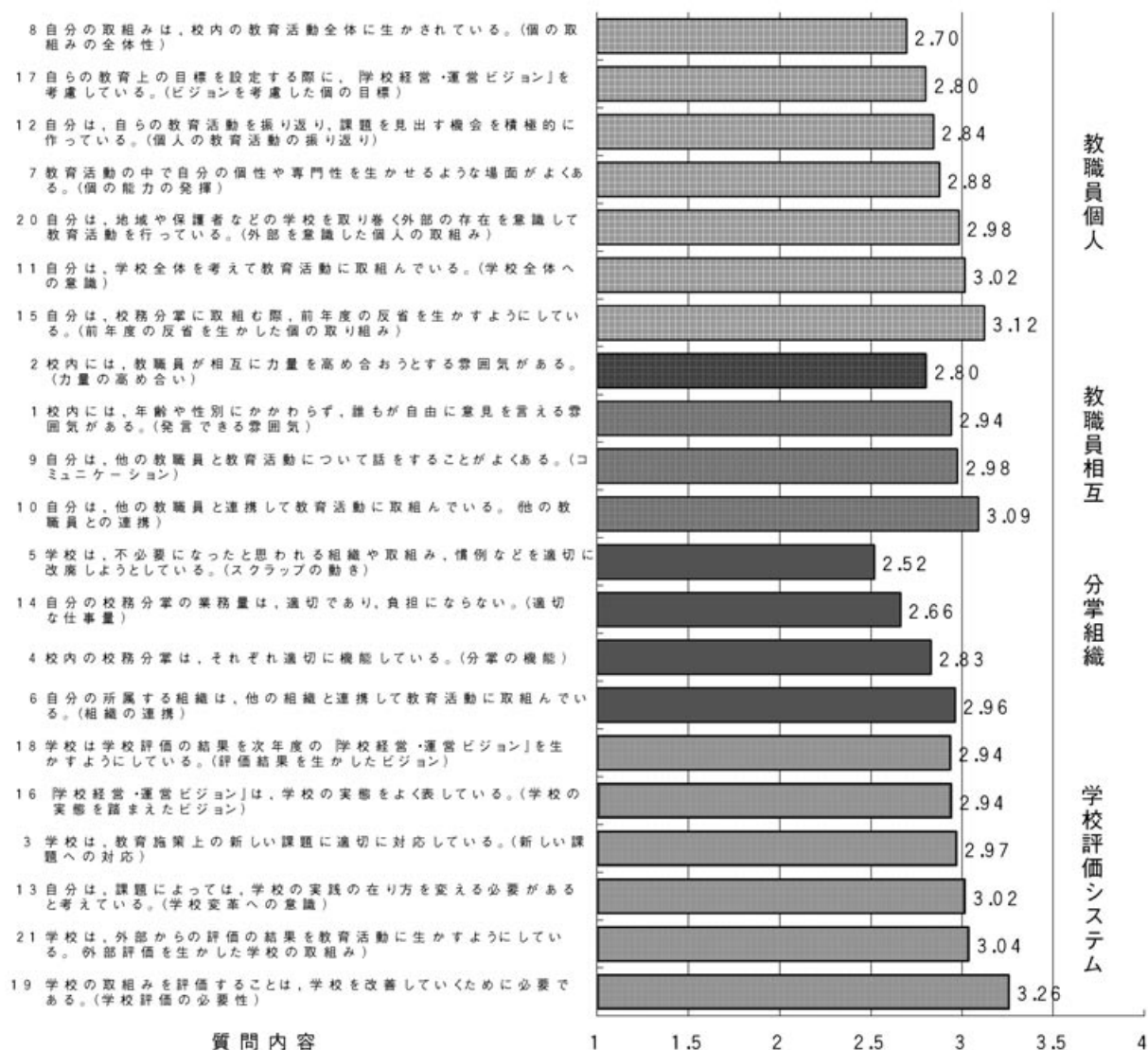
「学校の組織活性化」とは、教育目標実現に向けての教職員の意識が高まり、教職員同士または分掌組織同士の関わり合いが密になって、学校全体の取組みが活発になることであると、本チームではとらえた。そして学校組織に対する意識調査や聞き取り調査などをもとに、学校組織を活性化するための手がかりについて以下のように考察した。

① 教職員個人～教職員の学校経営への参画意識をもたすこと

教職員個人が、学校という組織の一員として自覚し、自分の仕事が教育活動全体の中でどのような意味を持っているのかを顧みる必要がある。

そこで、学校の教育目標実現のために、自分の立場で何ができるのかを考え、教職員個人が学校経営への参画意識をもてるよう、「学校経営・運営ビジョン」を受けた個人目標の設定が必要となる。

学校組織に関する意識調査の結果（設問ごとの平均）



② 教職員相互～教職員同士で課題を共有し、協働的な取組みをもたらしこと

教職員同士の協働的な取組みによって、個人の資質向上はもちろん学校組織全体としての教育力も高まっていく。「協働」とは、教職員が同じ目的に向かってそれぞれの持ち味を発揮しながら教育活動にあたることである。そのために、学校において「目標」が共有され、お互いに認め合い自己啓発し合える環境を整備していくことが必要である。

また、教職員の連携が学年や部などの分掌組織だけの小さな連携にならず、学校全体で課題を共有できるよう、「教職員のコミュニケーションづくり」や「学校の課題や取組みを話し合う場の設定」、「授業研究などOJT（On the Job Training：学校内研修）の活用」などの工夫が求められる。

③ 分掌組織～校務の見直しと組織の改廃

学校では、限られた人的環境の中でコスト意識をもって組織や校務を見直し、重複や無駄を省き、学

校の取組みをスリムにすることによって学校の重点的な取組みに力を注がなければならない。

学校全体の視点から、校務の内容を見直し、重複を排して組織の改廃を図るなど、教職員の負担が増大しないような校務分掌の整理が必要であり、「『学校経営・運営ビジョン』に基づく分掌組織の見直し」などの方策が考えられる。

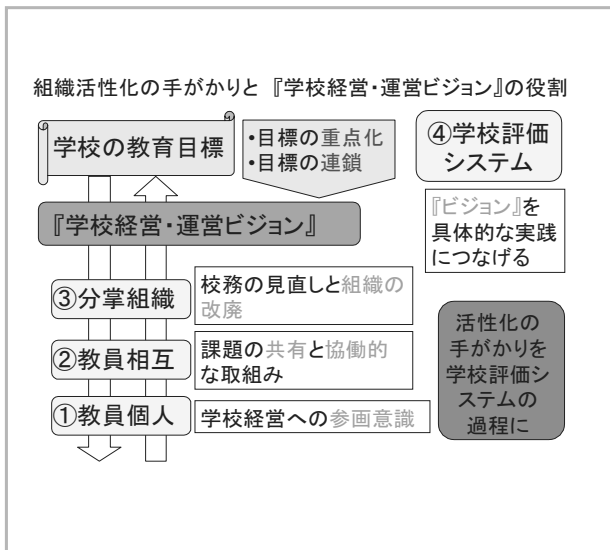
④ 学校評価システム～『学校経営・運営ビジョン』を具体的な実践につなげる

教育目標を実現するためには、分掌組織や教職員個人が教育目標を踏まえた目標を設定し、実践しなければならない。『学校経営・運営ビジョン』を作成する段階や実践、評価する段階で、個人や分掌が組織全体と関わりをもてるような学校評価システムを浸透させる工夫が必要であり、「教職員の協働による『学校経営・運営ビジョン』づくり」や「管理職のリーダーシップの発揮」などの方策が考えられる。

(2) 組織活性化のための教育目標と『学校経営・運営ビジョン』

(1)で考察した「①教職員の学校経営への参画意識」、「②教職員同士の課題の共有と協働的な取組み」、「③校務の見直しや組織の改廃」などの組織活性化の手がかりは、決してばらばらな課題意識で取り組まれるのではなく、それらを統合する一つの目標によって関連付けられなければならない。その大きな方向付けとなるのが「学校の教育目標」である。

しかし教育目標は、とかく抽象的で網羅的な内容



であり、教育目標を具体的な実践に下ろしていくためには、教育目標を「重点化」し、分掌の目標から個人の目標まで結び付けて、目標を連鎖させることが必要になる。そこで(1)④のように『学校経営・運営ビジョン』を個人や分掌組織の実践に結び付くような具体的な内容にし、全教職員の共通理解のもとで実践を進めなければならない。『学校経営・運営ビジョン』が組織活性化のために大きな役割を果たすといえる。

3 学校組織活性化の実践プログラムの作成

(1) 実践プログラム作成の目的

本チームでは、組織活性化の方策を、学校の自己評価の中に組み入れ、学校組織を活性化するための七つの実践プログラム（次のページ）を作成した。これは、学校の自己評価への取組みの中に教職員一人一人が主体的に参加する場を設けることをねらった提案である。

① 学校の教育目標に教職員が向き合う場の設定

このプログラムの実践の対象は、管理職、学校評価委員会だけにとどまらない。『学校経営・運営ビジョン』をもとに、各校務分掌や教職員一人一人が学校の教育目標の実現のためにどう関わるかを考える実践も含まれている。

② 教職員の共有の場の設定

このプログラムでは、『学校経営・運営ビジョン』の作成、実践、評価などを通して、教職員同士が、課題や目標を共有し合うことを重視した。そのために、校内研修（OJT）での演習形式の研修会や協議会などで活用できるワークシートなども作成した。

③ 実態に応じた学校評価システムの構築のために

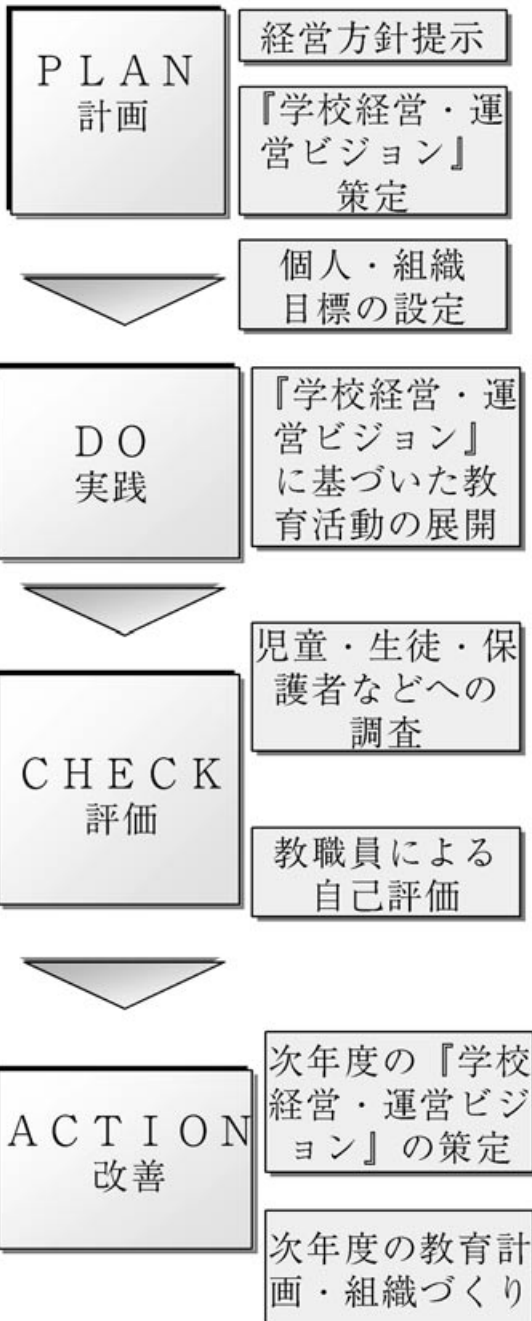
校内研修会など公式な（組織的な）話し合いの場を作り出すことだけが、この実践プログラムの目的ではない。日々の教育活動の中での非公式なコミュニケーションを促すことも、実践プログラム実施の目的の一つである。

また、学校評価実施計画や分掌組織も学校によって異なる。各学校が、それぞれの実態に応じて「組織活性化の実践プログラム」をうまく活用し、学校評価システムを自校化し、教職員の創意工夫によっ

学校評価を生かした学校組織活性化の実践プログラム

～学校評価を教職員全員の協働で進めるための提案～

学校評価への取組み



組織活性化の実践プログラム

実践プログラム1：「新規の『学校経営・運営ビジョン』づくり」（対象 管理職～学校評価委員会～校務分掌～全教職員）
 教育目標をもとに目指す学校像・学校の実態を把握しながら、グループワークなどによって教職員全員で『学校経営・運営ビジョン』を作ります。

実践プログラム2：「個人・組織目標の設定」（対象 校務分掌～全教職員）
 『学校経営・運営ビジョン』実現のために、組織として、個人として何ができるのかを具体的に考え、目標を設定します。

実践プログラム3：「調査と自己点検」（対象 学校評価委員会など）
 『学校経営・運営ビジョン』の達成状況について、既存の資料で確認できる内容と、質問紙などで調査すべき内容を分け、評価活動を簡潔にします。個人や分掌組織が、自己点検を通して絶えず計画の見直しと改善に努めます。

実践プログラム4：「調査紙づくり」（対象 学校評価委員会など）
 『学校経営・運営ビジョン』に対応させ、調査のねらいを明確にし、児童生徒、保護者が当事者意識を持つような内容にします。

実践プログラム5：「調査結果から次の実践へ」（対象 全教職員）
 学期末や中間期、年度末など適切な時期に、調査や自己点検の結果をもとに、グループワークなどによって学校の課題を明確にし、次の実践を考えます。

実践プログラム6：「『学校経営・運営ビジョン』改訂」（対象 管理職～学校評価委員会～校務分掌～全教職員）
 調査や自己点検の結果から明確になった学校の課題をふまえ、校長の経営方針に沿って、教職員全員で『学校経営・運営ビジョン』の改訂に携わります。

実践プログラム7：「分掌組織の見直し」（対象：管理職～学校評価委員会など～校務分掌）
 校務の内容・重要度・所属人数や会議の数などを総合的に判断して、校務分掌を整理し、『学校経営・運営ビジョン』が実現しやすい組織にします。

て特色ある学校づくりを可能にする。

(2) 実践プログラムの内容

以下に実践プログラム作成の目的と実践内容について概要を説明する。

① 新規の『学校経営・運営ビジョン』づくり

○ 目的

協働による『学校経営・運営ビジョン』づくりによって、各教職員が教育目標を意識することにより、組織や個人の具体的な実践を促す。

○ 実践内容

教育目標をもとに、目指す学校像・学校の実態を把握しながら、グループワークなどによって教職員全員で『学校経営・運営ビジョン』の原案を作成する。

原案を学校評価委員会などがまとめ、全体での協議を経て『学校経営・運営ビジョン』を完成させる。

② 『学校経営・運営ビジョン』に基づいた組織・個人目標の設定

○ 目的

教職員個人や分掌組織の目標を、『学校経営・運営ビジョン』によって学校の教育目標と結び付くようにし、組織的な実践を促す。

○ 実践内容

『学校経営・運営ビジョン』実現のために、分掌組織として、個人として何ができるのかを具体的に考え、目標を設定する。

ここで記入した個人目標は、教職員目標管理制度の「自己申告・自己評価票」記入の基礎資料になる。

③ 『学校経営・運営ビジョン』に対応した調査と自己点検（資料 実践プログラム3参照）

○ 目的

教育活動全般について網羅的であった調査内容の重点化を図るために、調査と自己点検すべき項目とを分類することにより評価項目を精選し、評価活動を簡素化する。

○ 実践内容

評価項目を『学校経営・運営ビジョン』に対応させる。また、『学校経営・運営ビジョン』の達成状況について、保護者や児童生徒に調査すべき部分（質問紙など）と、従来の教育活動で用いられてき

た記録や資料などをもとに学校が確認（自己点検）できる部分とに分け、評価項目を精選する。（資料 4-1）

自己点検できる部分については、短いスパンで取組みを振り返り、改善につなげる。

実践プログラム 3
『学校経営・運営ビジョン』に対応した調査と自己点検

○実践内容
調査の実施において、『学校経営・運営ビジョン』の達成状況について、質問紙などで調査すべき内容と既存の資料で確認できる内容とに分けます。

○目的
教育活動全般について網羅的に実施されてきた調査の簡略化を図るために、評価項目を『学校経営・運営ビジョン』に対応させます。その中で、保護者や児童・生徒に調査すべき部分と、従来の教育活動で用いられてきた記録や資料などをもとに学校が確認（自己点検）できる部分とに分け、評価項目を精選することによって、評価活動を簡素化します。

例えは

○ 校内での調査で確認できる事項

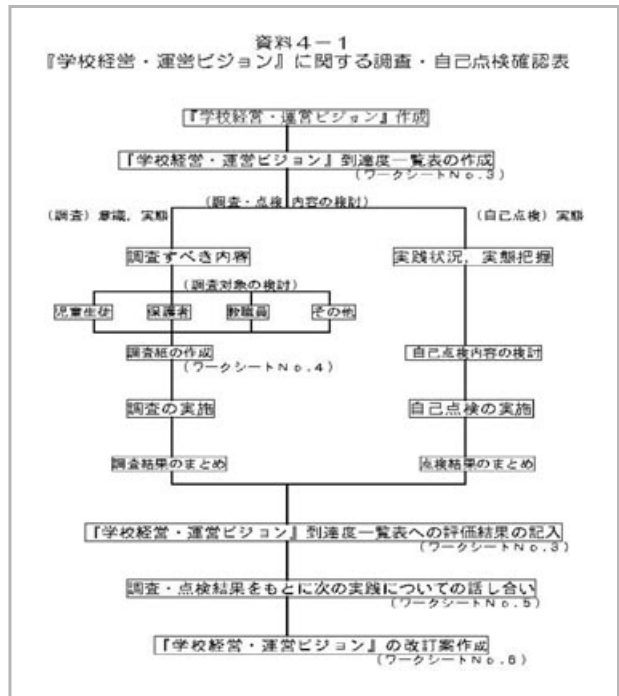
- ・校内での教育活動の短期目標や教育目標
- ・検査簿の記録
- ・各種テストの結果 など

○ 質問紙などで調査しないと分からない事項

- ・保護者や教職員に対して…
- ・子どもへの関わり方
- ・学校の取組への印象
- ・授業への取組みの実態 など
- ・児童生徒に対して…
- ・自分自身の取組みの反省
- ・学校の取組みへの印象 など

○実践の進め方
(学校評価委員会など)

- 1 『学校経営・運営ビジョン』の実践内容と達成基準を確認します。
○ワークシートNo.3『学校経営・運営ビジョン』到達度一覧表』の実践内容、基準・指標の部分に記入します。
- 2 質問紙などで調査すべき内容と既存の資料で確認できる内容とに分けます。
①次のページの資料4-1『学校経営・運営ビジョン』に関する調査・自己点検確認表』を参考に、調査すべき項目と自己点検の項目を分類します。
②調査紙で調査すべき内容については、ワークシートNo.3の調査No.に番号を記入します。
- 3 調査・自己点検実施後、ワークシートNo.3の評価（各学期や年度末）の部分に結果を記入します。
- 4 記入したワークシートNo.3をもとに、課題を見つけ出し、次年度の『学校経営・運営ビジョン』改訂の参考にします。



④ 『学校経営・運営ビジョン』に対応した調査紙づくり

○ 目的

調査内容を検討することによって、調査結果が学校の取組みの改善に生かせるようにする。

○ 実践内容

調査内容を『学校経営・運営ビジョン』に対応させ、調査のねらいを明確にし、児童生徒、保護者などが当事者意識をもつような内容にする。

⑤ 調査結果から次の実践へ

○ 目的

教職員個人の振り返りと教職員同士の話し合いによって、学校の課題を共有しながら取組みの改善に生かす。協働による『学校経営・運営ビジョン』づくりの土台を作る。

○ 実践内容

中間期や年度末に、調査や自己点検の結果をもとに、教職員個人で実践を振り返る。それをもとにグループ活動などによって学校の課題を明確にし、次の実践を考える。

⑥ 『学校経営・運営ビジョン』改訂

○ 目的

協働で『学校経営・運営ビジョン』をつくることによって、教職員の参画意識を促す。

○ 実践内容

実践プログラム5での話し合いの結果を踏まえ、校長の経営方針に沿って、教職員全員で『学校経営・運営ビジョン』の改訂に携わる。

⑦ 分掌組織の見直し

○ 目的

既存の分掌組織を見直すことによって、校務の重複や無駄を減らし、会議などの教職員の負担をできるだけ軽減する。

また、分掌組織と重点目標、実践とを対応させることによって、学校の組織をより簡素化し、『学校経営・運営ビジョン』を実現しやすくする。

○ 実践内容

校務の内容、重要度、所属人数や会議の開催数などを総合的に判断して、校務分掌を整理し、『学校経営・運営ビジョン』が実現しやすい組織を検討す

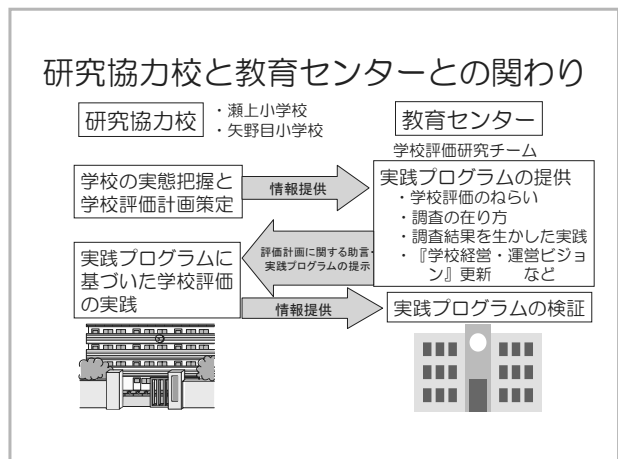
る。

4 研究協力校に対する学校評価の支援

(1) 研究協力要請の目的

本チームでは、本章の3で提案した「学校組織活性化の実践プログラム」を研究協力校の学校評価の実践に取り入れることによって、学校組織の取組みがどのように変容するのかを検証することにした。

研究協力校は、福島市立瀬上小学校と福島市立矢野目小学校の2校であり、学校評価の実施状況に応



じて課題の解決を図りながら「組織活性化のための実践プログラム」を実践した。

また、学校側の学校評価に関するさまざまな課題の解決を図りながら、学校評価の取組みが効果的に行われるよう、協議しながら研究を進めた。

(2) 瀬上小学校の実践

① 前年度までの学校評価の課題

ア 網羅的な評価内容

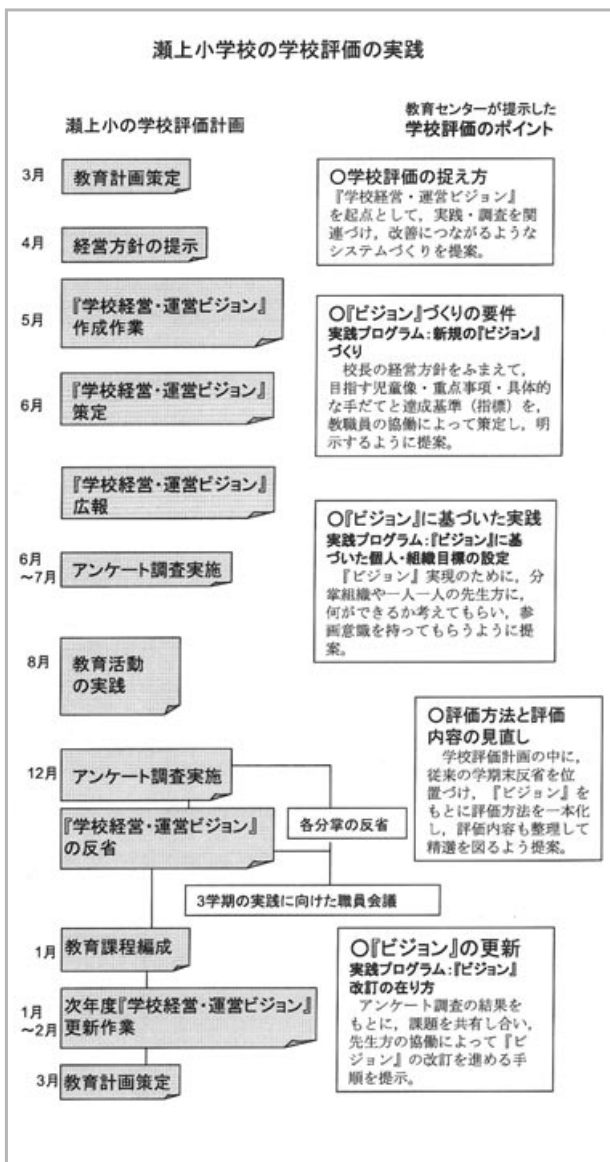
前年度も学校評価を実施し、教職員・児童・保護者への調査も行っていましたが、調査項目が網羅的で一般的な内容であった。

イ 調査結果を次年度の教育活動に生かし切れない

学期末や年度末の反省、教育課程編成会議など、従来から教職員が課題を反省する機会があったものの、学校評価の評価結果をもとにした課題の共有が十分なされなかった。また、調査結果の集計と公表に主眼が置かれ、調査内容を焦点化して改善につなげるような具体的な方策はとられていなかった。

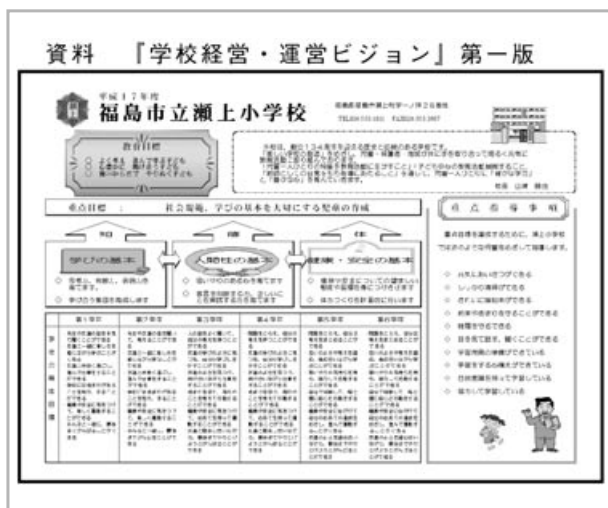
② 学校評価の実践

本チームでは、瀬上小の①のような学校評価実施上の課題を踏まえ、下の資料 瀬上小学校の学校評価の実践にあるような情報提供や組織活性化のための実践の提案を行った。これを受けて瀬上小学校では、学校評価の実践計画が作成され、『学校経営・運営ビジョン』をもとにした実践と評価、改善につながる学校評価に取り組んだ。



ア 『学校経営・運営ビジョン』づくり

学校評価委員会で当初作成された『ビジョン』は、教育計画をもとに学年ごとの目標が網羅的に並べられたもので、具体的な達成基準などは設定されていなかった。(資料『学校経営・運営ビジョン』第一版)



しかし各分掌の意見を聞きながら何度も検討を重ねた結果、最終的な『ビジョン』には具体的手立てや達成基準が掲載された。(資料『学校経営・運営ビジョン』最終版) 完成した『ビジョン』は地域や保護者への情報発信源となり、教職員の取組みの指針になった。



今年度の『ビジョン』は学校評価委員会が中心となって作成された。しかし、年度後半から『ビジョン』の重点項目ごとのグループ活動によって、次年度の実践事項が具体的に話し合われ、全教職員の協働による次年度の『ビジョン』づくりが進められた。

イ 評価結果を生かした次年度の『ビジョン』づくり

前年度までは、せっかくアンケート調査を実施しても、その調査結果を教職員全体で共有する機会が不十分で、次年度の取組みに十分生かされていなかった。

12月に実施された、2回目のアンケート調査は、1回目の調査項目と対応させ、『学校経営・運営ビ

資料 『学校経営・運営ビジョン』到達度一覧表

平成17年度 学校経営・運営ビジョン』到達度 一覧表 (4できている 3おおむねできている 2あまりできていない 1できていない)															
重点項目	実践内容	対象	基準、指標	調査番号	調査(12月)				調査結果	次年度に向けて					
					子ども	保護者	教職員	その他							
知	話を聞き、話す	1 聞くという意欲	児童	聞く児童	95%	83%	1	3.2	3.1	2.8	3.0	3.0	△目標に到達していない	更に継続して指導	
		2 話す意欲	児童	1時間に話す児童	50%	51%	2	2.9	3.2	2.7	2.9	2.9	△保護者と教職員の評価に差	意欲的に取り組む授業を工夫	
		3 思いが明確な考えを持つ	児童	考えを持つ児童	70%	68%	3	3.1	3.1	2.9	3.1	3.0	○おおむね、達成		
		4 話し合い活動の充実	教師											・活動に工夫が見られた。	
		5 児童主体の授業	教師											・主体性が育った。	
		6 教材提示、習熟度別学習	教師											※2月に学力テストを行い評価	
徳	一人一人のよさを認めあえる場	7	児童				4	3.3	3.3	3.0	3.2	3.2	○おおむね、達成		
	8 わくわくする異学年交流	児童	交流活動	月1回	0.9回		5	3.4	3.7	3.1	3.4	3.4	○特に保護者からの高い評価	回数を計画的に増やす	
	9 友達、家族、地域との関わり	教師					6	3.2	3.2	2.9	3.1	3.2	○おおむね、達成		
	10 国際理解教育	児童	実施回数	低学年	5~10	3.8		7	3.5	2.9	2.9	3.1	3.1	・保護者・教職員の評価がやや低い	目標達成に向け計画を見直し
	11 教育環境の整備	教師												△目標に到達していない	
	12 ガストティーチャーの学習	教師						8	3.3	3.1	2.9	3.1	3.2	○おおむね、達成	
体	13 ボランティア活動推進	教師												○おおむね、達成	
	14 よい子の約束	児童						9	3.0	3.0	2.6	2.9	2.9	△教職員の評価が低い	内容の見直しと実践化
	15 生活のめあて設定	教師	月ごとの設定				10	3.1	2.9	2.8	2.9	2.9	△保護者・教職員の評価がやや低い	家庭と連携し指導	
	16 家庭との連携 基本的な生活習慣	児童					11	3.1	2.9	2.6	2.9	2.8	△教職員の評価が低い	基本的習慣の具体的な指導	
	17 歯の衛生、食指導等健康教育	教師					12	3.3	2.9	2.8	3.0	3.1	・保護者・教職員の評価がやや低い		
	18 登下校の安全、新道指導	児童	街頭指導	月1回	1		13	3.5	3.1	2.8	3.1	3.1	・教職員の評価がやや低い		
め	19 校内での落ち着いた生活	児童					14	2.7	2.8	2.6	2.7	2.6	▲評価がとても低い	特に重点的に指導	
	20 体育科での個人差に応じた指導	教師					15	3.6	3.0	3.0	3.2	3.3	○おおむね、達成		
	21 図鑑本、学習カードの活用	教師											・めあてカードの推進	なわとび記録用紙等の活用	
	22 スポーツテスト結果の活用	教師											△全身持久力、筋力発力に課題	課題解決に向けた運動を計画	
	23 運動行事への積極的な参加	教師					16	3.6	3.4	3.4	3.5	3.4	○評価が高い		
	24 元気なあいさつができる	児童					17	3.1	3.1	2.8	3.0	3.0	・教職員の評価がやや低い	今後も重点的に指導	
さ	25 しっかりと清掃ができる	児童					18	3.2	2.8	2.6	2.9	2.9	△保護者・教職員の評価が低い	家庭と連携し指導	
	26 きれいに後始末ができる	児童					19	3.2	2.6	2.6	2.8	2.8	▲保護者・教職員の評価が低い	家庭と連携し重点指導	
	27 約束やまもりを守る	児童					20	3.2	3.0	2.8	3.0	3.0			
	28 時間を守る	児童					21	3.2	3.1	2.8	3.0	3.0			
	29 目を見て話す、聞く	児童					22	3.1	3.1	2.7	3.0	3.0			
	30 学習用具の準備ができている	児童					23	3.2	3.1	2.9	3.1	3.0			
ま	31 学習をする心構えができている	児童					24	3.2	3.0	2.9	3.0	3.0			
	32 目的意識を持って学習している	児童					25	3.3	2.7	2.7	2.9	3.0	△保護者・教職員の評価が低い	家庭と連携し指導	
	33 協力して学習している	児童					26	3.4	3.0	3.0	3.1	3.1	○おおむね、達成		
														・ おおむね達成しているが、教職員の評価が低め	

『学校経営・運営ビジョン』の到達状況の変容が分かるように、「『学校経営・運営ビジョン』到達度一覧表」に基づいて表を作成した。到達状況を分かりやすく示し、課題を明確にすることによって、教職員に対して課題意識を高めることができた。(資料『学校経営・運営ビジョン』到達度一覧表)

結果をもとに、グループごとに『ビジョン』改訂の話し合いを行い、教職員の協働により改訂作業を進めることができた。

③ 瀬上小学校の実践の成果

ア PDCAサイクルの視点が明確に

教育目標と実践内容とが関連付けられ、それに基づいた評価が可能になった。また、評価結果を次年度の教育課程編成に生かすというPDCAサイクルができ、評価活動が今まで以上に学校改善に有効に活用されるようになった。

イ 教職員の参画意識の高揚

『学校経営・運営ビジョン』に基づいた実践を進めることにより、教職員が学校の教育活動に対して、前向きにかつ自発的に取り組むようになった。

年度後半には、次年度の『学校経営・運営ビジョ

ン』づくりが教職員の協働によって行われ、組織的な動きも高まった。

ウ 外部への情報発信の一つに

『学校経営・運営ビジョン』を提示することにより、保護者や地域に向けて学校の取組みに対する明確な説明が可能になった。保護者からの好意的な意見も聞かれ、教職員、保護者が協力して学校づくりに関わろうという意識が高まった。

④ 瀬上小学校の実践の課題

ア 全教職員が計画的に学校評価に取り組めるような体制づくり

年度の前半は、時間的な制約によって、教職員全員による『学校経営・運営ビジョン』づくりは実現しなかった。学校の実態に応じて適切な実施時期に評価活動が行われ、全職員が関わられるような体制づくりが必要である。

イ 『学校経営・運営ビジョン』実現を図るための組織づくり

『学校経営・運営ビジョン』の実践と分掌組織とが十分に関連付けられたものとはならなかった。

3月現在、瀬上小学校では、『学校経営・運営ビ

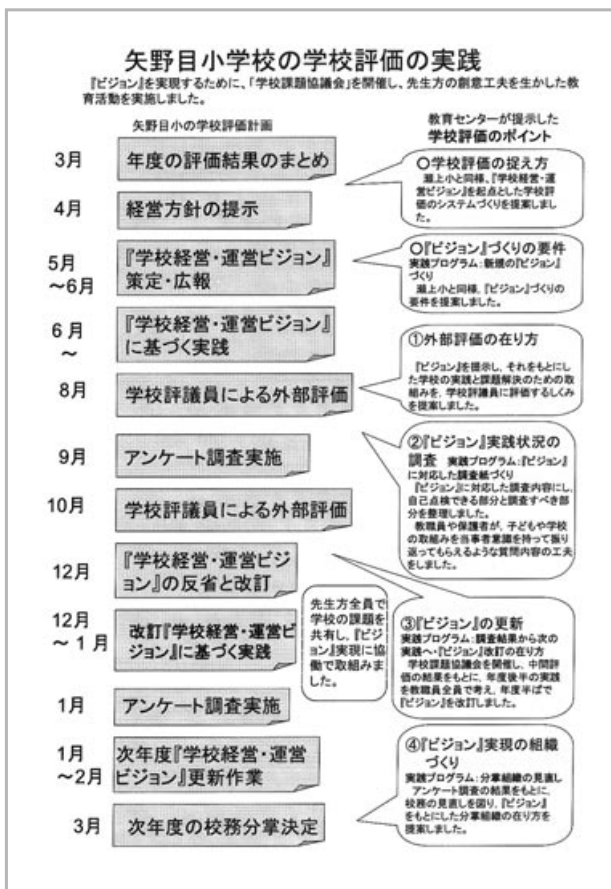
ジョン』に基づいた校務分掌組織の可能性を探っている。実践と評価と組織との整合性をもたせることによって、評価と一体となった実践が可能になると思われる。

(3) 矢野目小学校の実践

① 前年度までの学校評価の課題

ア 具体的・重点的な目標が提示されない

昨年度末に学校評価実施計画が作成され、年度初めには校長が教育活動の重点目標を保護者に説明していた。



しかし、年度の重点目標には具体的な手立てや達成基準が示されておらず、実践事項も網羅的であるなど、各校務分掌においても重点化を図った実践となりにくい状況であった。

イ 調査結果を次年度の教育活動に生かし切れない

前年度も保護者や児童対象のアンケート調査を実施し、保護者から数多くの意見を得てきたが、具体的な学校改善につなげるための教職員同士の十分な話し合いがなされなかった。評価結果を受けた対応策も抽象的なものであった。

② 学校評価の実践

本チームでは、瀬上小学校と同様、矢野目小学校の学校評価実施上の課題を踏まえ、情報提供や組織活性化のため、左図のプログラムを提案した。矢野目小学校でも、学校評価実施計画の中に組織活性化のための実践プログラムを取り入れた。

ア 『学校経営・運営ビジョン』実践状況の調査

『学校経営・運営ビジョン』を公表し、それに基づいた調査内容にすることによって改善の在り方を焦点化することができ、保護者から出された要望について具体的な対応をすることができた。

また、保護者・児童の視点に立った質問内容を工夫することによって、学校に関わる当事者としての意識を高めてもらうことができた。

資料 昨年度実施された調査紙

学校評価アンケート
一番上のお子さんの学年()年

評価項目	評価 ※1
1 お子さんは、喜んで学校へ通っていますか。	A B C D
2 お子さんは、学年相当の基礎学力を身につけていると思いますか。	A B C D
3 学校は、T・T指導※2や個別指導等、指導方法を工夫しながら分かる授業に努めていると思いますか。	A B C D

※1 評価基準 (ABCD) についての説明
※2 T・Tについての説明

上に示した資料は昨年度実施された調査(資料 昨年度実施された調査紙)であり、下の資料(資料 本年度実施された『学校経営・運営ビジョン』に対応した調査紙)は当事者意識をもつために改訂された本年度の調査紙である。

資料 本年度末に実施された『学校経営・運営ビジョン』に対応した調査紙

平成17年度 第2回 学校の取り組みに関する
お子さんの様子についてのアンケート
お子さんの学年()年

本校では今年度、次のことに関して重点的に育成を図っているところですが、保護者のみなさんから見たお子さんの様子はいかがですか。A～Dの記号でお答え下さい。
(A:とてもよくできています。 B:まあまあよくできています。 C:あまりよくできていません。 D:まったくできていません。)

お子さんの様子	A-B-C-D
1 家族や友達にやさしさやいたわりの心を持って接しています。	
2 元気な声であいさつができます。	
9 自分の思いや考えをよく話したり、絵や文に表したりします。	
10 計算などの基本的な学習内容をよく理解しています。	

自由記述(その他お気づきの点がありましたら、ご記入の上風添料にご記入下さい。責任を持って回答させていただきます。)

ご氏名()

イ 学校課題協議会の実施

調査結果をもとに、学校の課題を教職員全体で話

し合う「学校課題協議会」を実施した。まず、教職員一人一人に『ビジョン』実践の反省と課題、改善のための実践事項を考えてもらった。

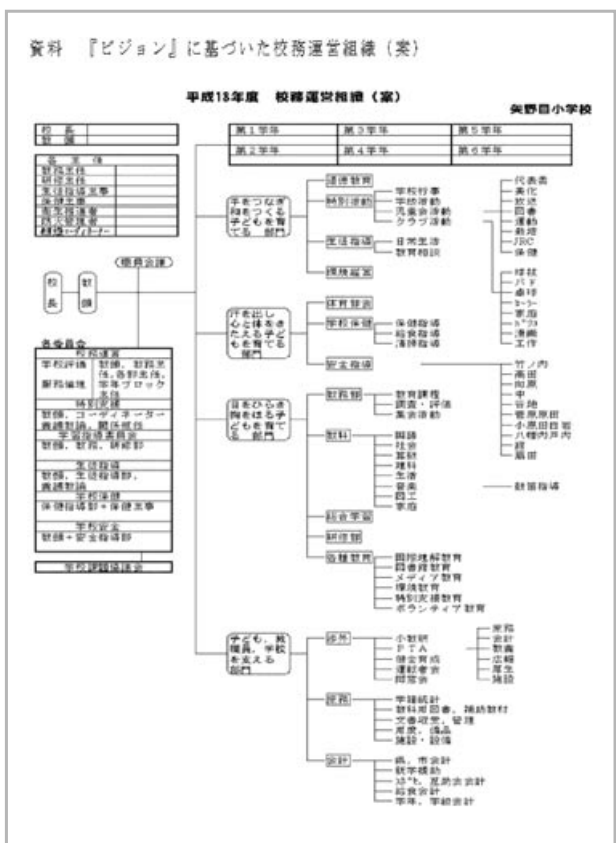
それをもとに、矢野目小学校『ビジョン』の重点項目の柱である「知」「徳」「体」のグループに分かれ、課題解決のための具体的な話し合いをした。

学校課題協議会の実施によって、個々の教職員が課題意識をもちながら、『ビジョン』の実践に取り組むことができ、教職員の協働による『ビジョン』の改訂に至った。

ウ 『学校経営・運営ビジョン』実現のための組織づくり

矢野目小学校では、教職員一人あたり5～6種類の分掌を受け持っており、日常の校務はもちろん、学期末や年度末の評価活動や教育課程編成などでも負担が多かった。

そこで、教務部が中心となって、次年度に向けて『学校経営・運営ビジョン』の重点項目の柱である「知」「徳」「体」と関連付けた分掌組織の編成が試みられている。(資料『ビジョン』に基づいた校務運営組織(案))



このような取組みによって、教育課程、実践、評価とより密接に結び付いた分掌組織づくりが可能になると思われる。

③ 矢野目小学校の実践の成果

ア 全教職員の課題の共有と協働がもたらされた

『学校経営・運営ビジョン』に基づいた学校の実践目標の明確化により、教職員一人一人の課題意識を高めることができた。

また学校課題協議会を通して、教職員全員が課題を共有しながら、協働で学校の取組みについて解決策を出し合い、具体的な実践に結び付けることができた。

イ 分掌組織の見直し

次年度に向けて『学校経営・運営ビジョン』実現のための組織となるよう校務分掌の見直しが行われ、実践と評価が一本化されようとしている。

④ 矢野目小学校の実践の課題

ア さらなる校務の見直しの必要性

教職員の負担が増大しないような組織にするためさらに校務と分掌組織の見直しが必要である。

イ 実施時期の適切性

今年度は『学校経営・運営ビジョン』策定や調査の時期が予定より遅れてしまった。『学校経営・運営ビジョン』づくりや広報、調査を適切な時期に行い、教職員が時間に追われず、学校の取組みを振り返り、改善につながるような学校評価の実施計画が必要となる。

(4) 研究協力校の実践のまとめ

① 「学校組織活性化の実践プログラム」の有効性の検証

二つの協力校の実践によって本チームが提案した「学校組織活性化の実践プログラム」の有効性を検証することができた。

二つの学校とも年度当初は管理職や学校評価委員会の活動が主体であった。しかし「学校改善に生きる学校評価」「教職員一人一人を学校づくりに巻き込んでいく学校評価」として、管理職にその意義を十分理解していただいたことから、学校組織全体の動きが次第に高まっていった。

ア 実践プログラム2「個人・組織の目標設定」と実践プログラム5「調査結果から次の実践へ」

『学校経営・運営ビジョン』や調査結果をもとに分掌組織や教職員個人が実践事項を具体的に考えることができ、教職員の学校経営への参画意識を高めることに非常に有効であることが分かった。

イ 実践プログラム6「『学校経営・運営ビジョン』改訂」

調査結果をもとに教職員一人一人が『学校経営・運営ビジョン』づくりに参加することができ、協働的な取り組みをもたらすことが分かった。

ウ 実践プログラム3「調査と自己点検」と実践プログラム4「調査紙づくり」

『学校経営・運営ビジョン』に基づいた調査内容とすることができ、評価活動がある程度スリムになることが分かった。

② 「学校組織活性化の実践プログラム」実施上の課題

ア 実践プログラム1「新規の『学校経営・運営ビジョン』づくり」

教職員全員の実践にはならず、十分な検証はできなかったが、『学校経営・運営ビジョン』の前提である教育目標・目指す学校像や学校の実態を教職員で共有することで、より深い共通理解が可能になるものと思われる。

イ 実践プログラム7「分掌組織の見直し」

二つの協力校とも次年度に向けて『学校経営・運営ビジョン』に基づいた組織づくりを行った。分掌組織を変えることによって、学校にどのような変容がもたらされるのかは、今後さらに検証を進めていく必要がある。

③ 各学校で活用できる実践プログラムに向けて

組織活性化の取り組みは、他校の実践どおりに取組めば成功するというものではない。二つの協力校とも、本チームの提案をもとに学校の実態に合わせて自校化を図ったことが、学校組織としての変容につながったものと思われる。

そういった意味から、今回提案した「組織活性化の実践プログラム」をさらに検討し、各学校でさらに活用しやすいものにしていく必要がある。

Ⅲ 研究のまとめ

1 今年度の研究の取り組み

平成14年度以降本チームでは、学校改善につながる学校評価システムの研究を進めてきた。本年度は、学校評価の組織的な実践によって教職員の意識を高め、学校組織を活性化することができるとして、学校評価を活用した組織活性化の具体的な方策について研究を進めてきた。

研究の取りかかりとして、学校評価の実務担当者や一般の教職員に対して学校組織に対する意識調査を実施し、学校組織の課題を明確にすることができた。

また、学校評価を生かして優れた実践を行っている県内の小・中・県立学校の管理職への聞き取りによって、組織活性化の手がかりをまとめることができた。さらに、組織活性化の具体的な手立てとして、「組織活性化の実践プログラム」を提案し、協力校での実践によってその有効性を検証することができた。

2 成果

本年度の研究によって、学校組織の活性化について、さまざまな校種の実践を踏まえながら、実践プログラムの提案や研究協力校での有効性の検証など、より実証的な研究ができた。

今年度の研究の成果を、「学校評価を生かした学校組織活性化の在り方～教職員の思いが創る、活力ある学校組織を目指して～」と題して、冊子としてまとめることができた。

① 『学校経営・運営ビジョン』の重要性

学校評価を生かした組織活性化を進める場合、教職員一人一人の学校経営への参画意識を高め、学校の組織的な動きを高める必要がある。

そのために、『学校経営・運営ビジョン』の作成や実践の過程で、教職員が自らの実践内容について主体的かつ具体的に考え取り組むことが、学校の組織的な動きを高めるために非常に有効であることが確認することができた。

② 目標、実践、評価の一体化の必要性

目標と具体的な実践、評価が『学校経営・運営ビジョン』に基づいて一体化されることによって、評

価活動が精選され、負担が少なく学校の改善につながる評価が可能であることも確認することができた。

3 課題

(1) 教職員目標管理制度との関わり

本県では、平成18年度から教職員目標管理制度が実施される。これは『学校経営・運営ビジョン』に基づいて個人目標を設定し、教職員一人一人がPDCAのマネジメントサイクルの視点を持ちながら実践に取り組み、絶えず自らの資質向上を図るというものである。従って、教職員目標管理制度は、学校の教育目標に対する関わりを教職員が意識しながら実践するという点で学校評価と密接な関連がある。

従って教職員目標管理制度の前提として、各学校において『学校経営・運営ビジョン』を起点とした学校評価のシステムを確立させ、組織としてのマネジメントサイクルを定着させることが急務である。

(2) 校務分掌の見直し

小手先の組織のスクラップでは、校務の抜本的な見直しにはつながらない。教職員の負担をできるだけ軽減し、教育活動の質がより向上するような校務分掌見直しの在り方についてさらに研究していくことが必要となる。

<参考文献>

- 1) 学校評価の試案—計画・実践・評価・改善の営みの確立を目指して
(福島県教育センター 2004年)
- 2) 学校評価の実践—学校の自己評価と学校評議員による外部評価 (福島県教育委員会 2005年)
- 3) 教職員目標管理制度の手引き
(福島県教育委員会 2006年)
- 4) チェックポイント・学校評価No. 1 これからの学校と組織マネジメント 木岡一明著
(教育開発研究所 2003年)
- 5) チェックポイント・学校評価 No. 4 教職員の職能開発と組織開発 木岡一明著
(教育開発研究所 2003年)
- 6) 学校経営研究「学校の組織力をどうとらえるか」
水本徳明著 (大塚学校経営研究会 2004年)

7) 学校経営品質関係資料

(三重県教育委員会 2003年)

8) 三重県教育委員会だよりVol. 13 「学校を元気にする”OJT”」 (三重県教育委員会 2003年)

9) 学校組織マネジメント研修—これからの校長・教頭等のために—

(マネジメント研修等開発会議 2004年)

10) 学校の組織運営の在り方について (作業部会の審議のまとめ)

(文部科学省中央教育審議会 2004年)

※ 今年度の研究の成果を、「学校評価を生かした学校組織活性化の在り方～教職員の思いが創る、活力ある学校組織を目指して～」と題した冊子にまとめ、各校に送付した。

〈御礼〉

本研究を進めるに当たり、多くの小中県立学校の校長、教頭、教職員の皆様に御協力いただきました。誠にありがとうございました。

情報化推進研究チーム

授業づくりにおける効果的な I T活用とその支援の在り方の研究

授業づくりにおける効果的なI T活用と
その支援の在り方の研究

授業づくりにおける効果的な I T 活用とその支援の在り方の研究

《目 次》

I 研究の趣旨	33
1 情報化の現状	33
2 これまでの研究内容	33
3 今後の取組みの方向性	34
II 研究の概要	35
1 「現職教育のテーマ」検索サイトの構築について	35
2 「総合的な学習の時間のテーマ」検索サイトの構築について	35
3 各学校のメールアドレスの収集について	36
4 「教員ネットワーク」の構築について	37
(1) 「小学校算数科教員ネットワーク」モデルの構築について	37
(2) 「小学校理科教員ネットワーク」モデルの構築について	41
III 成果と課題	45
1 成果	45
1 今後の課題	45
IV 最後に	46

授業づくりにおける効果的なIT活用とその支援の在り方の研究

情報化推進研究チーム

I 研究の趣旨

1 情報化の現状

福島県内の情報機器の設置に関して、教育用コンピュータ1台あたりの児童生徒数6.5人、高速インターネット接続率83.5%、普通教室のLan整備率62.4%と、学校など教育機関のIT環境のインフラは進められてきている。コンピュータで指導できる教員は、71.2%と全国平均74%に届いていないのが現状である。

本チームでは、ITを活用した授業改善を目的として、これまで研究の成果をコンテンツとしてWebサイトより配信している。これまでの研究が十分授業改善につながるものであるか検証するところから、本年度の研究を展開した。

2 これまでの研究内容

本チームがこれまで構築したコンテンツは次の通り。授業づくりに役立つ地域コンテンツとして「ふくしま教育情報データベース」、授業におけるIT活用の事例として「ITを活用した授業実践事例集」、指導にあったコンテンツを探すためのリンク集として「授業に役立つWebサイト集」、また、これらを集めたポータルサイト「ふくしま教育情報ねっとわーく」を公開している。さらに、学校と連携して、その支援の在り方を明らかにするため、専門家と連携した音楽科と総合的な学習の時間の実践を「先行的な授業研究」としてそのモデルを公開している。

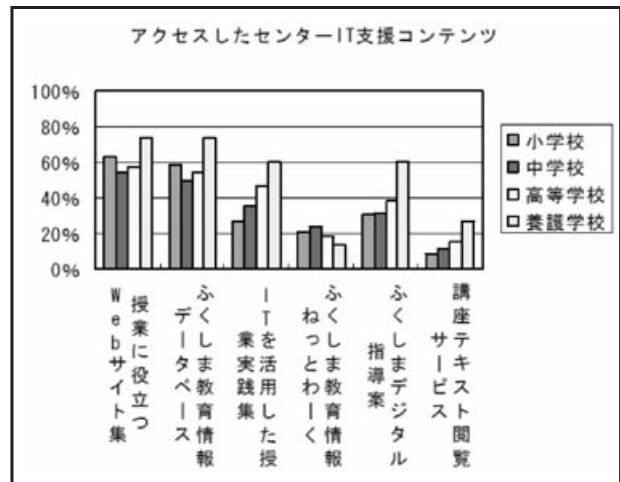
しかし、これらの活用状況については明らかではなかった。そこで、平成16年のアクセス数とリクエスト数を調べることにした。また、活用する側から見た各サイトの状況も検証することとした。

この調査の結果、多少のアクセス数、リクエスト数

・ ふくしま教育情報データベース	アクセス	約60,000件	商用で活用
・ ITを活用した授業実践事例集	・リクエスト	約23,500件	40事例
・ 授業に役立つWebサイト集	・リクエスト	約19,900件	
・ 先行的授業研究「箏創作」「祭り調べ」	・リクエスト	約21,029件	2事例
・ ふくしま教育情報ねっとわーく	アクセス	約2,000件	

は上記のように確認できた。しかし、活用状況等を考えると、コンテンツが限定されているため多様な指導に適用できないことが考えられる。また、学校からの問い合わせも少ないことから、授業に関連した積極的活用は図られていないと予想できる。

各学校からの活用を明らかにするために、情報教育チームのアンケート結果を検証した。



<アンケート結果>

このアンケートは、各学校に対し、福島県教育センターWebにアクセスした経験があるかどうかを調査したものである。例えば、上記アンケートでは、「授業に役立つWebサイト集」で約60%のアクセス経験が確認できる。これは、教員2万人の60%が接続したと解釈すれば12,000人がアクセスを経験したことになる。しかし、900校の60%の学校にアクセス経験者がいると解釈すれば、540人がアクセスを経験したと見ることができる。つまり、540人から12,000人までの幅を持った数字であると言える。

この検証から、本チームのコンテンツは、多少のアクセスはあるが、授業改善につながる活用がされたと判断しにくい状況が確認できた。活用を促進するためには、より多くの教員に、

- ・ コンテンツの存在・趣旨の理解がされること
- ・ それぞれの指導に適用できるコンテンツが多様に存在すること
- ・ 授業改善にこれらのコンテンツを活用しようとする意欲を促進すること

上記3点が重要だと考える。

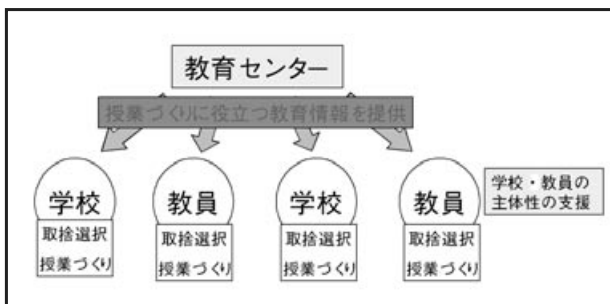
「ITを活用することが、授業改善につながるのか」という疑問を持つ教員は少なくない。これは、授業におけるIT活用が教員の要望から登場したのではないことが、根本で影響していると考えられる。さらに、ITを活用するには機器やソフトのリテラシーが必要になり、教員がそれに振り回され主体的に指導を展開できなくなるという危惧が、IT活用、また本チームのコンテンツ活用を抑制してしまう結果につながっていると見ることもできる。

3 今後の取組みの方向性

これまで示してきた研究内容の見直しから、「授業改善を目指す教員の主体的な活動を支援」という視点を研究の基盤に置くこととした。そして、側面として、教育センターと学校が双方向で情報交流することが今後の研究発展を促進すると考えた。

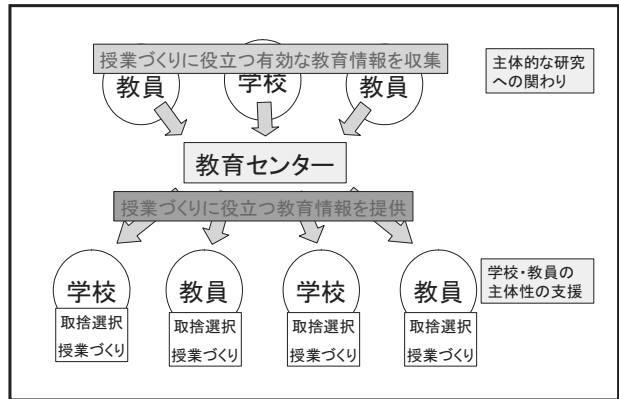
取組みとしては、教育センターが研究する側、学校は活用する側という役割の分割をやめ、共同研究・共同開発を行う。また、IT活用という「授業の中にコンピュータが登場する」イメージが強いので、この形式を改め、授業の前後まで含めたスパンでITを活用した授業改善を目指すこととした。

研究の具体的なイメージは、図2のように、教育センターから授業に役立つ教育情報を提供し、それぞれの教員が自分の目指す指導に活用できる考え方や資料を主体的に取捨選択し適用していく。これが実現できれば、授業改善を目指す教員の主体性をIT活用により支援することが可能になる。さらに、



<図2>

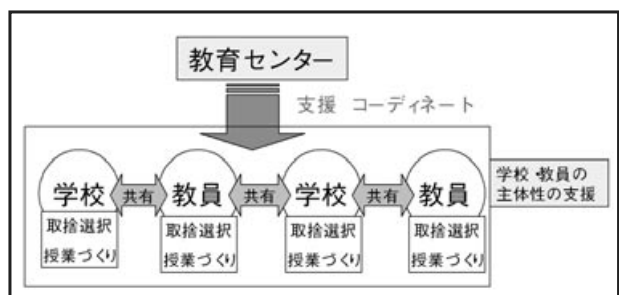
教育センターから提供する授業づくりに役立つ資料を学校や教員から収集すること(図3)で、この授業改善を目的とした研究に、より多くの教員が関わることができる。より多くの教員が研究に関わるこ



<図3>

とで、研究の存在だけでなく、その趣旨が多くの教員に理解され、研究に関わっているという意識が研究内容の活用意欲も高めると考えた。

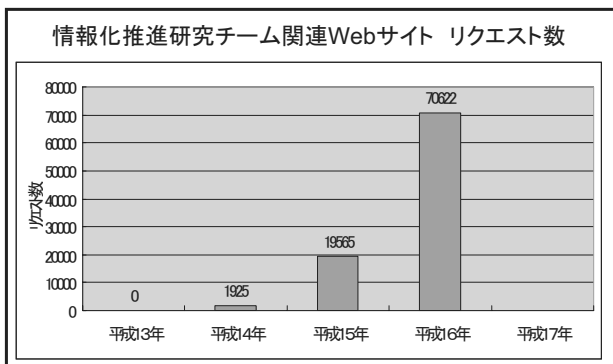
授業づくりに役立つ資料の提供、そしてこれに関わる収集を行うということは、学校や教員が互いに有効な教育情報を共有すると言い換えることができる。この共有のコーディネート教育センター(本チーム)が企画していく。(図4)



<図4>

先に示したように、この研究・企画を進めていく上で、教育センターと学校の双方向での情報交流を促進していく。指標として、本チームWebサイトへの学校からのアクセス数・リクエスト数を継続的に調査していく。この数は、これまでのコンテンツの活用状況に関連し、教育センターと学校の連携に関わっているからである。昨年の本チームWebサイト

へのリクエスト数は約7万件である。4倍増を目標にして、意義あるコーディネートを行っていきたい。



＜これまでの本チームコンテンツへのリクエスト数＞

II 研究の概要

教育センターが学校や教員の授業づくりに役立つ情報の共有をコーディネートする。そのポイントを整理すると以下の通り。

- ・ 授業改善を目指す教員の主体性を支援
- ・ 各学校や教員の協力による共同研究・共同開発
- ・ 研究や授業に役立つものに展開すること
- ・ 教育センターと学校・教員の相互連携

これらのポイントにより、今年度、以下4つのコーディネートを行った。

1 「現職教育のテーマ」検索サイトの構築について

有効な教育情報として、各学校にある現職教育のテーマに注目した。この収集により、各学校の学習



＜図5＞

指導における問題意識が明らかになる。また、各学校の研究教科、テーマ、研究方法を共有することによって学校間の研究交流が可能になると考えた。

教育センターと学校の双方向の情報交換を目的として構築していた「ふくしま教育情報ねっとわーく」にアンケートフォームを構築し、各学校に協力していただき、一覧にまとめるシステム（図5）を構築した。収集できたテーマを検索できるように加工したのが、「福島県『現職教育テーマ』検索サイト」である。



＜福島県『現職教育テーマ』検索サイト＞

例えば、「シラバス」という用語で検索すると研究している学校名、そのテーマ、研究の方法が検索でき、学校間で研究の連携が可能になる。現在、シラバスという言葉を使って研究を行っている学校数は、11校存在することもつかむことができる。

2 「総合的な学習の時間のテーマ」検索サイトの構築について

「現職教育のテーマ」検索サイト同様に、「総合的な学習の時間のテーマ」についても、収集し検索できるようにサイトを構築した。各学校にある役立つ教育情報を共有するという目的で行った。これらを収集することで、学校間の共同研究が可能になる

と考えた。

現職教育のテーマ同様、アンケートフォームを構築し、各小・中学校約800校から、学年別の主なテーマを入力していただいた。教育センターでは、加工して検索サイトにするという支援を行った。



＜総合的な学習の時間テーマ』検索サイト＞

図6の検索結果は、「川」をテーマに総合的な学習の時間の調べ学習をしている学校の検索結果である。同様の研究を進めている学校を検索できることで、地域ごとの川の状況について比較検討する学習や、上流と下流の環境を総合的に扱う交流学习に発展させることが可能になる。互いの調べ学習の発表会を開催し、発展的な学習につなげることもできる。



＜図6＞

3 各学校のメールアドレスの収集について

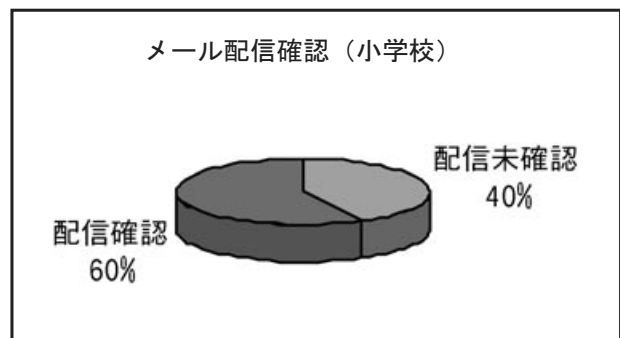
教育センターと学校、学校間の双方向での情報交換において、メールの活用は大変有効な手段である。そこで、小・中学校のメールアドレスを集めることにした。

現職教育のテーマ同様に、アンケートフォームを構築し、各学校から入力協力をいただき収集した。このアドレスを活用して、6回のメール配信を試行した。1回目は、教育センターWebサイトについての情報提供を行った。2回目には、各学校からの情報提供を要請したが、受信には積極的でも、発信には消極的であることが分かった。また、3回目には、各学校の算数科主任にメールを送ったが、唐突だったため、このメールに対する返信も少なかった。そこで、4回目には、教育センターからのメールが各学校に配信されているか確認することにした。

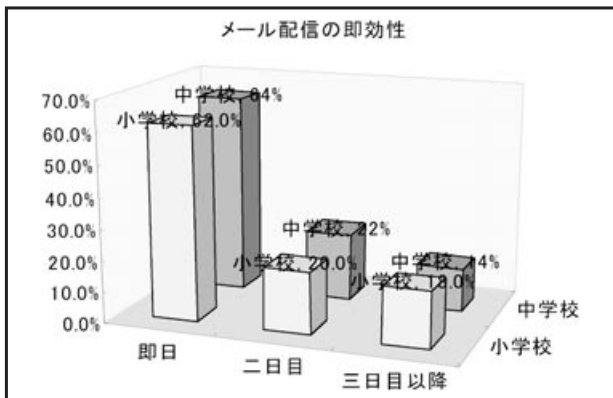


＜試行的に配信を行ったメール(一部)＞

小学校では、下図のように約60%の学校で配信を確認できた。また、この結果は中学校でも同様の結果であった。この数字は、メールアドレスの存在を意味するのではなく、常時活用しているのが60%の学校であることを意味している。



この60%の確認ができた学校のうち、60%強が即日のうちに確認の返信があった。つまり、約800校の小学校・中学校の内約480校のメールでの配信が確認でき、その内約312校はその日の内に配信が確認できたことになる。この試行でメール配信は即効性が確認できたものの、確実性に欠けることが分かった。今後、メールを活用した情報提供の確実性を高める企画を立てていきたい。

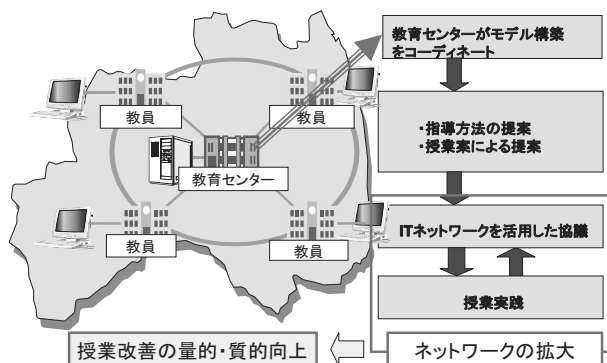


4 「教員ネットワーク」の構築について

4つ目のコーディネートとして行ったのが、「教員ネットワーク」の構築である。授業改善を目的とした研究は、より多くの教員の連携で効力を発揮すると考える。連携することで、教員のニーズが把握できるだけでなく、その研究に対する教員の意見が多ければ多いほど、常に改善・変容が行われる動的な研究として位置付くからである。この考えにITネットワークを活用することで、福島県全域の教員が参加でき、多様な指導方法の共有が可能になる。

研究イメージとしては、図7に示したように、教育センターがコーディネーターとして、モデルの構築を行う。県内全域からの教員で「教員ネットワーク」を立ち上げる。指導方法や授業案でそれぞれが提案を行い、その案を基に、ITネットワークを活用して協議を行う。さらに、その改善案で授業を実践し、その実践に基づいて改善案を再度協議する。そして、この協議の輪を広げていくことで、県内の教員の授業改善の輪を拡大させていく。

今年度、これらの研究イメージを基に、小学校算数科と理科において、「教員ネットワーク」のモデルを構築した。



<図7>

(1) 「小学校算数科教員ネットワーク」モデルの構築について

① はじめに

PISAの数学リテラシーが2000年から2003年の3年間で1位から6位に後退した。国際教育到達度評価学会（IEA）実施した国際数学・理科教育調査においても以下のような結果が示されている。

	小学校	中学校
昭和39年(第1回)	実施していない	2位/12国
昭和56年(第2回)	実施していない	1位/20国
平成7年(第3回)	3位/26国	3位/41国
平成11年(第3回追調査)	実施していない	5位/38国

(注) 小学校については4年生の成績。中学校については昭和39、56年は1年生、平成7年、11年は2年生の成績。

<文部科学省「確かな学力」子どもたちの学力の現状より>

文部科学省の数学に対する意識調査においても、年度が進むに従って、「数学が好き・大好き」が減少し、学習に対する楽しさや将来性についても、よい見通しをもっている子どもが減少している。数学離れ・理科離れといわれる現象である。

	数学が「好き」または「大好き」	数学の勉強は楽しい	将来、数学を使う仕事かしたい	生活の中で大切
平成7年	53%(68%)	46%(65%)	24%(46%)	71%(92%)
平成11年	48%(72%)	38%(-)	18%(-)	62%(-)
前回との差	△5	△8	△6	△9

(注) (-)内は国際平均値は発表されていない

<文部科学省「確かな学力」子どもたちの学力の現状より>

本チームでは、こうした状況を把握し、本チームの研究の趣旨を生かすために、「教員ネットワーク」のモデルとして、小学校算数科に焦点を当て研究を進めることとした。

② ネットワークの立ち上げ

森合小学校の宍戸与一先生を会長として、県内全域から16名の教員が参加して、算数科教員ネットワークを立ち上げた。各会員がそれぞれの思いを十分発表してもらうため、固定したテーマを決めず、それぞれが問題意識を発表して協議を進めることとした。協議の資料や意見の提示は、オンデマンド性を生かすために、「算数科教員ネットワーク」のWebサイトを構築し、ここにアクセスすることで行えるようにした。



<「算数科教員ネットワーク」のサイト>

③ 研究協議の方法

研究協議の方法は、Webサイトに掲示板を構築し、そこで行った。立ち上げ当初は、それぞれの教員が持つ課題意識を最大限に生かせるように、固定的なテーマを決めず、週2回の書き込みで、話し合いを深めていこうとした。パスワードをかけ、自由な発言が可能になるように工夫した。

④ 算数科教員ネットワークにおける研究

協議で決められたテーマは、次の通り。

- ・ 算数的考え方を授業の中で育てるために
- ・ 学習の意義を子どもたちにつかませるために
- ・ 子どもたちの問いが生まれる授業

協議を進めると、「算数的考え方を身に付ける」というテーマに研究意欲を示す参加者が多く、協議を深めることができた。算数的な考え方を身に付け

るには、どのような考え方をどのような手立てで身に付けさせるのかを、教師が明確にして授業に望まなければならないことが示されたり、片桐重男氏の理論の紹介や伴った実践が紹介されたりした。

また、学習の成立に大きく関わる学習の意義をどのようにつかませているのかを話題にしたところ、意義をつかませるのは教員側の問題であり、子どもが自分の問いを持つことの方が大切であることが確認された。そして、子どもの問いが生まれる授業を明らかにしていく必要性が確認され、実践例が提示された。

しかし、こうしたトピック的な協議は、具体的な取組みが見えないため、指導案による具体的な提案をすることになった。そこで、図8に示したように、指導案はPDF形式にして、単元名をクリックすると授業案を閲覧、印刷ができるようにした。また、単元名の右に「意見質問」へのリンクを貼り付け、質問・意見・感想が書きやすいように工夫した。

5 参加者の協議用資料(現在会員限定)

所属校	作成者名	学年	単元名	意見投稿
平一小	加藤先生	6年	立体を調べよう(授業の様子)	意見質問
森合小	宍戸先生	6年	分数のかけ算とわり算(2)(授業の様子)	意見質問
熊倉小	伊東先生	6年	比	意見質問
二本松北小	茂木先生	6年	分数のわり算(授業の様子)	意見質問
高野三小	宗形先生	5年・6年	平行四辺形と三角形の面積	意見質問
橋本北小	日下先生	指導方法論	動直線図の有効性 帯分数の実践	意見質問
山形三小	山形先生	5年・6年	垂直と平行/四角形を作る(2)(様式)	意見質問
江川小	山川先生 桑澤先生	6年	「比」1/26実施までにご意見お願ひいたします。	意見質問
河東二小	金田先生	4年	三角形の角	意見質問
小国小	渡辺先生	6年	単位量あたりの大きさ	意見質問
芳山小	渡辺先生	6年	分数(授業の様子) 比(授業の様子)	意見質問
白河一小	仁科先生	・	かけ算	意見質問
富岡二小	武内先生	5年	小数のかけ算(シラバス)	意見質問
只見小	岩淵先生	1年 2年	どちらがながい かき算(2)	意見質問

<図8>

⑤ 算数科教員ネットワークの研究の実際

教員ネットワーク参加者の実践例を紹介する。

ア) 二本松北小学校 茂木教諭の実践

茂木教諭は、算数的考え方を身に付けるには、指導者がまずこの時間に身に付けるべき考え方を明確にもっていること、そして、その身に付ける手立てを自覚すべきであることを主張している。例示された指導案は、分数の割り算の指導で、面積図と式の相関関係を扱った指導である。茂木教諭は、子どもたちの自主的な学びに焦点を当て、「なるほどタイム」というものを日常的に行っている。これは、課題に対する考えが出そろったところで、互いの机間を移動して、友達の考えを共有しようとするものである。友達の考えを見て回った後、一斉指導により、他の考えに対する意見や質問を發表し、それぞれの子どもが自らの考えを主体的に構築するのを支援しようというものである。こうした取組みは、指導案だけでは明らかになりにくく、図9に示したような実際の授業動画を指導案の中に掲載することで、協議を深めていくことができたと考える。



図9



＜掲示板への書き込み＞

授業を動画で配信することにより、実際の子どもの様子を基にした深まりのある協議が可能になったと考える。また、県内の教員にも示すことができる有効な資料として今後の活用の発展も期待できる。

イ) 森合小学校 宍戸教諭の実践

宍戸教諭は、算数科で思考力を身に付けるために、授業の中に試行錯誤を組織する。現在、何を追究しているのかを明らかにしながら、子どもたちの発想と思考の深まりを意図的に積み上げる。

次項に示す指導案では、発展的な学習内容として、「 $\square \times \bigcirc = \square - \bigcirc$ 」のきまりは成り立つかどうかの授業を行った。この課題が出された瞬間、子どもたちは静まり返り、「こうしたら、ああしたら」試行錯誤を始める。一定の時間考えた後、子どもたちから「かけると増える、引くと減るので、これは成り立たない」という発言が出る。その発言を聞いて思考刺激を受けた子どもが、「かけても減る時があるよね」とつぶやく。その言葉に刺激を受けた子どもたちが、「ああ、分かった」と計算を始める。「少数をかければ小さくなる」そこで提示された式

$$1 \times 0.5 = 1 - 0.5$$

が板書された。子どもたちはその他の例を探し出す。

7. 学習過程		時間	1 (13分)	2 (21分)	3 (11分)	4 (3分)
つ	1. 本時の学習内容を伝える。 (1) 前時の学習内容を確認する。 (2) 本時の学習内容を伝える。 (3) 本時のめあてを知る。	10	○ 前時「 $\frac{1}{2} \div \frac{1}{3}$ の計算との違いで、分子と分母が逆にならないことから本時の課題を明確にし、学習への意欲を高めるようにする。	○ T・Tで授業を行うが、T2は、主に理解に時間がかかる児童の個別指導にあたるようにする。	○ 計算するためには、わるる分数にしたり既約の式に変えたりすればよいという意識を持たせる。	
		4				
か	2. 計算のしかたを考え、意見を交換しまとめる。 (1) 各教科計算のしかたを考える。 (2) 「なるほどタイム」で友達のノートを見たり、良い方法を探す。 (3) 「なるほどタイム」で見つけた良い方法をノートに書く。 (4) 計算のしかたを話し合う。 面積図から(3)等分したから $\frac{4}{5} \div \frac{3}{5} = \frac{4 \times 5}{5 \times 3} = \frac{4}{3}$ 3でわるる分数に変えて $\frac{4}{5} \div \frac{3}{5} = \frac{4}{1.5} \div \frac{3}{1.5} = \frac{4}{1.5} \times \frac{1.5}{3} = \frac{4}{3}$ わり算の性質を使って $\frac{4}{5} \div \frac{3}{5} = \frac{4}{5} \times \frac{5}{3} = \frac{4}{3}$ $\frac{4}{5} \div \frac{3}{5} = \frac{4}{3}$	30	○ 面積図などを利用して、各自に計算のしかたを考えさせる。(1)ー ○ 友達のノートを見たり、良い方法を考えさせるようにする。その際友達と話し合わずに、各自自分で友達の考えを理解させるようにする。(1)ー ○ 発表は、一人の児童にすべてを説明させない。児童の話し合いが広がるように発問の工夫をしながら、発表させていく。 ○ 面積図と計算の式がどのように結びつくのか、グループで話し合わせる。(1)ー			
		4				
あ	3. 本時の学習のまとめをする。 (1) 本時のまとめをする。 (2) 次時の予告を聞く。 (3) 学習意欲を高める。	5	○ ノートに「学習感想」を書かせ、評価を生かすと共に、次時への指導に役立てる。(1)ー			
		12				

＜二本松北小 茂木教諭の実践例＞

茂木教諭の「では、なるほどタイムね」の一言で、子どもたちが一斉に立ち上がる様子に、日常的な取組みの成果を目の当たりにすることができる。

$$2 \times \frac{2}{3} = 2 - \frac{2}{3}$$

が示されたことにより、一般化が始まる。

$$\bigcirc \times \frac{\bigcirc}{\bigcirc + 1} = \bigcirc - \frac{\bigcirc}{\bigcirc + 1}$$

という一般化された式が板書された。迷う子どもの姿、次の瞬間には、「分かった」と追究を開始する。その繰り返して、授業は展開していく。教師は、どのタイミングで思考を刺激するか、静かな格闘が教師の頭の中を駆けめぐる。

授業者の意図としては、次の法則性に気づき、

$$\frac{1}{\bigcirc} \times \frac{1}{\square} = \frac{1}{\bigcirc} - \frac{1}{\square}$$

最終的には、

$$\frac{\bigcirc}{\Delta} \times \frac{\bigcirc}{\Delta + \bigcirc} = \frac{\bigcirc}{\Delta} - \frac{\bigcirc}{\Delta + \bigcirc}$$

という一般化をねらっていたようである。この課題解決の伏線としては、分数の引き算において、「単位分数の引き算は分母同士のかけ算で求められる」というきまりを見つける学習を経験していた。

$$\frac{1}{2} - \frac{1}{3} = \frac{1}{2 \times 3} = \frac{1}{6}$$

上記の計算の例から、下の計算のきまりを一般化により見つけ出している。この学習の適用が図られるかということが授業の見所であったと考える。

$$\frac{1}{\bigcirc} - \frac{1}{\bigcirc + 1} = \frac{1}{\bigcirc \times (\bigcirc + 1)}$$

指導案と動画により、上記のような解釈が可能になる。また、子どもたちの思考の様子と教師の補助発問のタイミングを動画で閲覧することができるので、今後、発展的活用が可能になると考える。

この授業における教員ネットワーク参加者の協議は、深まりを見せるまでにはならなかった。しかし、このように取り組めば、子どもたちの思考が深まること

が期待できることは共通理解できたと考える。また、宍戸学級の子どもたちが、計算のきまりを見つけようとする姿勢をもっていること、自力解決の意欲が高いことも驚くべき事実として認識されたと考える。

5 本時の学習指導

(1) 本時のねらい

- かけてもひいても答えが等しい分数どうしの組み合わせを見つけ、そのきまりについて考えることができる。

(2) 展開

学習活動・内容	時間	「わかる・できる」を実感させるための平たて
1 かけてもひいても答えが等しくなる計算があるか考える。 次式の成り立つ場合はあるでしょうか。 $\square \times \square = \square - \square$	10分	○ かけ算とひき算の答えが一致する計算があるかどうか仮仮けることで、整数の乗法と減法の関係では、成り立たないことに気づかせる。 ○ 1より小さい数をかけると積はかけられる数より小さくなることを確認させる。
2 分子が1のかけ算、ひき算と計算して気づいたことを話し合い、問題を設定する。 $\frac{1}{3} - \frac{1}{4} = \frac{1}{12}$ $\frac{1}{3} - \frac{1}{4} = \frac{1}{12}$	15分	○ かけ算とひき算の答えが一致することがある分数計算の不思議さ、おもしろさを感じさせる。他の分数の組み合わせでも成り立つことがあるのではと追究意欲を高め、課題につなげていくようにする。 ○ 1学期に学習した「単位分数のひき算」について確認し、何かきまりがありそうかどうか思いをまとめていきたい。
3 $\frac{1}{\square} - \frac{1}{\square} = \frac{1}{\square}$ $\frac{1}{\square} - \frac{1}{\square} = \frac{1}{\square}$ 分子が1の分数でかけてもひいても等しい数になる組み合わせを見つけ、気づいたことを話し合う。	8分	○ 成り立つ計算や成り立たない計算をすべて計算することで、どんなときに成り立つかを見つけやすくする。 ○ 分子が1の分数で成り立つことから、分子を2や3にしたもどうなるかと実験させたい。
(成り立つ例) $\frac{1}{4} - \frac{1}{8} = \frac{1}{8}$ $\frac{1}{4} - \frac{1}{8} = \frac{1}{8}$ $\frac{1}{6} - \frac{1}{12} = \frac{1}{12}$ $\frac{1}{6} - \frac{1}{12} = \frac{1}{12}$ ・分子の数字は1通り ・ $\square - \square = 1$		(成り立たない例) $\frac{1}{4} - \frac{1}{4} = 0$ $\frac{1}{4} - \frac{1}{4} = 0$ $\frac{1}{4} - \frac{1}{2} = \frac{1}{4}$ $\frac{1}{4} - \frac{1}{2} = \frac{1}{4}$ ・分子が1でなくてもできる ・分子の数字の差が分子になっている
4 本時の学習を振り返り、まとめる。	5分	○ 見つけられない子どもには、友達の見つけた式を確かめさせる。 ○ いくつかの式を挙げて、 \square と \square の間にあるきまりを見つけ、自分なりに整理することができる。
5 本時の学習の変化に留意させて、わかったことや気づいたことをまとめる。	5分	

＜森合小学校 宍戸教諭の実践例＞

ここで紹介した授業案と授業動画は一部である。それぞれの授業のよさを共有していきたい。

⑥ 成果と課題

教員ネットワークの研究を通して、県内の先生方が授業づくりに役立てることができた実践的な資料を数多く集めることができた。動画の掲載により、指導案の意図が実際の授業でどのような効果につながるか検証できることも分かった。

会員の協議では、貴重な書き込みにより意見を提示していただいている。しかし、指導方法の改善につながるような協議が十分実現できていないとはいえない。実際に顔を会わせての協議ではないため互いの考えがよくつかめないことが原因の1つである。

指導方法の改善につながる深まりのある協議を実現するには、教員と教員との意志の疎通が基盤となる。今後、顔を合わせた実践報告会等を企画し、基盤の構築を図っていききたい。また、教科毎に多様なテーマに基づいた小集団による協議の場を設定し、「教員ネットワーク」を充実させていきたい。

(2)「小学校理科教員ネットワーク」モデルの構築について

① はじめに

理科に対し苦手意識を持つ小学校教員は少なくない。本センターの小学校教員に対する基本研修においても、下表のように理科の受講を選択する研修者は、国語や算数に比べ極端に少なく「小学校教師の理科離れ」とも呼べる現象が起き始めている。

○初任者研修

	国語	社会	算数	理科
平成16年度	24	14	50	17
平成17年度	25	12	43	10

○経験者研修Ⅰ（郡山市立学校教諭を除く）

	国語	社会	算数	理科
平成16年度	15	5	19	3
平成17年度	21	6	28	5

○経験者研修Ⅱ（郡山、いわき市立学校教諭を除く）

	国語	社会	算数	理科
平成16年度	21	6	70	16
平成17年度	56	13	64	11

【小学校基本研修における教科ごとの受講者数】

※4教科から1教科を研修者が選択

また、本県における単学級及び複式学級の小学校（6学級以下）は全体の半数を超している（平成17年4月現在）。高等学校や中学校とは異なり、毎日の授業に関する素朴な疑問等を周囲に気軽に相談することができない、という小学校の現状がうかがえる。

これらを踏まえて、理科教員ネットワークでは会員相互の指導力の向上を目指すとともに、県内の小学校教員がすぐにでも参考にすることができるコンテンツの開発を目指した。

② ネットワークの立ち上げ

活発で充実した協議を期待するためには、参加者が議題に対してある程度の造詣をもつ必要がある。そこで理科教員ネットワークでは立ち上げに際し、日本初等理科教育研究会福島支部に会員の推薦を依頼した。こうして推薦された方の中から、趣旨に賛

同された県内17名の教諭を初期の会員として、活動を開始した。

③ 研究協議の方法

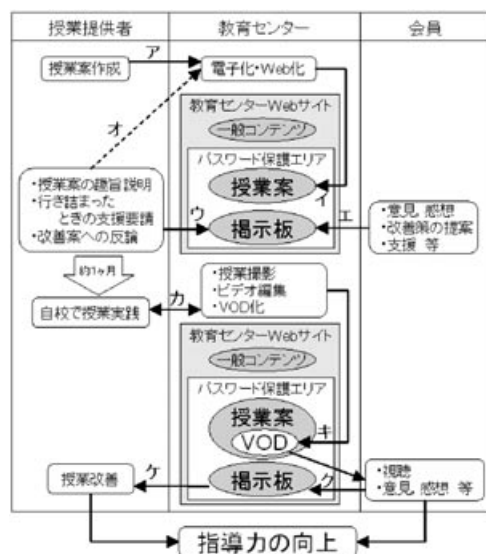
一般に小学校の校内研究は、

- i) 授業案を基に事前協議を行い、
- ii) 授業を実施して（授業者以外は参観して）、
- iii) 事後協議で成果と課題を検証する。

といった順序で行われることが多く、多くの小学校教員がこの方法に慣れ親しんでいる。そこで理科教員ネットワークにおける研究協議の方法もこれに倣い、インターネットを通じた協議という初めての経験においても、会員が抵抗なく参加できるように配慮した。

④ 理科教員ネットワークにおける研究

理科の授業において「今日は・・・について調べましょう」といった、教師が課題を一方的に与える授業からの脱却のためや、児童の興味関心を高めるためには、事象提示を工夫することは有効であると言われている。そこで、理科教員ネットワークでは会員がそれぞれ得意とする事象提示を提供し合い、それらの改善を目的としてインターネット上で協議を行うことにした。さらに事後検証のために授業をVOD*1化し、会員が都合の良い時間に授業参観ができるようにした。



＜理科教員ネットワークにおける研究＞

* 1 VOD : Video On Demandのこと。個々のユーザーが選択した異なる映像を、ユーザーごとに配信すること。

ア 授業案提供者は授業案を教育センターにメール等で送付する。ネットワーク上での協議の期間を十分に設けるため、提出期日は授業実施1か月前を目処とする。

イ 教育センターは授業案をPDF*1化し、その授業案について協議する掲示板とともに教育センターWebサイトに掲載する。このエリアはパスワードによって閲覧を会員のみ制限する。

ウ 授業案提供者は授業案開発の背景や疑問、支援していただきたい点等を掲示板に書き込む。

エ 会員は授業案と掲示板に記載された内容から授業提供者の考えを理解した上で、意見、感想、改善策の提案等を掲示板に書き込む。

オ 授業案提供者は、ウ、エで行われた協議を参考に授業案の改善を図る。場合によってはア～エを繰り返す。

カ 授業案提供者は自校において授業案に基づいた授業を実践する。教育センターは所員を派遣し、授業をビデオ撮影する。

キ 教育センターは撮影したビデオをVOD化し、授業案にリンクさせて、教育センターWebサイトのパスワード保護エリアに掲載する。

ク 会員はVODで授業を参観し、意見、感想等を掲示板に書き込む。

ケ 授業者は寄せられた意見、感想をもとに、更なる授業改善を図る。

⑤ 理科教員ネットワークの研究の実際

ア インターネットを利用した研究協議

インターネットを利用した協議の持ち方には、テレビ会議システムやIP電話など様々な方法が考えられるが、理科教員ネットワークでは会員が研究協議に“任意の時間に任意の場所から”参加できるようにするために掲示板（BBS）システムを採用した。このシステムは多くの優れたフリーソフトが公開されており、サーバ側（教育センター）もクライアント側（会員）も無償で利用できるという利点もある。

充実した協議を行うためには、会員が議論されている内容を短時間に的確に把握できるようにする必要がある。そこで掲示板にはフレーム機能を用いたも

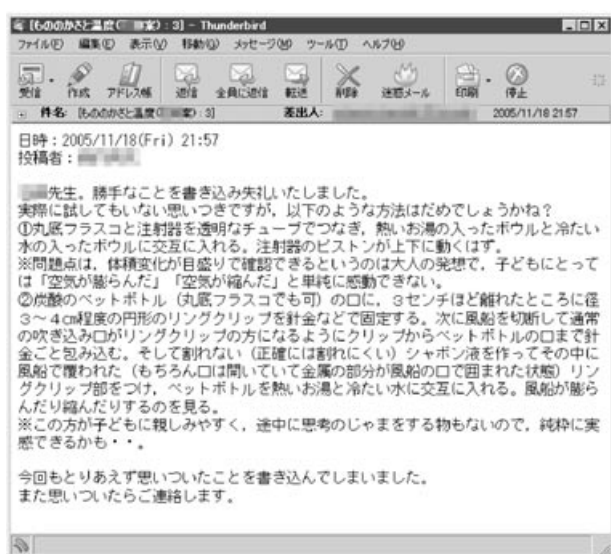


＜理科教員ネットワーク専用ページと
掲示板における研究協議の様子＞

*1 PDF : Portable Document Formatのこと。使用しているコンピュータの種類に影響されず、同一の文書表示を可能にするためのファイル形式。

のを採用し、左側に会員からのコメントを時系列に、コンパクトに表示するようにした。

多忙な教員にとって、定期的にコンピュータに向かい、授業案ごとに設けられた数多くの掲示板を一つ一つ確認することは極めて困難である。また時間を設けて掲示板にアクセスしても、そこに新たな書き込みがなければ、次に閲覧しようとする意欲も薄れてしまう。そこで「アクセスしてみなければ何が書かれているか分からない」という掲示板の欠点を補うため、Webサーバのsendmail*1機能を利用し、新たな書き込みがあれば、書き込みがあった授業案名、発信者、投稿日時、内容をあらかじめ登録しておいたメールアドレスに一斉送信するようにした。こうして会員は携帯電話のメールアドレスを事前登録することで、掲示板への書き込み情報をコンピュータを確認することなしに、リアルタイムで得ることができるようにした。



<書き込みがあった掲示板名、投稿日時、投稿者名、内容を会員にリアルタイムに通知するメール>

イ 授業のVOD化

会員相互による授業案の練り上げ後、授業案提供者が実際に所属校で実施した授業を、教育センターがVTR撮影し、事象提示の部分を中心に各授業4～

6本、計15～20分程度にまとめた。

VOD化に当たっては、児童の肖像権を保護するために、フリーソフト「SEffect」を用い、児童の顔やゼッケンなどが判明しないよう、映像を加工した。また、会員のインターネット接続環境や使用しているコンピュータのスペック、利用プレーヤーに配慮し、WMV*2、RealVideo*3の2形式、それぞれ50、150、350kbps*4の動画を作成した。これらのファイルは授業案上にボタンとして配置し、記載内容と同期するよう配慮した。

学習内容	時間	教師の注意
1. 事象提示を見る 先底フラスコの口の部分に石けん水をつけ、水に交互に入れる	5分	・シャボン玉は、入れ物を押して、入れ物の口から空気を押しとくらくらむことを確認してからフラスコを用いた事象提示をする。 ・水に入ると、シャボン玉がふくらみ、水に入るとシャボン玉が縮んでいく事象を見せ、入れ物を押しているわけではないに、ふくらむ事に着目させる。 ・「空気が上にあがってシャボン玉がふくらんだ」と考えさせる児童がいれば、スライドに書き添ったフラスコの口(下向き)に石けん水をつけ、(上)の丸い部分を指でしぼった状態で覆った時でもシャボン玉がふくらむことを見せ空気が上がったからふくらんだわけではないことを確認する。
2. 1の事象の結果を確かめ、このようにな入れ物の中の空気をあためたり冷やしたりしよう	20分	・予想させる前に考えやすいように2つの事象のやり方を考え、事象の理解を助ける。 ・フラスコの中に入っているのは、空気で、水に入れたり水に入れたりすることで、中の空気が、温められたり冷やされたりしたことをおぼえさせる。 ・シャボン玉がふくらむというときは、空気が口の部分からふくらむということであり、空気がどうなるかを予想させる。 ・1の結果から、予想させる。 ・予想したのをおぼえられる児童には考えさせる。 ・温め熱いので、やけどをしないように注意させる。 ・温め熱いうちに手早く実験させる。 ・水の実験は、実験室を遠くにして、手で温めシャボン玉がふくらむか確かめさせる。
3. 教科書イ、ウの実験の方法を確認し、蒸気水に入れるとどうなるか予想する	5分	
4. 教科書イ、ウの入れ物の中の空気をするとどうなるか		
5. 結果から、疑問を		
6. 今日の学習をふ		

<動画ボタンが配置された授業案と動画の様子(児童の顔は加工済み)>

*1 sendmail: メールを配信するためのソフトウェア。配信するための仕組みそのものを示す場合もある。
*2 WMV: Microsoft社が開発した動画圧縮形式。
*3 RealVideo: RealNetworks社が開発した動画圧縮形式。
*4 bps: Bits Per Secondのこと。データ転送速度の単位。動画の場合、値が大きくなればより鮮明な映像となる。

⑥ 成果と課題

ア 研究協議

平成17年10月～12月の間に、会員よりのべ20時間分の授業案の提供をいただき、それぞれ専用の掲示板において協議を行った。平成18年2月末日現在、掲示板への発言総数は123件となっている。

掲示板を通した研究協議の結果、幾つかの授業案は提供者によって改良が加えられ、その変遷を会員間で共有することができたが、ほとんどのものは提供者が当初提示したままであり、協議を通して改良されることがなかった。これは、初期の会員は全て日本初等理科教育研究会福島支部に所属しているなど理科教育に対して造詣が深く、提示当初から授業案の完成度が高かったり、事象提示に十分に工夫がなされていたりしたためである。

活動当初より、インターネット上の掲示板で起こりがちな誹謗中傷などのいわゆる”荒れ”の発生を防ぐため、匿名やハンドルネーム*1による書き込みを禁止していたが、このことが結果的に協議の深化を妨げることになった。掲示板は本来、意見を気軽にやりとりするために適したシステムである。しかし、教員は職業柄、記録に残る文章表記には特段に気を遣う。本名表記を義務付けられたことで、この教員ならではの配慮が過剰に働き、掲示板への気軽な書き込みや批判的な書き込みを阻害していたと思われる。

イ 授業のVOD化

都合の良いときにインターネットを通して授業参観ができるというこのシステムは、会員に極めて好評だった。だが児童の肖像権保護のためとはいえ、児童の生き生きとした表情が見て取れないことに強い違和感を抱く会員が多かった。寄せられた意見も「パスワードによって視聴制限しているのだから、映像の加工は不要」というものから、「危機管理上、児童を特定する情報は全て除くべき」というものまで様々であった。今後は両者に代表される意見のすり合わせが課題の一つである。

本年度の活動では、授業提案者には授業案の作成と授業に集中していただくため、動画の撮影と編集は教育センター所員が担当した。だがそのために、授業者は授業日時を1週間程前に特定する必要がある、このことを「(何が起こるか分からない日々の教育活動の中では)心理的に負担」と感じる会員も少なくなかった。さらに、遠隔地の学校からは「(わざわざ)センターから所員を派遣されることに抵抗がある」という意見もいただいた。これらの改善のためには、現行の作業の流れ以外にも、授業者自らが授業を収録・デジタル化・アップロードできるように、作業内容をパッケージ化して提示する必要がある。こうすることで「ちょっと授業を見て、会員から意見をいただきたい」という気軽な理科教員ネットワークの活用が期待できる。こうした気軽な活用が、教員の資質向上や県内の理科教育の充実につながると思う。

ウ 会員の指導力向上と会員以外への貢献

平成18年2月末日現在、会員による勧誘や教育センターWebサイト及び所報などにより、18名の新規入会者を迎えた。今後も理科教員ネットワークの意義を周知して、会員の増員とともに、会員一人一人の指導力の向上に貢献していきたい。

教育センターでは、毎年小学校理科に関わる多種多様な研修講座を開催している。しかしながら近年、例えば薬品の取扱い方や植物の栽培法など、実験観察に関する基礎基本を十分に会得していない教員が、年代を問わず増える傾向にある。こういった教員が気軽に相談や質問をすることができるシステムの確立も急ぐ必要がある。

<参考Webサイト>

1) KENTWEB

<http://www.kent-web.com/>

2) SEffectのページ

<http://www.geocities.co.jp/SiliconValley-Cupertino/7962/>

*1 ハンドルネーム：インターネットやパソコン通信上で使用されるニックネームのこと。

Ⅲ 成果と課題

今年度4つのコーディネートを通して、教育センターと学校の双方向での情報交流と授業改善を目指した取り組みを行ってきた。成果と課題を以下の示す。

成果

- 学校から本チームWebへのアクセスが増えた。
- 授業づくりに役立つ教育情報が収集できた。

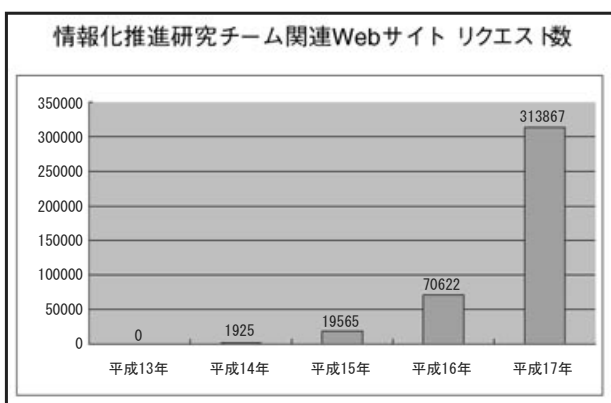
今後の課題

- △ 授業改善につながる有効な協議は十分とは言えない。
- △ 他の校種・他の教科のネットワーク構築ができていない。
- △ 学校のメールアドレスの活用が不十分である。

1 成果

(1) 学校からの本チームWebへのアクセスが増えた

本チームでは、授業改善を目指しWeb上のコンテンツの配信により支援を行ってきた。今年度、各学校から本チーム関連サイトへのリクエスト数は30万件を超え、当初の目的を達成した。これは、各学校や教員との連携を意識したコーディネートを行ったため、各学校や教員からのアクセス向上につながった。教育センターと学校における多少の相互的交流の一步が踏み出させたと考える。



(2) 授業に役立つ教育情報が収集できた

今年度の「教員ネットワーク」の協議で活用した資料と県内の各地区の小教研研究資料を合わせると、約100名の教員の授業資料を収集することができた。

これは、約100名の教員が参加した授業改善の取り組みが始まったということである。本チームでは、この資料を学年単元別に配列し、来年度活用しやすく整理し直した。



今後は、この資料を活用していただき、改善を加えた資料を再収集することにより、県内広域の授業改善システムとしての機能を向上させていきたい。



2 今後の課題

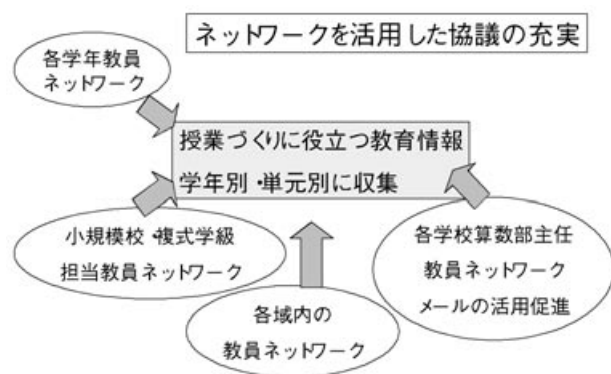
(1) 授業改善につながる有効な協議は十分とは言えない

「教員ネットワーク」では、授業改善につながる協議をITネットワークを活用して行うことで、福島県内広域の教員参加の下実施しよう考えた。成果でも示したように、有効な資料は収集できたものの、授業改善につながるような協議が行えたとはいえない。

これは、広域の会員のため、互いの顔も知らない同士で、互いの指導方針や考え方が分からず、率直な意見提示や質問ができなかったためである。来年度はこのことを反省して、顔を合わせて互いの指導方法論や授業論を交流させる場を設けたいと考える。

また、顔を合わせて研修する機会を有する教員同士が、研修と研修の合間をネットワークを活用することにより、交流することなども企画していきたい。

広域の教員ネットワークでは、互いに顔見知りではないため、遠慮してしまい協議が深まらないという欠点がある。この解決に向けては、顔見知りではない教員同士でも、授業改善に向けての強い課題意識を共有することで、有効な協議が可能であるか、検証していきたい。同じ学年を担当する教員が学年・単元別に収集した資料を基に、互いの改善案や意見交換ができるかについて、研究を進めていきたい。



県全域を網羅する教員ネットワークを構築するために、課題を共通にする小さな教員ネットワークを育てていくことも試行していきたい。

(2) 他の校種・他の教科のネットワーク構築ができていない

小学校算数科・理科において「教員ネットワーク」のモデルを構築した。研究発表大会で研究の紹介をしたところ、他校種・他教科の構築について要望があった。今後は、こうした意志を持つ教員の小さな教員ネットワークの立ち上げを支援していくことを試行的に行っていきたい。

小学校英語の取組み等、教員が必要とする教育情

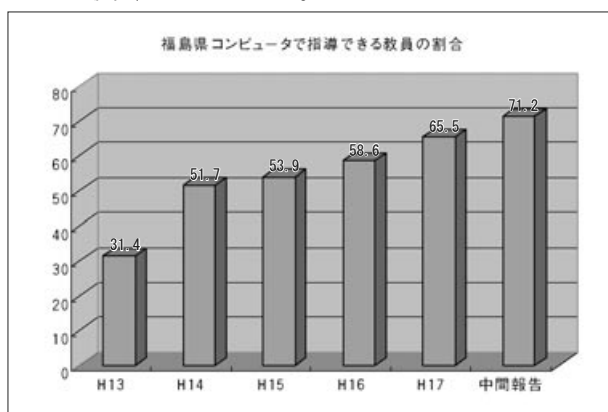
報は多彩である。小さな教員ネットワークを構築し、互いに情報交換の輪を広げ共有の輪を広げていくことが「教員ネットワーク」発展の鍵になると考える。

(3) 学校のメールアドレスの活用が不十分である

先に示したように、福島県内の小学校・中学校の日常的なメール活用率は約6割と考えられる。メールによる情報発信は、手軽な上に、様々なリンクを貼り付けることで、情報収集の窓口になることができる。今後、各学校への確実な情報発信のための企画を行い、授業に役立つ教育情報の共有化を促進していきたい。

IV 最後に

文部科学省における「学校における教育の情報化の実態等に関する調査結果」（平成17年度中間報告）では、福島県の教員の71.2%がコンピュータで指導できる教員となっている。



本チームでは、ITを活用を促進することで授業改善を目指すというスタイルではなく、授業改善を求める教員の主体性を支援することで、IT活用のよさを伝えていきたいと考える。よりよい授業づくりを求め、その1つの手段としてIT活用を位置付けていくことが、本チームの存在意義ととらえているところである。

モデルの構築として「教員ネットワーク」を構築してきたが、来年度は、授業改善を目的に自主的なネットワーク構築を希望する教員の支援を行ってきたいと考える。

e ラーニングによる研修に関するプロジェクト研究チーム

研修に生かすネットワーク利用に関する研究

研修に生かすネットワーク利用に関する研究

《目次》

I	研究の趣旨	47
II	研究の概要	47
1	研究の目的	47
2	研究内容	47
III	研究の結果	47
1	事前研修及び受講後の支援	
	－教科「情報」講座－	47
2	課題解決的な学習における迫体験	
	－中学校社会科・高等学校地理歴史講座－	49
3	研修内容の事前紹介及び受講後の意識調査	
	－IT活用授業実践強化講習会－	50
4	研修講座の事前案内	
	－学校組織マネジメント講座（教頭対象）	51
5	心理検査の概要に関する講義の配信	
	－学校教育相談実践講座－	53
6	基本研修における講義の配信	
	－高等学校初任者研修2次研修－	53
IV	研究のまとめ	
1	研究成果	55
2	今後の課題	56
3	研修に生かすネットワーク利用を目指して	56

研修に生かすネットワーク利用に関する研究

eラーニングによる研修に関するプロジェクト研究チーム

I 研究の趣旨

平成14年度に行った「福島県教育センター事業に係るアンケート調査」によれば、教員が研修に参加しにくい理由として、「授業等で学校を空けにくい」という回答が70%を越えている。このような課題を解決するための一つの方法として、時間と空間の制約を受けないネットワークの利用が考えられる。

このネットワークの利用に関して、昨年度はeラーニング試行プロジェクトチームを立ち上げ、教員研修におけるeラーニングの可能性や課題を研究した。

その結果、資料配付や音声・アニメーションを利用した教材の視聴にはほとんど問題はなく、資料の事前提供や教材の事前研修によって、効率的な講座運営が可能になるなどの効果が確認できた。

さらに、メーリングリストや掲示板を利用して研修内容の意見交換や情報交換を行うと、研修意欲が高まるなどの効果も確認できた。

一方、資料や教材を事前に提供した場合、研修者が事前研修を行ったかどうかを確実に把握することが難しかったり、教材作成に時間を要したりするなどの課題も明確になった。

今年度は、昨年度の研究の成果及び課題を踏まえ、その対象者や内容・方法を拡大し、研修にネットワークをどのように利用すべきかを研究するものである。

II 研究の概要

1 研究の目的

- (1) ネットワークを利用する講座の範囲及び内容・方法を拡大し、事前研修や事後支援など研修に有効なネットワーク活用の在り方を考察する。
- (2) 次年度以降の研修において、ネットワーク利用をさらに推進するための方法を考察する。

2 研究内容

- (1) 事前研修及び受講後の支援
- (2) 課題解決的な学習における追体験

- (3) 研修内容の事前案内・受講後の意識調査
- (4) 研修講座の事前案内
- (5) 心理検査の概要に関する講義の配信
- (6) 基本研修における講義の配信

III 研究結果

1 事前研修及び受講後の支援

—教科「情報」講座—

(1) 講座の概要

普通教科「情報」を担当する教員に対して、授業研究に関する協議及び評価方法に関する講義を通して、授業方法の改善を図ることを目的とする。

(2) ネットワークの活用方法

① 事前研修としての活用

研修に参加するための前提知識、特に評価に関する基礎的な知識（評価の観点、評価規準、具体的な評価方法など）を確認させるために、ネットワークで配信する事前研修教材（スライドを表示してその内容を音声で説明する教材）を視聴させる。

さらに、事前研修に関するアンケートにWeb上で回答してもらい、理解の程度の把握とこの教材を視聴したかどうかの確認を行う。

② 受講後の支援としての活用

研修終了後、お互いの情報交換を継続するとともに、自己の抱えている疑問や悩みなどをお互いの経験や知恵で解決する場を設けるために、講座参加者をメンバーとするメーリングリストを開設する。

(3) 期待される効果

① 事前研修による研修の深化

研修に必要な知識を事前に理解しておくことで、従来どおりの研修を受講した場合に比べ、研修内容をより深く理解できるのではないかと期待される。

② オンデマンド教材による効果的な情報伝達

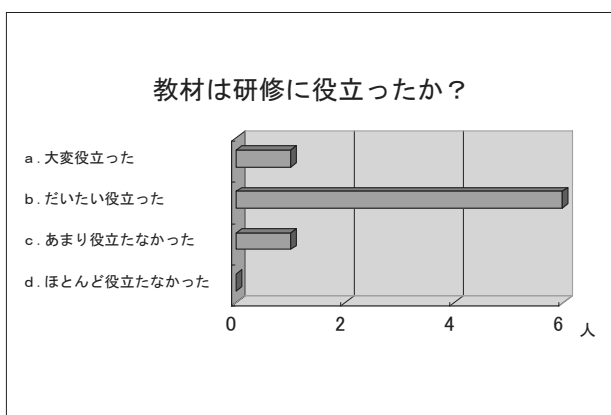
スライドと音声で目と耳から情報を得ることは、紙媒体で情報を得る場合に比べ、意図したことがよく伝わるのではないかと期待される。

③ メーリングリストによる受講後の支援の有効性
 帰校後に新たに発生した疑問や悩みなどを、研修をともにした教員同士で情報を交換することは、受講後の継続的な支援になるのではないか。

(4) 実施結果

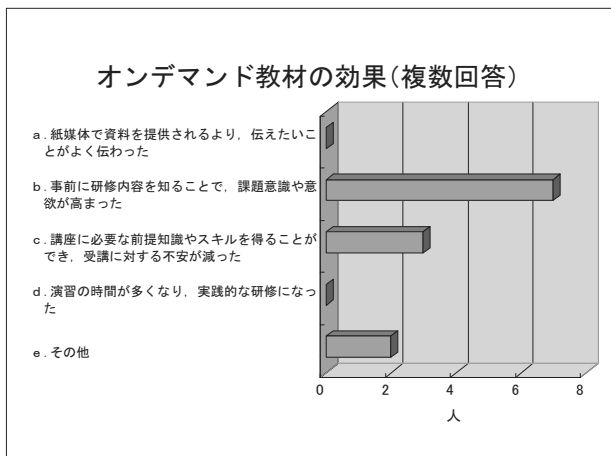
受講者に対するアンケート調査（回答者8名）から、事前研修教材の視聴に特に問題はなく、全体的には負担は少なかった（少し負担と感じた受講生は2名で、その理由は「他の校務があり視聴するのが午後7時を過ぎた」「時間が束縛される」であった）。さらに、次のことが分かった。

① 事前研修による研修の深化



ほとんどの受講生が「研修に役立った」と回答した。その理由は「事前に押さえておかなければならないことを予習できた」が大半であった。研修に参加する前に必要な前提知識を確認させることは、研修改善の一つの方法になると考えられる。その他「早い時期に視聴したため、記憶に残っていなかった」という回答が1件あった。

② オンデマンド教材の効果



オンデマンド教材の効果として、「紙媒体で資料

を提供されるより、伝えたいことがよくわかった」の回答が多いのではないかと予想した。しかし、実際には「事前に研修内容を知ること、課題意識や意欲が高まった」の回答が多く、受講に対する不安が減ることの効果が大きいことが分かった。

質問項目にある「演習の時間が多くなり、実践的な研修になった」かどうかは、直接的には研修内容の問題であった。

③ メーリングリストの効果

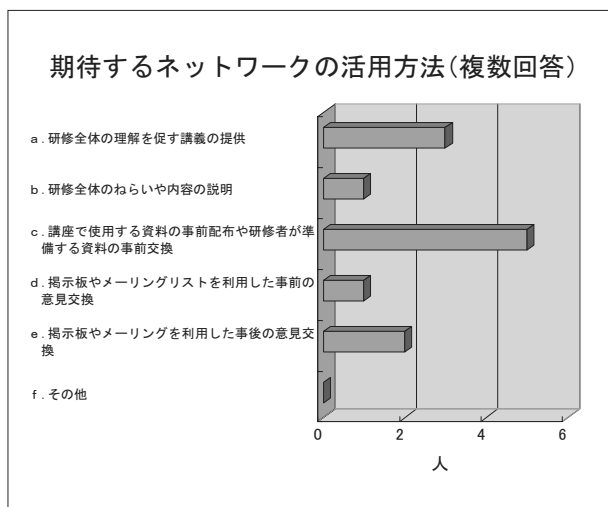
開設したメーリングリストへの主な投稿内容は、近況報告やメンバーへの質問が主なもので、2月末日現在での投稿数は27件である。

教科「情報」の担当者であっても、メーリングリストをあまり利用しない教員が8名中6名だったので、月初めに投稿する順番を決めた。

始めのうちは投稿が少なかったので、投稿を促すようメンバーに働きかけたが、徐々に自発的な投稿が増えてきたところである。「タイピング練習の効用」「検定試験の扱い」など、自校の悩みに対する他校の取り組みを聴取する投稿が多い。

④ 期待するネットワークの活用方法

研修をより有意義なものにするためのネットワークの活用方法を尋ねたところ、最も多かったのは「講座で使用する資料の事前配付や研修者が準備する資料の事前交換」、次に「研修全体の理解を促す講義の提供」「掲示板やメーリングリストを利用し



た事後の意見交換」であった。

(5) 考察

○ 事前に研修内容や前提知識を得ることで、受講

者の課題意識や意欲が高まり、講座に対する不安が減少するなどの効果が確認できた。

より効果的な研修を実施するためには、研修内容に関する情報や前提知識をもっと積極的に提供する必要がある。

- 研修におけるネットワーク活用は、資料の事前配付や事前交換、研修全体の理解を促す講義の提供、事後の意見交換などを行うためのツールとしても期待できる。

実際、配付可能な資料の事前提供や協議資料の事前交換を行うだけでも、研修者に大きなメリットがあるので、このようなツールとしてネットワークを活用したい。

- 事前研修を行ったかどうかは、事前研修に関するWeb上のアンケートへの回答で確認した。

今後、アンケート未回答者への連絡手段（学校のFAX番号等）を受講者名簿とともに印刷できるようにするなどの工夫が必要である。

- 現在Web上で行っているアンケートはCGIを利用している。アンケートの作成及び集計に専門知識及び労力を要するので、スムーズに運用できるシステムの研究が必要である。

2 課題解決的な学習における追体験

— 中学校社会科・高等学校地理歴史講座 —

(1) 講座の概要

中学校社会科・高等学校地理歴史科担当教員に対し、課題解決的な学習（主題学習）の指導の方法及び視点についての研修を行った。受講者数は25名（中学校14名 高等学校11名）であった。

(2) ネットワークの活用方法

学習指導要領では、中学校社会科・高等学校地理歴史科・公民科において、課題解決的な学習（主題学習）を実施することになっているが、その実施状況はよいとはいえない状況にある。その理由の一つに、指導計画や授業の改善が図られていないことが考えられる。

- Webでの活用しやすい指導事例の配信

上記の課題を改善するためには、より活用しやすい指導事例を提供することが必要だと考え、講座で

利用したプレゼンテーション教材に改良を加え、受講者にネットワークを利用して提供することにした。

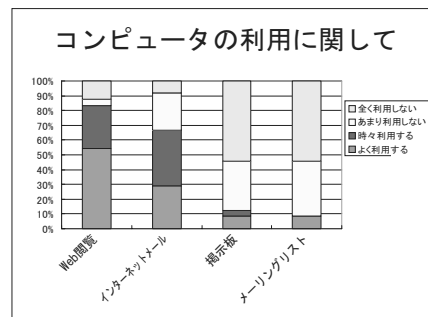


(3) 実施結果

① ネットワークの利用状況について

受講者のネットワークの利用状況は下図の通りである。

掲示板やメーリングリストを利用している教員はほとんどいないが、Webの閲覧・インターネットメールはよく利用していることが分かる。このことから



Web上で資料を公開すれば、受講者は資料をダウンロードして利用できると言える。

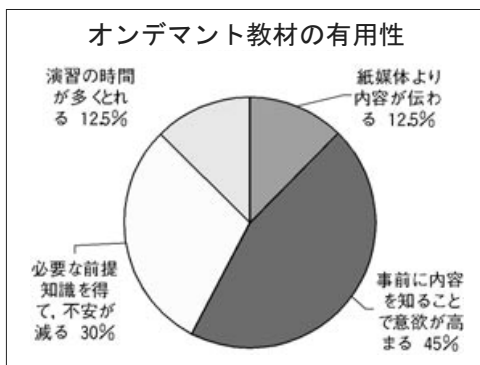
② プレゼン

テーションソフトを利用した教材

プレゼンテーションソフトは現在広く活用されるようになったが、伝えたい情報（文字・写真）を明確にして利用することが大切である。そこで、今回講座で使用した教材を、授業で活用できるよう工夫した。

この教材については、「利用できそうだ(54%)」「内容を差し替えれば利用できる(46%)」という評価であり、学校でも十分活用できる教材であった。校種別では、中学校の64%、高等学校の40%が「利用できる」と回答しており、全体としては肯定的にとらえているものの中学校・高等学校間では、温度差があることが分かった。

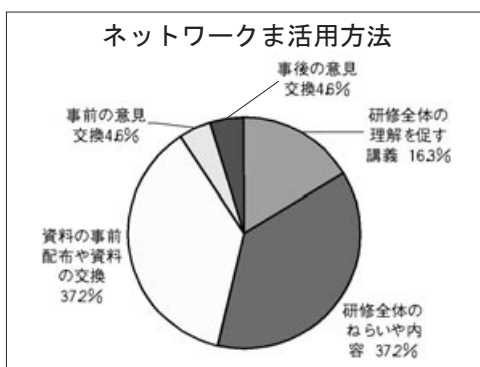
③ 教育センター研修の事前研修の在り方について



オンデマンド教材による事前研修については、「あつた方がよい」、または「ややそう思う」と回答したものが、ほとんどであり、有効であるという認識が校種を問わずうかがえる。

事前研修の内容については、上図に示したように、研修内容を事前を知ることで、その研修で何をしようなるのか、すなわち研修に対する動機付けの部分が強く意識されており、研修に対する期待が読み取れる。

事前研修の内容については、上図に示したように、研修内容を事前を知ることで、その研修で何をしようなるのか、すなわち研修に対する動機付けの部分が強く意識されており、研修に対する期待が読み取れる。



ネットワークの活用方法については、左図にあるように受講生の3/4が「研修全体のねらいや内容を知る」、「資料の事前配布や資料の交換をする」ことを期待しており、「研修全体の理解を促す講義」、「意見交換の場」は少なかった。

「研修全体のねらいや内容を知る」、「資料の事前配布や資料の交換をする」ことを期待しており、「研修全体の理解を促す講義」、「意見交換の場」は少なかった。

(4) 考察

① 学校ですぐに利用できる教材の積極的な配信

今回開発した教材は、問題解決的な学習（主題学習）を進める際に有効であり、Web上で配信すれば受講生は各学校で利用できることが分かった。

このように、学校ですぐに利用できる教材をWeb上で積極的に配信すれば、研修をフォローすることができ、指導方法の改善も期待できる。

② 研修者への具体的な活動内容の明確な指示

ネットワーク利用については、「事前に講座内容を知る」という点への期待が大きい。

つまり、「講座全体の内容展開が理解できる」と

同時に、その向こう側にある「研修者自身が活動すべきこと」を明確に示すことが、今後の課題としてあげられる。

3 研修内容の事前紹介及び受講後の意識調査

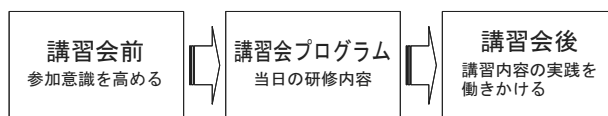
－ I T活用授業実践強化講習会－

(1) 講座の概要

「コンピュータは操作できるが、学習指導での利用については自信がない教員」を支援するための研修である。学習カリキュラムの設計やプレゼンテーション資料、参考資料などの作成演習を通して、分かりやすい授業を行うために必要な知識や技術を実践的に身に付けることを目的とする。

(2) ネットワークの活用方法

講習会のプログラムがより効果を発揮するためには、事前に参加意識を高め、事後に講習内容の実践を働きかけていく必要がある。この事前と事後の働きかけにネットワークを利用する。



① Webサイトによる研修内容の事前紹介

講習会の内容を説明するWebサイトを開設し、事前の研修意欲を高める。この講習会の趣旨・連携する企業の説明サイトへのリンク・講習会申込用紙のダウンロード・前年度の参加者が作成したコンテンツ集・事後の相談窓口を掲載する。

講習会の目的や昨年度の様子、参加者が作成したコンテンツ等を事前に閲覧することで、講習会の概要の理解が図られ、参加に対する不安がなくなり、参加者の研修意欲が高まると考えた。



また、運営を分担する関係機関への説明でも、このWebサイトを活用する。

② 受講後の意識調査におけるメール利用

研修終了後、一定期間が過ぎてから参加者の学校宛にアンケート用紙を添付したメールを送信する。参加申し込みと同時に、メールアドレスも収集したため、アンケート用紙の送付は容易であった。

(3) 実施結果

① Webサイトによる研修内容の事前紹介

本講習会は、多忙な1学期を終えてすぐの6日間の日程で行われていることから、希望者による講習会用Webサイトの閲覧のみとした。そのため、この取り組みに関しては講習参加者の評価をまとめることはできなかった。

一方、この講習会は県内5カ所で実施したため、運営に関わる機関への説明では、速やかな共通理解が図られた。

また、申込用紙をダウンロードして利用することで、メールによる速やかな申し込みにつながった。

② 受講後の意識調査におけるメール利用

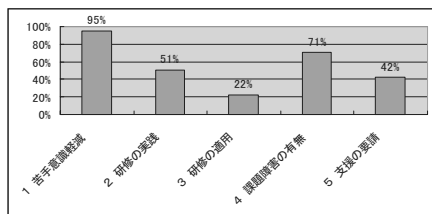
Web上でのアンケート回収に比べ、作成・送付が容易であることを考え、この方法を採用した。その結果、意識調査アンケートの回収率は約40%であった。メールによる送受信ではなく、メールにファックス回答用紙を添付した方式のため、返信しやすかったと思われる。

(4) アンケートの結果から

講習会に参加したほとんどの受講者は、「ITに対する苦手意識が軽減された」とその効果を評価している。

また、アンケート回答者の実践率は「研修で作成した学習プログラムを実践した(51%)」、「別の学習に適用してITを活用して授業を行った(22%)」となっており、

意識調査アンケートが、講習内容の実践を後押ししたと思われる。



＜受講後の意識調査＞

(5) 考察

① 事前研修に関する指示の在り方

「6日間という長い研修であるからこそ、有意義な研修を行うため、事前準備をしたかった」という

声があった。受講者の意欲を減退させないためにも、事前研修に関する指示を工夫する必要がある。

② アンケート回収方法の工夫

Webの利用が浸透してきているので、Web上でアンケートを回収する方法も考えられる。その際、アンケート作成をなるべく簡単に行い、回収率を高める方法を工夫する必要がある。

また、「3学期の学習内容なので、まだ実践していません。実践後アンケートを送付いたします。」という回答が複数寄せられた。長期にわたるアンケート回収の工夫も必要である。

4 研修講座の事前案内

ー学校組織マネジメント講座（教頭対象）ー

(1) 講座の概要

学校経営の中心的な役割を担う管理職に対して、企業や自治体で実施されている組織マネジメントのエッセンスを提供することにより、変化に対応した新しい学校づくりのノウハウを獲得し、学校経営の改善に資することを目的とする。

主な内容は以下の4点である。

- 学校組織マネジメント概論
- 学校経営ビジョンづくり
- 内外環境の把握と学校の特色づくり
- 学校経営ビジョンの実現に向けて

(2) ネットワークの活用目的及び方法

① 活用目的

この講座では専門用語が多く用いられるため、事前にネットワークを介して予備情報を提供しておくことで、研修への抵抗感が減り、当日の講座内容への理解がさらに深まるのではないかと考えた。

② 活用方法

次に示した予備情報をスライド化したものをWeb上で配信し、事前に関連させた。

- 研修講座の日時
- 日程及び内容の詳細
- 研修講座の目的
- 事前課題についての説明
- 持参物の確認

3 研修内容

第1ユニット 学校マネジメント概論 10:25~12:00	
10:25 ~ 10:40	第1章 オリエンテーション
研修のねらいと進め方について学びます。 すでに要項と一緒に送付した自己紹介シートに記入し、持参してください。	
円滑に研修を進めるために、班ごとに自己紹介をしていただきます。	
あらかじめ自己紹介シートの作成をお願いします。	
①学校名・氏名 ②私の学校で1番自慢できるもの、特色 ③私が解決したいと思っている課題や直面している問題点 ④この研修に対する期待	福島小学校 福島花子
「こんなことを書いたら…」などは考えず、思いのままにどんどん書いてみてください。日々の仕事の中で、思いついたことを付箋紙に書きとめ、貼っていただいても結構です。それを6部コピーして持参してください。	
自己紹介といっても、時間の関係で一人2分程度ですので、①④あたりが中心だと思います。②③については、できるだけ多くあると、演習の際に考えるきっかけとなり有効です。	

(3) 期待される効果

① 事前の情報伝達による参加意欲の向上

事前に研修講座の概要についての情報を得ることで、研修への抵抗感を減らすことができるだけでなく、問題意識を持って参加するなど、参加意欲の向上にもつながるのではないかと期待される。

② スライド教材による効果的な情報伝達

アニメーション効果を加えたスライド教材を閲覧することにより、紙媒体での文章を中心とした情報伝達に比べ、効果的に伝達できるのではないかと期待される。

③ 時間と空間の制約を受けない効率的な情報伝達

インターネットの環境が整っていれば、時間と空間に制約を受けることなく、受信者側のペースで情報を引き出すことが可能であり、効率的な情報伝達となるのではないかと期待される。

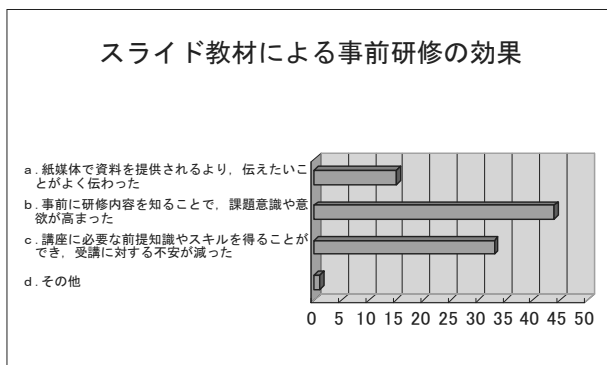
(4) 実施結果

受講者に対するアンケート調査（59名対象）の結果をもとに、仮説の検証を行った。

① 事前の情報伝達による参加意欲の向上

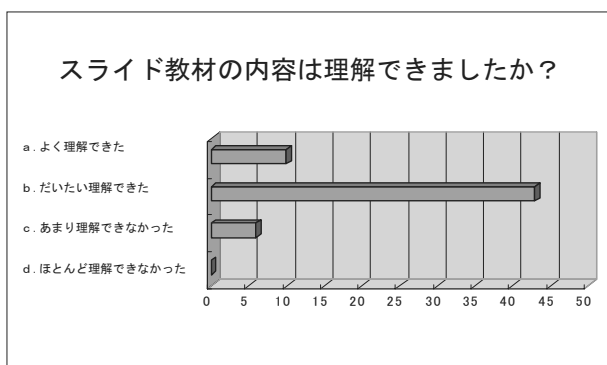
提供したスライド教材について、「だいたい役立った」を含めると95%の研修者が「役に立った」と答えている。具体的な内容は下図の通りで、参加意欲の向上や不安の軽減に効果的であることが分かる。また、自主的に自校の詳細な分析をして研修に臨む

など、積極的な姿勢も見られた。



② スライド教材による効果的な情報伝達

下図は、スライド教材の内容に対する理解度を示しているが、90%の受講者が「理解できた」と答えている。自由記述の中に、「事前課題の記入が具体的に分かりやすく、研修での活用の仕方も理解できた」という感想が見られた。「理解できなかった」理由としては、スライド中に文字や文章が多かったことや、専門用語が多く用いられていたことなど構成上の問題点と、余裕がなくじっくり取り組めなかったなど、研修者自身の時間的な問題点による。



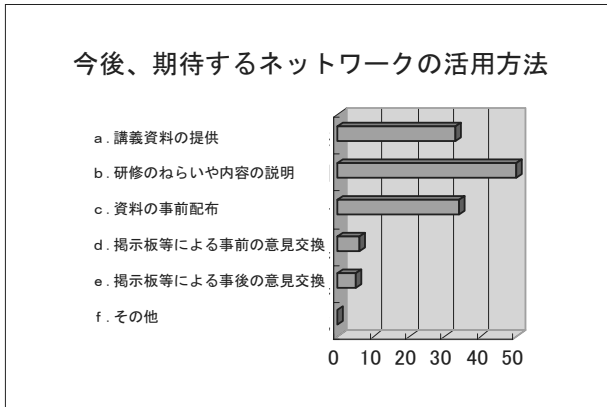
③ 時間と空間の制約を受けない効率的な情報伝達

スライド教材による事前研修に対して受講者の98%が、「あまり負担にならなかった」と答えている。

④ 期待するネットワークの活用方法

下図に、研修をより有意義なものにするためのネットワークの活用方法についての結果を示した。最も多かったのは、今回行った研修内容等についての事前案内で、次に多かったのが、事前の資料の配付で

あった。



(5) 考察

① 事前の情報伝達による参加意欲の向上

事前に研修内容の情報を得ることで、受講者の不安が軽減され、参加意欲が高まるなどの効果が確認できた。今後、専門用語をできるだけ避け分かりやすい表現を用いるなど、スライド構成を工夫したい。

② スライド教材による効果的な情報伝達

紙媒体では伝達不可能なアニメーション効果を加えたスライド教材を用いることで、受講者に必要な情報を視覚的に伝達することができた。今後、文章による表現を少なくし、スライドも単純化するなど受信者の立場を配慮した教材作成を心がけたい。

③ 時間と空間の制約を受けない効率的な情報伝達

受講者の多くは、学校や自宅で時間と場所に制約を受けることなく、自分のペースにあわせて情報を得ることが可能となり、当初の目的を達成することができた。

「印刷できるようにしてほしい」という要望があったので、今後の課題としたい。

④ 期待するネットワークの活用方法

受講者の多くは今回と同様、事前の情報提供を望んでいる。また、事前の資料の配付を望む声も多く、印刷可能な状態でのテキストの掲載も考慮したい。

5 心理検査の概要に関する講義の配信

— 学校教育相談実践講座 —

(1) 講座の概要

本講座は、生徒指導・教育相談の実施運営と学級担任等への指導助言に必要な理論と技術について、実践的な研修を企画したものである。心理検査に関

しては、「児童生徒理解と心理検査」(講義・演習)として実施している。実施内容は、前半で心理検査の目的・内容について講義を行い、後半で実施方法及び解釈の仕方等について演習を行っている。

(2) ネットワークの活用方法

① 事前研修としての活用

研修者は、心理検査の理解とその活用に期待と関心を持ち研修に臨もうとしているが、現状では、十分に時間を確保し心理検査の実施方法及び解釈の仕方等に関する演習ができていないといった課題がある。

今回は、課題解決の方策として、従来、講義によって実施してきた〈心理検査の目的・内容〉をネットワークで配信することにした。

(3) 配信用教材の作成



「児童生徒理解と心理検査」(講義・演習)における講義部分を、ネットワークで配信することを目的に事前研修用教材を作成した。教材は、従来の講義で使用していたプレゼンテーション資料に音声解説を加え、視聴することで理解が深まるように工夫した。

また、研修者が事前研修として実施する際に、過度の負担とならないように留意し、約5分程度の配信時間とした。

内容は、学習内容が多岐に渡らないようにし、心理検査実施の意義と諸注意に関する基本事項の理解に重点を置くものとした。

(4) 配信用教材の内容等に関する検討方法

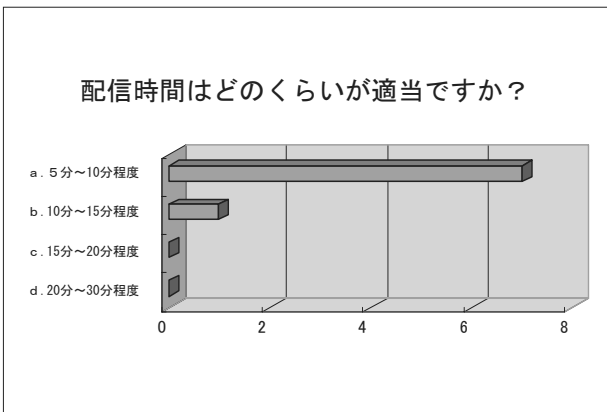
作成した配信用教材の内容等を研修者の視点から検討するために、「学校教育相談実践講座」を修了

した県内の教員8名に対して、作成した教材の視聴を依頼した。視聴後、教材の内容等に関するアンケート調査を実施した。また、電話による口頭でのインタビュー調査も同時に実施した。

(5) 配信用教材の内容等に関する調査結果 I

① 教材視聴の負担感、配信時間に関する結果

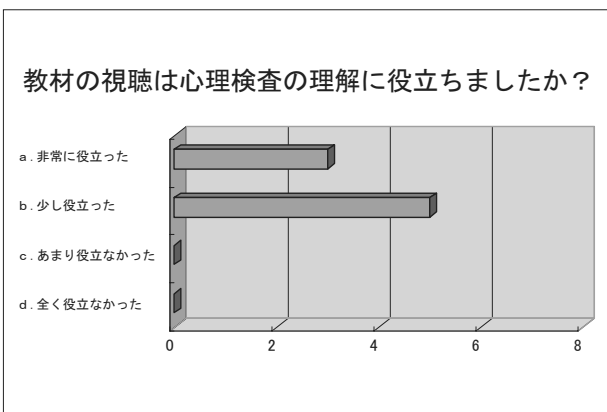
視聴後のアンケート調査からは、ほとんどの教員が「負担にならない」と回答した。配信時間についてのアンケート調査からは、「5分から10分程度の配信が適当である」とする教員がほとんどであった。



② 教材の内容等に関する結果

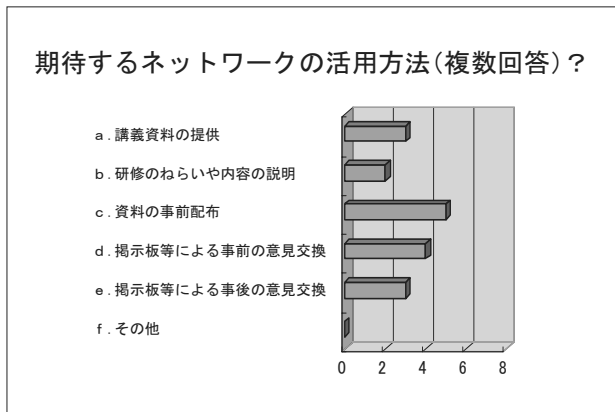
講義内容は、心理検査実施の意義と諸注意に関して、基本事項の理解に重点を置いた。

視聴後のアンケート調査からは、ほとんどの教員が「理解できた」、「役立った」と回答した。



③ 期待するネットワークの活用方法

研修者が期待するネットワークの活用に関しては、「資料の事前配布」、「事前の意見交換」など、事前の講座概要の理解が多かった。



(6) 配信用教材の内容等に関する調査結果 II

自由記述及びインタビュー調査の主な結果は、以下の通りである。

- ・ 研修内容が豊富であり、事前にネットワークを活用しての研修には意味がある。
- ・ 講義内容の提供だけでなく、リンクなどの機能を活用しながら、講義内容をさらに発展的に学習できるような工夫も必要である。
- ・ もっと詳しい内容でもよい。
- ・ 研修者の知識量の差を埋めるための工夫が必要である。
- ・ 時間を短縮する点では有効だが、疑問点を直ちに解決する点では難しい。
- ・ 配信教材を視聴した後、他の研修者の感想や疑問点が分かればより理解を深めることができる。

(7) 調査結果に対する考察

調査結果から、教材の内容及び配信時間に関しては妥当であると考えられる。

しかし、「さらに詳しい内容の配信」、「発展的学習のための情報提供」、「視聴後のフォローアップの必要性」等が指摘された。これらは、配信者側の一方的な情報発信とならないような工夫の必要性を指摘するものととらえることができる。

(8) 今後の課題

今回の研究から、個々の研修者の学習を支援する観点に立ち、参考図書案内や関連するリンクを明示するなど、学習内容をより発展的に補充するための方策を考えていく必要がある。また、配信した講義内容を視聴して生じた疑問点等を集約し、研修者にフィードバックするなどの工夫も必要である。

6 基本研修における講義の配信

— 高等学校初任者研修 2 次研修 —

(1) 講座の概要

高等学校初任者研修 2 次研修を受講する教員に対して、情報教育講座「高等学校におけるコンピュータの利用」を受講するにあたり、Web上のオンデマンド教材(事前研修教材)「コンピュータで指導ができる教員になるために」の視聴を通して、研修内容の定着と効果的な研修運営を図ることを目的とする。

(2) 研究の目的

悉皆研修である基本研修にネットワークを利用した場合の効果や影響を調査することが、大きな目的である。特に、「研修者への周知」「取り組み状況の把握」「各担当者との連携の在り方」について調査することにした。

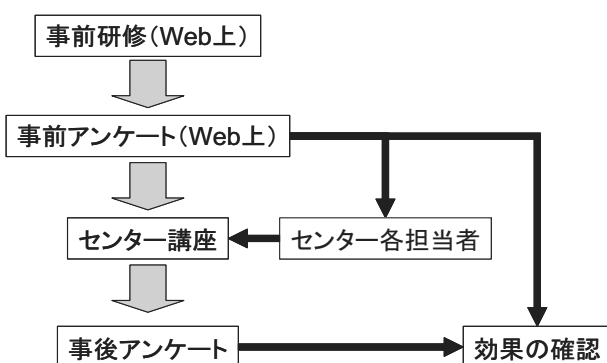
(3) ネットワークの活用方法

① 事前研修教材の視聴

ネットワークで事前研修教材(スライドの内容を音声で説明する教材)を配信し、授業にコンピュータを利用する利点の理解を図る。

② 教材視聴の確認と理解度の把握

Web上でアンケートに回答させることで教材を視聴したかどうかの確認をするとともに、内容に関する理解度を把握する。その流れは下記の通りである。



(4) 実施結果

① 研修者への周知

事務連絡文書による連絡及び初任研担当者説明会での担当者を通じた連絡を行った。その結果、53名中2名以外は期日までにアンケートに回答し、研修者への周知はほぼ確実にを行うことができた。

② 取り組み状況の把握

Web上のアンケートに回答することで、取り組み状況を把握することにした。前述の通り、ほとんどの研修者が期日までに回答したので、督促に多くの時間を要しなかった。

③ 各担当者との連携の在り方

事前アンケートの結果を、講座に関わる担当者間で共有した。互いに情報を共有することで、情報教育講座と各教科における「ITを活用した授業」講座との連携もできた。研修者の現状を把握し、講座に生かせる手段としても有効であると考えられる。

④ 事後アンケートの結果

事後アンケートの結果からは、「事前研修の内容理解・役立ち度」、「ネットワーク利用に期待すること」などの点について、他の取り組みとほぼ同じ結果が得られた。

(5) 考察

○ センター研修の深化を図るとともに、今後重点的に指導が望まれる情報モラルに時間を確保することができ、意図していた目的は達成できた。

○ 実施結果から、来年度以降は、事前研修を講座要項に記載することで、研修者への周知及び取り組み状況の把握は、大きな労力をかけずに実施可能である。

○ アンケートに「センター研修でも充分であった」という記載があったが、研修者が行っている事前研修の内容を各担当者がもう一度確認し、より実践的な指導をすることが必要である。また、センター研修も、事前研修の内容に触れながら進めるなどして、事前研修の成果を生かす工夫が必要である。

○ 事前アンケートから、60%にあたる31名がITを活用した授業を実際に行っていたことも明らかになった。今後は、このようなデータを共有して研修を組み立てることが求められる。

IV 研究のまとめ

1 研究成果

(1) 具体的な研修内容の発信が研修意欲を高める

アンケートの結果から、研修者がネットワーク利用に望んでいることは、研修内容に関するより具体的な情報であることがうかがえる。

どの講座のアンケートでも「事前に研修内容を知ること、課題意識や参加意欲が高まる」という声が多く聞かれた。動画・音声を用いた資料ばかりではなく、紙媒体の資料配付も含め、受講者の立場に立った情報提供が求められている。

(2) Web上では様々な情報提供が可能である

掲示板やメーリングリストを利用している割合は少ないものの、Webページの閲覧やメールの利用はかなり浸透している。

このことから、「研修に有効なURLの紹介」、「資料配付」、「視聴用教材の提供」など、Webを利用することで様々な情報を提供でき、このことが参加意欲の向上につながる。

2 今後の課題

(1) 配信者側の一方的な情報発信にならない工夫

充実した研修とするためには、研修者の考えや実態を把握し、実態に応じた内容を提供することが大切である。事前研修などの情報提供ばかりではなく、双方向性を利用した研修者の実態把握にも工夫が必要である。

(2) アンケートシステムの工夫

Web上でアンケートを実施するには、CGI等の専門的な知識が必要である。簡単にアンケートを実施して自動的に回答を集計できるシステムの研究が必要である。

(3) アンケート未回答者への連絡方法の工夫

アンケート未回答者が多数存在すると、連絡先を調べる作業が非常に大変である。該当者の学校のFAXや電話番号が簡単に調べられる方法を工夫する必要がある。

3 研修に生かすネットワーク利用を目指して

(1) 簡単に実行できる情報提供・情報収集から

アニメーションや音声を利用した教材は有効であるが、さらに効果的な方法としては、研修前に「研修のより具体的な内容を案内する」、「有用なWebページを閲覧させる」、「必要な前提知識を提供する」などが考えられる。

また、メーリングリストを利用すると、研修者からの情報収集も容易である。場合によってはFAXを利用してもよい。

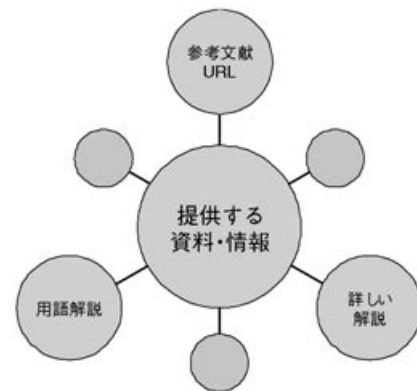
いずれにしても、情報発信・情報収集とも簡単に実行できることから始めたい。

(2) 提供する資料には、発展的な情報を付加する。

今回の研究では、研修者に様々な情報を提供したが、その情報から発生する疑問などは、研究の対象とはしなかった。

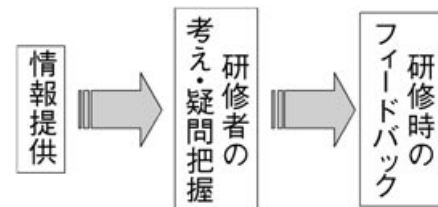
しかし、与えられた情報をもとにさらに発展的に考えたり、疑問点を調べたりするなどの研修者の活動は当然発生する。

したがって、提供する資料や情報には、このようなことに対応できるよう、発展的な情報を付加するなどの工夫が大切である。



(3) 情報提供・研修者の考えの把握・フィードバック

一方的な情報提供では、研修を提供する側の自己満足で終わる可能性がある。与えた情報をもとに、研修者の考えや疑問をあらかじめ把握し、研修時にそれらをフィードバックするという一連の流れが機能するよう工夫すべきである。



さらに、メーリングリストを活用したり、学校ですぐに利用できる教材の配信などを積極的に行ったりすれば、研修成果をさらに高めることができる。

以上のことを念頭に置き、研修がより充実したものになるよう、ネットワークを有効に活用したい。

教育相談チーム

生きる力を育てる授業実践プログラム開発に 関する研究〈第3年次〉

—学級（ホームルーム）活動を中心に—

生きる力を育てる授業実践プログラム開発に
関する研究〈第3年次〉

生きる力を育てる授業実践プログラム開発に関する研究<第3年次>

－学級（ホームルーム）活動を中心に－

《目 次》

I 研究の趣旨	57
II 研究の概要	57
1 「生きる力」のとらえ方と研究手法	57
2 研究計画	57
3 研究内容	57
4 前年度までの研究の成果	58
5 今年度の方向性	58
6 研究の実際	59
III 研究のまとめ	68
1 本年度の取組み	68
2 成果と課題	69

生きる力を育てる授業実践プログラム開発に関する研究〈第3年次〉

—学級（ホームルーム）活動を中心に—

教育相談チーム

I 研究の趣旨

「生きる力」の育成は、学校教育の最重要課題の一つである。しかしながら、「生きる力」を育成するためのカリキュラムの編成は未だ十分とは言い難い。そこで、この研究では、各校種における「生きる力を育てる授業実践プログラム」の開発を学級（ホームルーム）活動を中心に進め、県内各学校に提示することを目的として本主題を設定した。

II 研究の概要

1 「生きる力」のとらえ方と研究手法

本研究では、「生きる力」を社会性（自己肯定感、他者とかわるスキル）をとらえた。また、「生きる力」を育てるために教育相談的手法を用いた。

2 研究計画

(1) 研究実施期間

1年間を一区切りの研究とし、平成15年度より3年間継続して行う。（本年度は3年次）

(2) 研究方針

学校の授業に反映する実践的研究を行い、その成果はWebページに授業実践プログラムとして掲載し、広く普及していく。

(3) 研究対象（平成17年度）

小学校第6学年、中学校第3学年、高等学校第3学年においてプログラムを開発する。

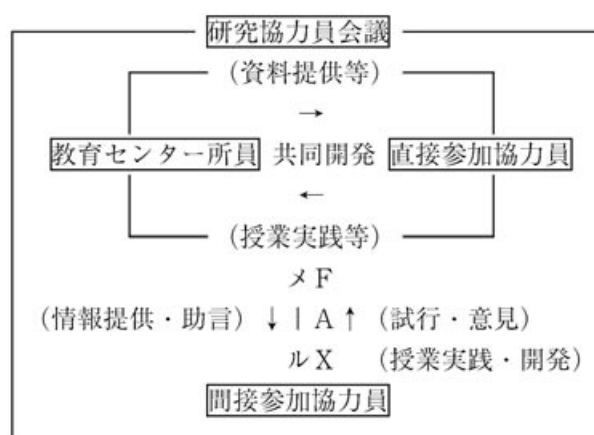
(4) 研究体制

教育センター所員と研究協力員との共同体制で研究を進める。

- ① 直接参加の研究協力員（以下、直接協力員）とは、プログラムの開発に当たり、事前の打合せ、事後の反省会の場を設定し、研究を進める。
- ② 間接参加の研究協力員（以下、間接協力員）と

は、メール又はFAXを通してプログラムの情報提供・助言、プログラムの試行と意見の聴取を行う。また、ニーズに応じて授業実践プログラムの開発を行う。

- ③ 長期休業中に研究協力員会議を設定して、直接話し合う機会をもち研究を進める。
- ④ 研究体制



3 研究内容

(1) 「生きる力を育てる授業実践プログラム」の開発

① 学級（ホームルーム）活動の内容・項目との関連

授業実践プログラムは、直接参加の研究協力校（以下、直接協力校）の「学級（ホームルーム）活動年間指導計画」を土台に、学習指導要領に示されている「学級（ホームルーム）活動の内容・項目」と関連付けを図りながら開発した。

② プログラム開発のための授業実践

直接協力員の願いや期待、学級の児童生徒の実態から学級（ホームルーム）活動の内容・項目を洗い出し、必要に応じて年間計画を組み替えながら、プログラム開発のための授業実践を進めた。その際、教育センター所員から授業に取り入れる教育相談的手法を情報提供し、相互に連絡を取り合うなど共同で開発を行った。

③ 授業実践プログラムの基本構成

授業実践プログラムの基本構成を以下に示す。

- 1 題材設定の理由
 - (1) 活動内容・項目
 - ☆ 主たる内容・項目
 - ★ 関連する内容・項目
 - (2) 題材設定の背景及び児童生徒の一般的な実態と現状
 - (3) 指導法・指導上の留意点
 - 2 指導目標
 - 3 指導計画
 - (1) 事前・事後指導
 - (2) 教科指導等との関連
 - 4 指導案
 - (1) 指導過程
 - (2) 評価計画（評価の観点）
 - 5 プログラムの展開例
 - 6 児童生徒の反応（「振り返り用紙」等から）
 - 7 授業者の感想
- ※ 資料

プログラム開発に当たっては、実践した授業を基にし、授業実践校以外の学校・学級でも活用できるように、「題材設定の背景及び児童生徒の一般的な実態と現状」等を考慮し、併せて間接協力員からの意見も参考にし、基本形を示した。

④ 授業実践プログラムのWeb掲載

開発した授業実践プログラムは、その都度教育センターのWebページ(<http://www.center.fks.ed.jp/>)に掲載し、教師が随時活用できるようにした。

なお、Webには、前述した内容の授業実践プログラムに併せ、「学級（ホームルーム）活動の内容・項目と授業実践プログラムの関連表」を掲載し、検索の利便性が図られるように工夫した。

4 前年度までの研究の成果

(1) 授業実践プログラムの開発について

- ① 直接協力校の実態や課題を踏まえ、ニーズに応じた授業実践を進めてきたことにより、教育相談的手法を活用した授業の在り方や学級（ホームルー

ム）活動の内容・項目との対応を明確にしたプログラム開発を行うことができた。

- ② 社会や時代のニーズに合わせた情報化時代の問題や性の教育の問題等に対するもの、あるいは学校行事と関連付けしたものなど、多様な要素を持つプログラムの開発を行うことができた。
- ③ 研究協力員との共同体制を推進し、研究協力員会議の持ち方・在り方等に改善を加えてきたことにより、汎用性を持つプログラムの開発が可能となった。

5 今年度の方向性

(1) 授業実践プログラムの開発において

① 年度当初のプログラム開発

小学校において、学級づくりの導入として、1学期前半に人間関係づくりに役立つ授業実践プログラムの開発を行う。

② 新たな理論・手法を取り入れたプログラム開発

新たな理論・手法としてライフスキル（注釈1）、アンガーマネージメント（注釈2）等の導入を図る。

（注釈1）ライフスキル…知識を行動に活かすための教育法。ライフは、生命・生活・人生等の意味を包括した概念。スキルは、行動の技能、実践力を意味する。

（注釈2）アンガーマネージメント…感情の発達過程で、自分の怒りに対する理解を深め、適切な表現の方法を身につけていくことによって、暴力やいじめ等を減少させる手法。

③ 間接協力員とのプログラム開発

多くのプログラム開発を目指し、間接協力員の授業の吸収・活用を進める。また、養護教諭の協力を得て、「安全・健康」面でのプログラム開発を行う。

(2) 授業実践プログラムの普及について

Webへの掲載を継続的に進めていくと同時に、教育センターの研修や研究協力員会議の機会をとらえ、冊子の配付等を通して、研究のPRを積極的に進め、授業実践プログラムの活用が広く図られるように努める。広報リーフレットを全県下小・中・高等学校へ配布し、本プログラムが多くの教師に活用されるよう働きかける。さらに、センター内外において、本プログラムの実技講習の場の設定と普及に一層努めたり、研究協力員を核とした校内外のネットワークづくりを支援したりする。

6 研究の実際

(1) 小学校における授業実践プログラムの実際

No.	題 材 名 *実施時期	学級活動の 内容・項目	ね ら い	概 要	理論・手法
1	新たな 出会い (学級開き) *年度当初	☆(2)③ ★(1)①	① 緊張や不安を軽減しながら望ましい関係づくりをスタートし、学級担任の思いや願いを知り、今後の学級生活に見通しを持つことができる。	① 「仲間探し」をして友達との共通点を探したり、「あなたは名探偵」をして友達はどんな人かを質問し合ったりする中でふれあいの時間を体験する。 ② 「アインシュタインの言葉」を体験する。	○ グループ・エンカウンター ○ プロジェクト・アドベンチャー
2	NO!と 言ってみよう *どの時期でも可	☆(2)③ ☆(2)⑤ ★(1)①	① 人から喫煙・飲酒・薬物等を勧められた場合には、はっきり断ることが大切であることを理解し、具体的な断り方を考える。	① 喫煙を勧められた場面設定のもと、二人組でロールプレイングを体験する。 ② 万引きを勧められた場面設定のもと、二人組でロールプレイングを体験する。 ③ NOと言える自分について振り返る。	○ ライフスキル 「意思決定スキル」 ○ ロールプレイング
3	仲間って いいな! *学年後半の時期	☆(2)① ★(1)① ★(2)③	① 中学校生活に対する悩みや心配事、夢や目標を聴き合う活動を通して、不安や緊張等を軽減し、仲間で支え合うことの大切さを知る。	① 中学校入学に対してどんな思い・願い・不安等をもっているのか「さいころトーク」を行う。 ② 前向きな聴き方でしっかりと話を聴き合う。	○ 傾聴 ○ ピア・サポート ○ グループ・エンカウンター
4	中学校へ ダッシュ!! *学年後半の時期	☆(2)① ★(1)① ★(2)③	① 中学校生活や学習への不安等に対して、自分の内と外の視点からさまざまな資源(リソース)があることに気付き、積極的に活用しようとする態度を身につける。	① ミラクルパワーシートに自分の内と外という視点から資源を見つけ記入する。 ② シートを見て、自分や身の回りについて振り返る。 ③ 互いに言葉かけをし合い、サポートし合えることに気付く。	○ リソース探し ○ ピア・サポート

※「学級活動の内容・項目」の「☆」は主たる内容・項目を、「★」は関連する内容・項目を示す。

① 学級活動の内容・項目との関連

<p>「小学校学級活動の内容・項目」</p> <p>(1)学級や学校の生活の充実と向上に関すること</p> <p>① 学級や学校における生活上の諸問題の解決 [No 1 ★] [No 2 ★] [No 3 ★] [No 4 ★]</p> <p>② 学級内の組織づくりや仕事の分担処理</p> <p>(2)日常の生活や学習への適応及び健康や安全に関すること</p> <p>① 希望や目標をもって生きる態度の形成 [No 3 ☆] [No 4 ☆]</p> <p>② 基本的な生活習慣の形成</p> <p>③ 望ましい人間関係の育成 [No 1 ☆] [No 2 ☆] [No 3 ★] [No 4 ★]</p> <p>④ 学校図書館の利用</p> <p>⑤ 心身ともに健康で安全な生活態度の形成 [No 2 ☆]</p> <p>⑥ 学校給食と望ましい食習慣の形成</p>
--

② 直接協力校の実態

6年生進級に当たり、30人程度学級編制により、クラス替えが行われた。新しい担任や友人関係の変化など、子どもたちを取り巻く学習・生活環境が大きく変化した。明るく素直な子が多く、全体的に男女の仲もよい。

③ プログラム開発の視点

年度当初の学級内における人間関係づくりやコミュニケーション能力の育成、中学校入学に向けた指導援助に焦点を当て、グループ・エンカウンター、プロジェクト・アドベンチャー、ライフスキル、ピア・サポート等の手法を用いた授業実践プログラム開発を試みることにした。

④ 授業の実際

ア プログラム案1「新たな出会い(学級開き)」

〔授業の内容〕

導入では、新しい気持ちで楽しい学級づくりをみんなですていこうという担任の思いを伝えた。

展開では、まず「仲間探し」の活動を通して、自分と同じ共通点をもつ友達を見出す体験をした。次に、「あなたは名探偵」を通して、いろいろな人と出会い、互いを知り合う活動を行った。質問に答えた相手からサインをもらうことで、相手の名前と情報を得るというもので、初めの方は同性同士のやり取りが多かったが、徐々に打ち解け、後半では男女間においても交流を図ることができた。

学級担任のメッセージが入った「アインシュタインの言葉」では、自然と互いの頭が近づき、協力し合う中で言葉が完成すると、自然に「やったー」「すっきり」などの声があがった。こんな願いを担任の先生は自分たちに持ってくれているのだと知ることで、今後の日常生活への意識付けになった。

〔児童の感想〕

- ・ 6年生になって、クラスが替わり、新しい人と仲良くできるか心配したけど、この授業をやっていろいろな人と知り合うことができた。
- ・ とても楽しく、これからも友達と仲良くやっていけそうな気がした。
- ・ 先生の願いが入った言葉なんだと思った。いい言葉だなと思った。

〔授業者及び参観者の感想〕

クラスが一緒だった子ども同士でも、意外に相手のことを知らずにいて、今回の学習で新しい発見をしたり、驚いたり、喜んだりしている姿が多く見られた。友達のことを知る手立てとしては、よかったと思う。グループで文字を並べ替える活動は、なぞときのおもしろさが加わり、自然と協力体制ができ、和やかな雰囲気が生まれた。



〔成果と改善の視点〕

- ・ 学年当初の緊張感や不安を軽減し、これからの友達づくりへの期待感を高めることができた。
- ・ 2時間設定やモジュール設定など学校の実態に合わせて応用することが可能である。

イ プログラム案2「NO!と尝试みよう」

〔授業の内容〕

導入では、喫煙・飲酒・薬物等の統計資料「初回使用のきっかけ」および写真資料等をもとに本時のねらいを確認した。

展開では、2つの場面「喫煙」と「万引き」を取り上げた。喫煙を勧められる場面では、なぜ断るのが難しいのかを出し合い、その後、断る時のセリフを考え、実際に二人組でロールプレイングを行った。体験及びその後の振り返りを通し、勧める相手との

関係により、その後の関係のとぎれや変化等を気遣いながらも、最終的に「NO!」ということが自分を守り、相手をも大切にすることにつながっていくことを感じ取っていた。

〔児童の感想〕

- ・ やってはいけないことをはっきり断るということは、とても大切で、そうしなくてはいけないことが分かった。
- ・ 今までだったら、誘われたらやってしまったかもしれないけれど、今日の授業で断る自信がついたように思う。



〔授業者及び参加者の感想〕

- ・ 二つの場面提示は、子どもたちにとって身近な問題なので状況をとらえやすかったようだ。
- ・ 子どもたちなりに、断る理由があり、子どもの心の動きが分かった。「自分も吸いたくなるかも」「自分もマンガの本がほしい」などの反応や、嫌われたくないなどの理由で「断れないかもしれない」などの本音が垣間見えた。

〔成果と改善の視点〕

- ・ いけないことだと分かっている誘われるとやってしまうことは、子どもの生活の中で意外に多い。誘われても「NO!」と言える姿勢が大切であることに気付けたと思う。

ウ プログラム案3「仲間っていいな!」

〔授業の内容〕

導入では、事前アンケートの傾向をもとに本時のねらいと進め方を確認した。

展開では、教師が「前向きな聴き方」と「気が乗っていない聴き方」の両方をモデリングし、うなずきながら相手の顔を見たり、笑顔で相手の話を聴いたりする共感的な聴き方について確認した。次に、「さいころトーキング」により出た目に応じて、トーク1（現在の生活）とトーク2（中学校生活）の活動を行った。子どもたちは、この活動を通して中学校生活への願い・思い・不安等を互いに聴き合った。その後、振り返りカードに感想を記入した。

[児童の感想]

- ・ 中学校生活について、みんないろんな悩みとか不安とか持っているのが分かった。私と同じ不安を持っている人もいて、中学校への不安がちょっとなくなりました。
- ・ 仲間同士で支え合うことがとても大切だということが分かった。

[授業者及び参観者の感想]

- ・ 他の人も同じ悩みを持っていると気付くことで、不安感が小さくなっていく様子がうかがわれた。グループ内で、前のめりになって真剣に聞く姿勢が多く見られた。

[成果と改善の視点]

- ・ 中学校生活に関して、悩み始める時期だからこそ、この授業の意味があると思った。



エ プログラム案4「中学校へダッシュ!!」

[授業の内容]

導入では、心配や不安への対処として身の回りのリソース（資源）探しをすることを確認した。

展開では、「ミラクルパワーシート」を用い、「自分の中にあるリソース（資源）」「自分を支えてくれる人・もの・こと」「ちょっと落ち込んだとき自分を励ますやさしい言葉」「自分の元気の素」を書き出す活動を行った。活動中は、教室内に鉛筆の音だけが聞こえる感じで、自分を客観的に見つめる時間となった。その後、二人組になり、「自分を励ますやさしい言葉」を互いに掛け合う活動を行った。

[児童の感想]

- ・ 今日の授業を通して、自分の持っているよいところを改めて感じる事ができた。
- ・ ミラクルパワーシートに書くことで、自分や周りの人の存在に気付く事ができた。
- ・ シートに書くことで中学校への不安も少なくなったように思う。中学校生活が楽しみになった。

[授業者及び参観者の感想]

- ・ 自分の中のリソース（自助資源）を見つけられない児童もあり、担任として自己肯定感を育てる日頃のかかわりが不足しているのだと感じた。今

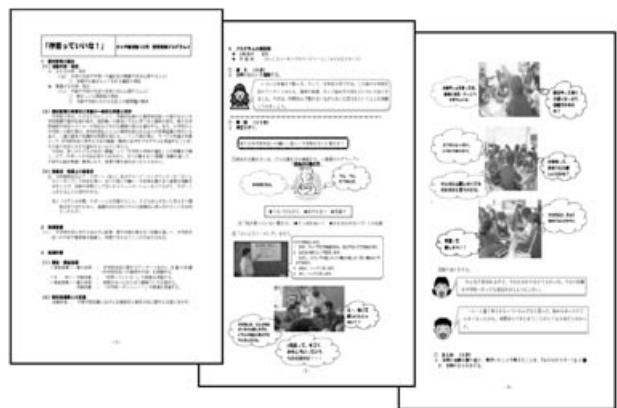
後より一層意識してかかわりたい。

[成果と改善の視点]

- ・ 「自己のよさ」「自分を支える人・もの・こと」等について少ししか書けない児童に対しては、書き加える時間の確保や事後指導としての個別のかかわりが重要だと感じた。



⑤ プログラムの開発



開発したプログラムは福島県教育センターのホームページ(<http://www.center.fks.ed.jp/>)からダウンロードできるようにした。上記はその一部である。

⑥ 研究協力員との連携

ア 直接協力員

- ・ 教育センター所員が、具体的な手法を複数提示し、その後、学年全体で実態を踏まえながら、授業案や資料等を検討した。授業は、1クラスが先行して実施し、修正部分を受けて残り3クラスが実施するという方法をとった。授業実施後は事後検討を重ね、汎用性のあるプログラム案に練り上げていった。

イ 間接協力員

- ・ 間接協力員は、プログラム案を試行するとともに他学年での実施を働きかけるなど、プログラムの活用・普及の可能性を探った。

ウ 研究協力員会議

- ・ 協力員が各学校で実施している教育相談的手法を用いた授業を互いに紹介したり、外部研修での資料等を情報交換したりする中で、互いのスキルアップを図った。

(2) 中学校における授業実践プログラムの実際

No.	題 材 名 *実施時期	学級活動の 内容・項目	ね ら い	概 要	理論・手法
1	緊張への対処の仕方 *どの時期でも可 (大会やテスト等を間近に控えた時期)	☆(2)イ① ★(2)ア① ★(2)ア②	① ストレスへの対処法(コーピング)を知り,日常生活に活用しようとする態度を育てる。	① 心の中にあるマイナスの言葉をプラスの言葉に変換する。 ② 身体の一点に集中することで強い力が出せるようになることを体験する。 ③ リラックス場面を思い浮かべ,呼吸を調整することで緊張を軽減できることを体験する。	○ ストレスマネジメント ○ メンタルトレーニング
2	怒りをコントロールするために *どの時期でも可	☆(2)イ① ★(2)ア① ★(2)ア②	① 自分の「怒り」について客観的に振り返り,適切な表現方法について考える。	① 「怒り」についてのイメージを自由に出し合う。 ② 自分の「怒り」について,「だれに対して」「どんなことを」「どの程度怒っているのか」を振り返る。 ③ 「怒り」の感情を適切に表現することの大切さを理解し,自分に合った方法について考える。	○ アンガーマネジメント ○ ブレーンストーミング

※「学級活動の内容・項目」の「☆」は主たる内容・項目を,「★」は関連する内容・項目を示す。

① 学級活動の内容・項目との関連

「中学校学級活動の内容・項目」
(1)学級や学校の生活の充実と向上
① 学級や学校における生活上の諸問題の解決
② 学級内の組織づくりや仕事の分担処理
③ 学校における多様な集団の生活の向上
(2)ア 個人及び社会の一員としての在り方
① 青年期の不安や悩みとその解決 [No1★][No2★]
② 自己及び他者の個性の理解と尊重 [No1★][No2★]
③ 社会の一員としての自覚と責任
④ 男女相互の理解と協力
⑤ 望ましい人間関係の確立
⑥ ボランティア活動の意義の理解
(2)イ 健康や安全に関すること
① 健康で安全な生活態度や習慣の形成 [No1☆][No2☆]
② 性的な発達への適応
③ 学校給食と望ましい食習慣の形成
(3)学業生活の充実,将来の生き方,進路の適切な選択
① 学ぶことの意義の理解
② 自主的な学習態度の形成と学校図書館の利用
③ 選択教科等の適切な選択
④ 進路適性の吟味と進路情報の活用
⑤ 望ましい職業観・勤労観の形成
⑥ 主体的な進路の選択と将来設計

② 直接協力校の実態

数年前から,さまざまな機会にグループ・エンカウンターを取り入れるなど,生徒の人間関係づくりを積極的に推進している学校である。また,学校全体でメンタルトレーニングを推進し始めており,生徒たちは明るく伸び伸びと生活している。学校全体

が落ち着いたきのある,安心できる場になっている。

③ プログラム開発の視点

中学3年生は,最後となる部活動の大会や進路の選択・決定等において,大きなストレスを抱えやすい時期である。

今回は,緊張場面でのリラクゼーション及び集中力向上のための対処法として,ストレスマネジメント教育やメンタルトレーニングに基づくプログラム開発と,自分の「怒り」の感情について理解を深めながら適切な表現の仕方を身に付けるための対処法として,アンガーマネジメントに基づくプログラム開発に取り組んだ。

④ 授業の実際

ア プログラム案1「緊張への対処の仕方」

〔授業の内容〕

ウォーミングアップの後,中体連の大会など緊張する場面を想起し,そのときに心の中に生じた「マイナス



の言葉」を「プラスの言葉」に変えて発表する活動を行った。次に,ペアで「マイナスの言葉」と「プラスの言葉」によって発揮される力の強さの違いを

比較し、「プラスの言葉」の効果を確認した。また、緊張場面とリラックス場面の呼吸の速さや深さを確認し、呼吸の仕方を変えることで緊張を軽減できることを体験や感想の発表等を通して学んだ。

〔生徒の感想〕

- ・ 中体連やテストのときに、ぜひ使ってみよう。試合中に思い出して、落ち着いてゲームを進めていきたい。
- ・ 「呼吸法」は無意識に普段から行っていたような気がする。でも「プラスの言葉」は考え付かない方法で、実際にやってみたら違いも明らかだったのでびっくりした。これから増えていく「緊張の場面」で活用してみたい。
- ・ 最初は、あまりやる気になれなかったが、緊張したときのことなどをイメージして呼吸が違うことに気づき、この時間がどれだけ自分のためになるかが分かった。この「緊張への対処の仕方」を生かしていきたいと思った。
- ・ 私は、とてもあがり症がひどくて、ぜん息の発作が起きたりして本当に悩んでいる（面接の時に起きたらどうしようとか思っている）ので、もっと効く方法を知りたい。

〔授業者及び参観者の感想〕

- ・ 授業で1回やればよいというものではない。この授業の後に、短学活や部活動などでも、思い付いたときに気軽にやる必要があると、そのような雰囲気作りこそが大切である。
- ・ 「やったことがある」という生徒に対しては、インストラクション時の手伝いや、「以前にやった時との違い」を聞いてみるなどして、その経験を生かせると良い。
- ・ 事前にワークシートを配付し、「(1)緊張場面」～「(3)心の中に響いている声」を宿題としたことで、「『マイナスの言葉』を『プラスの言葉』に変える」ことがスムーズにできた。なお、初めから『プラスの言葉』になっている生徒には、互いに相談させたり、他者の発表を聞いて見直しをさせたりすることで、さらに良い気づきが得られるようにさせたい。
- ・ 「緊張はいけない」とか「リラックスしなけれ

ばならない」など、いわゆる「ねばならない思い」を強くしてしまう生徒が出てくることも予想される。「ほどよい緊張感」が「よい仕事」や「よい結果」につながっている例なども、伝えていくことが大切である。

〔成果と改善の視点〕

本プログラムは、2クラス合同の授業の形で、中体連地区大会の1週間前に実施した。振り返り用紙の自由記述欄には「部員全員に教えたい」「中体連の試合やテストのときに使ってみよう」という感想を記している生徒が多く、本プログラムの目的である「ストレスへの対処法を知り、日常生活に活用しようとする態度を育てる」ことは、おおむね達成できたと考える。しかしながら「もっと効く方法を知りたい」と訴える生徒もおり、こういった切実な思いを真摯に受け止めながら、今後さらに計画的、継続的な取り組みを実施していく必要がある。

イ プログラム案2「怒りをコントロールするために」

〔授業の内容〕

「好ましくない感情」ととらえられがちな「怒り」の感情について、認識を新たにし、「適切な表現の仕方」を考えることができるように、2単位時間扱いの授業とした。

1時間目には、「怒り」についてのイメージや自分の「怒り」について、文章完成法を用い



て客観的に振り返った。また、「怒り」はだれもが持っている自然な感情であることを知り、その上で「怒り」のコントロールの仕方や適切な表現方法を身に付けていくことは、他者との関係を構築する上で必要なものであることへの気づきを促した。


2時間目には、自分の怒りのレベルや表現の仕方が場面や対象によって異なることをワークシートを用いて整理し、さらに友達の発表を聞きながら、「適切な表現」ができるようになることの大切さを

理解し、意欲をもてるようにした。

[生徒の感想]

- ・ 今日発表してくれた友達が、どんなことで、どのくらい怒りを表現しているのかが分かって、びっくりした。人それぞれ感じ方は違うけれど、共通する部分はあるんだなあと思った。
- ・ 友達の「とりあえず散歩に行く」というユニークな発表を聞いて、今度キレたときには真似してみようと思った。
- ・ 「怒りを表現していいんだ。表現してみよう」という気になれた。また、表現の仕方について考えることができてとてもよかった。
- ・ 聞き流したり、何かに当たったり、その場から離れたり、様々な怒り方があったことが分かった。これからは、相手も自分も傷つけないような対処ができたらいと思った。

[授業者及び参観者の感想]

- ・ 「怒りのコントロール」に至るためには、「自分自身の怒りの感情」と「怒りの構造」の理解が前提となり、2単位時間が必要となる。
- ・ 生徒は、「怒りの温度計」の「 $\sim 60^{\circ}\text{C}$ 」以上の欄についてはイメージしやすいようだが、「 $\sim 40^{\circ}\text{C}$ 」以下の欄については難しく、空欄になっている生徒が多かった。授業の中で、「『 0°C の怒り』ってどんなことだろう」と質問し、全員で考える時間をきちんととって、「『 $\sim 40^{\circ}\text{C}$ 』はコントロールしやすい怒り」「『 $5\sim 15^{\circ}\text{C}$ 』や『 0°C 』は『冷えた関係』や『無視』といったイメージが、生徒たち自身の気付きとして発表されるとよかった。

[成果と改善の視点]

この授業は、学級担任がそれぞれの学級で実施した。振り返り用紙には、「怒り」についての自己理解・他者理解の促進がうかがわれる記述や、「相手も自分も傷つけない表現」「適切な表現」について

具体的に書いている生徒が多く、ねらいはおおむね達成できたと考える。しかし、自分の「怒り」を客観的にとらえることに対して抵抗を示したり、自分の「怒り」について深く考えたことで、自己否定や自己卑下を強めてしまう生徒が出てくることも十分予想される。そのような生徒一人一人への個別対応・アフターケアの在り方についても、きちんと考えていく必要がある。

⑤ プログラムの開発



開発したプログラムは、福島県教育センターのホームページ (<http://www.center.fks.ed.jp/>) からダウンロードできるようにした。

⑥ 研究協力員との連携

ア 直接協力員

研究協力員が授業案及びワークシートを作成し、細かな配慮事項等について担当所員と具体的に協議・改善を加えてから授業を実施した。研究協力員は学年主任で、1回目の授業は自らが授業者となって2クラス合同の授業を担当し、2回目の授業では学年それぞれの学級担任の支援にあたった。

イ 間接協力員

研究協力員会議では、プログラムの汎用性を高めるための協議に参加した。研究協力校での授業では、授業参観及び事後研究会に参加し、プログラムの修正にかかわった。

ウ 研究協力員会議

今年度は、直接協力員1名、間接協力員6名、担当所員1名の計8名で会議を持った。直接協力員が実施したプログラム案の改善点についての協議と、間接協力員の実践報告・質疑を行い、新たなプログラム開発に向けての可能性を探った。

(3) 高等学校における授業実践プログラムの実際

No.	題 材 名 *実施時期	ホームルーム活 動の内容・項目	ね ら い	概 要	理論・手法
1	ストレスと の上手なつ きあい方 *どの時期 でも可	☆(2)イ① ★(1) ① ★(2)ア① ★(2)ア②	① ストレスについての 理解を深める。 ② ストレスとの上手な 付き合い方を考える。	① 日頃ストレスと感 じているものを取り 上げ、ストレス度を チェックする。 ② 各自のストレス 対処法を話し合う。 ③ ストレスとの 上手な付き合い方 について考える。	○ ストレス マネジメント
2	考え方を柔 らかくする *どの時期 でも可 (但し、No 1の実施 後が望ま しい)	☆(3)⑥ ★(2)ア① ★(2)ア③ ★(2)イ①	① 演習を通して、考 え方を柔らかくす ることの必要性を 理解する。	① 葛藤場面のロー ルプレイングを行 う。 ② ロールプレイン グの場面における 柔らかな思考方 法を話し合う。 ③ 考え方を柔ら くすることの必要 性を理解する。	○ ストレス マネジメント ○ 論理療法 ○ ロールプレ イング

※「学級活動の内容・項目」の「☆」は主たる内容・項目を、「★」は関連する内容・項目を示す。

① ホームルーム活動の内容・項目との関連

<p>「高等学校ホームルーム活動の内容・項目」</p> <p>(1) ホームルームや学校の生活の充実と向上</p> <p>① ホームルームや学校における生活上の諸問題の解決 [No1★]</p> <p>② ホームルーム内の組織づくりと自主的な活動</p> <p>③ 学校における多様な集団の生活の向上</p> <p>(2)ア 個人及び社会の一員としての在り方生き方</p> <p>① 青年期の悩みや課題とその解決 [No1★] [No2★]</p> <p>② 自己及び他者の個性の理解と尊重 [No1★]</p> <p>③ 社会生活における役割の自覚と自己責任 [No2★]</p> <p>④ 男女相互の理解と協力</p> <p>⑤ コミュニケーション能力の育成と人間関係の確立</p> <p>⑥ ボランティア活動の意義の理解</p> <p>⑦ 国際理解と国際交流</p> <p>(2)イ 健康や安全</p> <p>① 心身の健康と健全な生活態度や習慣の確立 [No1☆] [No2★]</p> <p>② 生命尊重と安全な生活態度や習慣の確立</p> <p>(3) 学業生活の充実、将来の生き方と進路の適切な選択決定</p> <p>① 学ぶことの意義の理解</p> <p>② 主体的な学習態度の確立と学校図書館の利用</p> <p>③ 教科・科目の適切な選択</p> <p>④ 進路適性の理解と進路情報の活用</p> <p>⑤ 望ましい職業観・勤労観の確立</p> <p>⑥ 主体的な進路の選択決定と将来設計 [No2☆]</p>

② 直接協力校の実態

県内を代表する運動部、文化部を有し、部活動が盛んな学校である。該当クラスには、上級学校への進学、就職を前にし、進路決定に関わる不安を抱える生徒が多い。

③ プログラム開発の視点

高校3年生は、進路決定の時期であり、ストレス

場面を多く経験する。また、就職後においても、離職を招くような職業生活上の様々なストレス場面を体験することが予想される。今回は、ストレスマネジメント教育の視点を取り入れ、ストレスについて理解を深め、いかにストレスと上手に付き合っていくかに焦点を当てプログラム開発を行った。

④ 授業の実際

ア プログラム案1「ストレスとの上手なつきあい方」

〔授業の内容〕

本プログラムでは、生徒が日頃ストレスと感
じているものを取り
上げ、意識化
を図るために、
その状況を数
値化した。ま



また、各自のストレス対処法を相互に振り返ることによって、既に持っているストレスとの上手な付き合い方を確認した。最後に、各自が持つストレス対処法について発表し合うことによって、様々な対処法があることを学んだ。

〔生徒の感想〕

- ・ ストレスの対処法にもいろいろあることが分かったので、今後は自分の生活の役に立てばいいと思った。

- ・ 気分転換の他にもさまざまな対処法があるということは、今まで考えもしなかった。
- ・ 自分の抱えているストレスと向き合えた気がした。
- ・ “ストレスを感じない人間は死んだ人間だ”と本で読んだことがあるので、ストレスで生かされているのかもしれないと改めて感じた。
- ・ クラスのみんなも自分と同じ悩みを抱えていることを知って、悲劇のヒーローを気取っていた自分が何だか恥ずかしく思えた。
- ・ 自分は、ストレスをためやすい方なので、今日の授業は、大変参考になった。
- ・ これからはプラス思考でいこうと思った。

・ ストレスの原因・理由への対処法にあったように、「いいところ探しをする」ことは難しいけれども、自分も前に進めるから一番いいと思った。



- ・ 遊んだり、寝たり、歌ったりで対処をしてきたけれども、結局どれも「気分転換」という対処法だということに気付いた。もっと別の対処法も考えたいと思う。

〔授業者自評〕

- ・ 導入部分で教師の体験談を交えたことにより、生徒の興味関心を引くことができた。
- ・ 生徒たちはストレスの対処法に関する話し合いに積極的に取り組んでいた。
- ・ ストレス度を数値で置き換え、チェックをすることにより、生徒は自分のストレスをとらえやすくなったようだ。
- ・ この授業を通して、生徒たちはストレスとの上手な付き合い方を考える契機になったと思う。今後は、学校生活のさまざまな機会をとらえて、生徒自らが今回の授業を日常生活に応用できるよう指導をしたい。

- ・ 今回の授業内容は部活動においても活用できると感じた。
- ・ 班ごとの話し合いを踏まえた最後のまとめの部分で時間がかかってしまった。例示や説明の仕方については、事前の準備も含め、もう少し工夫する必要があった。

〔成果と改善の視点〕

「振り返りカード」の自由記述によれば、「ストレスと向き合うことができた」「様々なストレスの対処法があることが分かった」といった感想を記している生徒が多く、本プログラムの目的は、おおむね達成されたといえる。今回は、ストレス



についての全般的な理解を目的とした内容であったが、次回は具体的な対処法について取り上げながら演習をしていきたい。

Ⅱ プログラム案2「考え方を柔らかくする」

〔授業の内容〕

本プログラムでは、ストレスをなくすのではなく、ストレスと上手につき合う方法の一つとして、「考え方を柔らかくする」ことの必要性について演習を通して学んだ。

演習にあたっては、まず、前時の「ストレスとの上手なつきあい方」について復習した後、職業生



活上の葛藤場面を教師のロールプレイングを通して理解した。その後、生徒自身がロールプレイングを行い、葛藤場面をいかに回避するかをワークシートを使いながら考えた。その後、各グループごとに意見交換を行い、物事の見方・考え方を柔軟にするこ

との必要性について話し合った。

〔生徒の感想〕

- 考え方を柔軟にすることについてより深く知ることができた。
- ネガティブな考え方はやめようと思った。
- 今日学んだ内容を、これからの受験勉強に生かしていきたい。
- 考え方は変えようと思えば、いくらでも前向きに変えられるものと思った。
- 強くこだわってばかりいるといいことがなくなりそうだった。
- 悩みがあっても、ものの見方を変えることで自分への負担が軽くなると思った。
- こだわりすぎていた考え方を柔軟な考え方に変えるのは案外難しかった。
- 今回の授業を通して、物事を決定する際に自分自身の考え方を整理することの大切さを学ぶことができた。

〔授業者自評〕

- 前時の「ストレスとの上手なつきあい方」と連続で実施したため、指導目標の関連性という点で成功であった。そのため、本時のねらいを生徒に理解させることができた。
- グループ活動やロールプレイングの手法を授業に取り入れたため、生徒は活発に活動することができた。
- 生徒にとってのこだわりを受け止めつつも、柔軟に考えることの必要性をどのように指導していくかは難しいことだと感じた。

〔成果と改善の視点〕

「振り返りカード」の自由記述によれば、「こだわりすぎていた考え方を柔軟な考え方に変えるのは難しかった」とあるものの、「考え方はいくらでも前向



きに変えられることが分かった」「柔軟な考え方や対応をしたい」といった感想を記している生徒が多く、本プログラムの目的は、おおむね達成されたといえる。今後は、教育課程編成の段階で3年間のカリキュラムに計画的に組み込み、進路実現や卒業後の自己実現につながるプログラムの開発を検討していきたい。

⑤プログラムの開発



開発したプログラムは、福島県教育センターのホームページ (<http://www.center.fks.ed.jp/>) からダウンロードできるようにした。

⑥ 研究協力員との連携

ア 直接協力員

担当所員が具体的な手法を提示し、メール等で連絡を取り合いながら、指導案、資料について検討した。授業実施にあたっては、副担任の協力を得ることができた。

イ 間接協力員

プログラムの開発・実施に向けて、間接協力員が相互に連絡を取り合い、意見交換を活発に行うなど、各地区でネットワークづくりを行った。

ウ 研究協力員会議

本年度は、研究協力員会議の運営方法の改善を図った。特に、直接協力員が実施した2つのプログラム案に汎用性を持たせるために、直接・間接協力員及びセンター所員が協議を行いながら、共同でプログラムの開発を行った。

Ⅲ 研究のまとめ

1 本年度の取組み

(1) 授業実践プログラムの開発

直接協力員との共同研究により、小学校で4つ、中学校と高等学校で各2つのプログラムを開発した。また、間接協力員との連携により、中学校と高等学校で各1つのプログラムを開発した。学級（ホームルーム）活動の内容・項目から見ると、小学校のプログラムでは4つの内容・項目との関連付けが図られた。中学校では5つ、高等学校では7つの関連付けが図られた。

① 直接協力校とのプログラム開発

ア 年度当初のプログラム

直接協力校の小学校においては、年間計画に基づき、4月に学級開きの授業実践を行い、プログラム化を図った。同時に、間接協力員も授業実践を試行することで、より汎用性の高いプログラムとなった。

イ 新たな理論・手法を取り入れたプログラム

本年度は、新たに4つの教育相談的理論・手法を導入し、プログラム開発を進めた。

小学校においては、「ライフスキルを取り入れ、意志決定により望ましい行動変容の仕方を学ぶプログラム」「ピア・サポートを取り入れ、互いに支え合う関係作りを学ぶプログラム」「リソース（資源）の考えを取り入れ、解決のイメージの仕方を学ぶプログラム」の3つである。

中学校においては、「アンガーマネジメントを取り入れ、学校生活や家庭生活における怒りの感情コントロールの仕方を習得するプログラム」の1つである。

ウ ストレスマネジメント教育の理論・手法を取り入れたプログラム

中学校・高等学校においては、ストレスマネジメント教育を「進路決定とストレス」という視点から取り入れ、プログラム開発を行ってきた。

エ 学校行事と関連したプログラム

中学校においては、中体連や定期テスト、校内合唱コンクール等の学校行事と関連付けを図ったプログラムを開発した。

オ 卒業後、予期される問題への対処プログラム

各校種ともに卒業後や将来に向けて、予期される問題を未然に防いだり、よりよい解決方法を見い出したりできるよう、不安・心配・ストレス等を軽減・解消する対処法を身に付けるプログラムを開発した。

② 間接協力員とのプログラム開発

間接協力員が、自校のニーズに応じて実施している授業を吸収・発展させる形で、相補的に情報提供しながら授業実践プログラム化に取り組んだ。中学校・高等学校においては進路選択に関するプログラムを開発した。

③ 研究協力員会議におけるプログラム開発

高等学校においては、直接協力員が実施した2つのプログラム案に汎用性を持たせるため、研究協力員会議において、協議を行いながら共同でプログラム開発を行った。

④ 直接及び間接協力員による共同プログラム開発

小学校においては、プログラム案に基づく授業実践を直接及び間接協力員が同時に行うなど、多角的にプログラムの修正と練り上げに努めた。

(2) 授業実践プログラムの普及

① Webの活用

福島県教育センターのホームページからダウンロードできることを情報提供するとともに、授業実践プログラムの開発に沿って、Webへの掲載を継続的に進めてきた。

② PR活動

今年度は、「広報リーフレット」を作成し、県内の小・中・高等学校を始め関係機関等に配付するとともに、福島県教育委員会メールマガジン【うつくしま教育通信】のVol.15「教員耳より情報」や、本教育センター所報「窓」145号～147号により広報を行った。

また、教育センターの研修者へ冊子を配付するなど、開発した授業実践プログラムを多くの教師に活用してもらうように研究のPRを積極的に進めてきた。冊子の表紙部分には、ホームページのアドレス (<http://www.center.fks.ed.jp/>) を記載し、過年度・他校種のプログラムにも目を向けてもらえるよう工夫した。

本教育センターの「学校教育相談実践講座」「学校教育相談運営講座」など、各学校における生徒指導・教育相談の推進役となる教員やスクールリーダーである校長の研修において、本プログラムを活用した演習を実施した。実技体験を通して研究への理解を促すとともに、自校でのプログラム活用と本研究への参加・協力を呼びかけてきた。

県内各地での校内研修会等において、本プログラムに基づく教育相談的手法の実技演習を行い、情報提供と普及に努めた。

2 成果と課題

(1) 成果

① 授業実践プログラムの開発に関して

ア 「生きる力」の育成に効果的である1学期前半に、小学校におけるプログラム開発を実施できたことによって、学級編制が行われた新年度スタート時の子どもの不安や緊張を軽減し、人間関係作りのきっかけを作ることができた。

また、間接協力員の実践を通して、人間関係が固定化したり、学級の状態が停滞したりする時などにも、互いの理解を広げることに活用できることがわかった。

イ ライフスキル、アンガーマネジメント、ピア・サポートの新たな手法を取り入れた学級（ホームルーム）活動の展開例を作り上げることができた。また、どの校種においても、卒業学年という意味合いから、進路面に焦点をあてたプログラム作りがなされた。

ウ ニーズに応じながら、直接及び間接協力員と授業実践プログラムの開発を進めることができた。研究協力員間の複線的開発ルートができたことで、プログラム開発の体制もより整備・強化されてきた。プログラム開発形態のバリエーションを提示できた。

様々な教育相談的手法を生かしたプログラム開発をしてきたことにより、教育相談的手法そのものに関する理解を広げることができた。

② 授業実践プログラムの普及に関して

ア Web掲載・PR活動等により、県内における広報を広く手がけることができた。また、他県の教

育研究機関やホームページや大学の紀要参考文献に採り上げられるなど、県外の教育関係機関にも普及しつつある。

イ 研修講座でのプログラム紹介や演習体験の提供、各種研修会でのPRやプログラム集の配付等、様々な機会をとらえた広報活動を展開したことにより、間接協力員の拡大とともに幅広くプログラムに対する関心を高めることができた。

(2) 課題

① 授業実践プログラムの開発に関して

各学校の多様なニーズに一層応えるために、学級（ホームルーム）活動の内容・項目に対応したより多くのプログラム開発が必要である。

② 授業実践プログラムの普及に関して

実技講習等の機会を数多く設定し、授業実践プログラムの普及を一層推進する。

<参考・引用文献>

- 1) グループのちからを生かす 成長を支えるグループづくり
プロジェクトアドベンチャー・ジャパン著
(みくに出版 2005年)
- 2) 喫煙・飲酒・薬物・性などの課題に対応
実践からはじまるライフスキル学習
大津一義著 (東洋館出版社 1999年)
- 3) すぐ始められるピア・サポート指導案&シート集
森川澄男監修 (ほんの森出版 2002年)
- 4) 指導援助に役立つスクールカウンセリング・ワークブック
黒沢幸子著 (金子書房 2002年)
- 5) メンタルトレーニングで部活が変わる
上杉賢士監修 加藤史子著 (図書文化 2004年)
- 6) キレやすい子の理解と対応
学校でのアンガーマネジメント・プログラム
本田恵子著 (ほんの森出版 2003年)
- 7) ストレスマネジメントフォキッズ 小学生用
ストレスマネジメント教育実践研究会
(東山書房 2003年)
- 8) シリーズ学校で使えるカウンセリング①
教師が使えるカウンセリング
諸富祥彦著 (ぎょうせい 2004年)
- 9) 特別活動指導資料39集 高等学校教育課程編成の手引き(学習指導要領関係質疑応答集) 特別活動編
(福島県教育委員会 2002年)

小 学 校 学級活動の内容・項目 《授業実践プログラム》	中 学 校 学級活動の内容・項目 《授業実践プログラム》	高 等 学 校 ホームルーム活動の内容・項目 《授業実践プログラム》
(1) 学級や学校の生活の充実と向上に関すること ① 学級や学校における生活上の諸問題の解決 《関★》小2①「みんななかよく」 《主☆》小2③「話の聞き方・話し方」 《関★》小4①「3つの話し方」 《関★》小4②「わたしのお願い」 《関★》小4③「みんなで協力」 《関★》小6①「新たな出会い」 《関★》小6②「NO!と尝试してみよう」 《関★》小6③「仲間っていいな!」 《関★》小6④「中学校へダッシュ!!」	(1) 学級や学校の生活の充実と向上に関すること ① 学級や学校における生活上の諸問題の解決 《主☆》中1②「学級生活のなかで(私たちにできること)」 《主☆》中2①「新たな学年を迎えて(学級開き)」 ② 学級内の組織づくりや仕事の分担処理 《関★》中1②「学級生活のなかで(私たちにできること)」	(1) ホームルームや学校の生活の充実と向上に関すること ① ホームルームや学校における生活上の諸問題の解決 《主☆》高1②「クラスについて思うこと」 《関★》高2①「自尊尊重の表現方法(コミュニケーション技能の習得)」 《関★》高2②「自尊尊重の表現方法(問題解決のためのシナリオ作り)」 《関★》高3①「ストレスとの上手なつきあい方」
② 学級内の組織づくりや仕事の分担処理	③ 学校における多様な集団の生活の向上	② ホームルーム内の組織づくりと自主的な活動
(2) 日常生活や学習への適応及び健康や安全に関すること	(2) ア 個人及び社会の一員としての在り方に関すること	③ 学校における多様な集団の生活の向上 《主☆》高1②「クラスについて思うこと」 《主☆》高1⑤「出会い(学年・学級開き)」 《主☆》高2③「クラスを超えた人間関係づくり」
① 希望や目標をもって生きる態度の形成 《主☆》小6③「仲間っていいな!」 《主☆》小6④「中学校へダッシュ!!」	① 青年期の不安や悩みとその解決 《関★》中2②「ストレスとその対処法について学ぼう(第1時)」 《関★》中2③「ストレスとその対処法について学ぼう(第2時)」	(2) ア 個人及び社会の一員としての在り方生き方に関すること
② 基本的な生活習慣の形成 《主☆》小2②「きもちのよいあいさつ」	《関★》中3①「緊張への対処の仕方」 《関★》中3②「怒りをコントロールするために」	① 青年期の悩みや課題とその解決 《関★》高1④「ジェンダーってなに?」 《関★》高3①「ストレスとの上手なつきあい方」 《関★》高3②「考え方を柔らかくする」 《関★》高3③「進路決定に向けて一職業選択の基準を考える一」(予定)
③ 望ましい人間関係の育成 《主☆》小2①「みんななかよく」 《関★》小2②「きもちのよいあいさつ」 《関★》小2③「話の聞き方・話し方」 《主☆》小4①「3つの話し方」 《主☆》小4②「わたしのお願い」 《主☆》小4③「みんなで協力」 《主☆》小6①「新たな出会い」 《主☆》小6②「NO!と尝试してみよう」 《関★》小6③「仲間っていいな!」 《関★》小6④「中学校へダッシュ!!」	② 自己及び他者の個性の理解と尊重 《主☆》中1①「自分を知らう(人と個性)」 《関★》中1③「有意義な冬休みにしよう」 《関★》中2①「新たな学年を迎えて(学級開き)」 《関★》中2②「ストレスとその対処法について学ぼう(第1時)」 《関★》中2③「ストレスとその対処法について学ぼう(第2時)」 《関★》中3①「緊張への対処の仕方」 《関★》中3②「怒りをコントロールするために」 《関★》中3③「未来の自分からのメッセージ」	② 自己及び他者の個性の理解と尊重 《主☆》高1①「私の就きたい職業は・・・」 《主☆》高1⑤「出会い(学年・学級開き)」 《主☆》高2①「自尊尊重の表現方法(コミュニケーション技能の習得)」 《主☆》高2②「自尊尊重の表現方法(問題解決のためのシナリオ作り)」 《主☆》高2③「クラスを超えた人間関係づくり」 《関★》高3①「ストレスとの上手なつきあい方」 《関★》高3③「進路決定に向けて一職業選択の基準を考える一」(予定)
④ 学校図書館の利用	③ 社会の一員としての自覚と責任	③ 社会生活における役割の自覚と自己責任 《関★》高1②「クラスについて思うこと」 《関★》高3②「考え方を柔らかくする」
⑤ 心身ともに健康で安全な生活態度の形成 《主☆》小6②「NO!と尝试してみよう」	④ 男女相互の理解と協力	④ 男女相互の理解と協力 《関★》高1③「デートDVってなに?」 《主☆》高1④「ジェンダーってなに?」
⑦ 学校給食と望ましい食習慣の形成	⑤ 望ましい人間関係の確立 《関★》中1①「自分を知らう(人と個性)」 《関★》中2①「新たな学年を迎えて(学級開き)」	⑤ コミュニケーション能力の育成と人間関係の確立 《関★》高1③「デートDVってなに?」 《関★》高1④「ジェンダーってなに?」 《関★》高1⑤「出会い(学年・学級開き)」 《主☆》高2①「自尊尊重の表現方法(コミュニケーション技能の習得)」 《主☆》高2②「自尊尊重の表現方法(問題解決のためのシナリオ作り)」
	⑥ ボランティア活動の意義の理解	《主☆》高2③「クラスを超えた人間関係づくり」 《関★》高3①「ストレスとの上手なつきあい方」
中3①「緊張への対処の仕方」より	(2) イ 健康や安全に関すること	《主☆》高2②「自尊尊重の表現方法(問題解決のためのシナリオ作り)」 《関★》高2③「クラスを超えた人間関係づくり」 《関★》高3①「ストレスとの上手なつきあい方」
	① 健康で安全な生活態度や習慣の形成 《主☆》中1③「有意義な冬休みにしよう」 《主☆》中2②「ストレスとその対処法について学ぼう(第1時)」 《主☆》中2③「ストレスとその対処法について学ぼう(第2時)」 《主☆》中3①「緊張への対処の仕方」 《主☆》中3②「怒りをコントロールするために」	⑥ ボランティア活動の意義の理解
小6①「新たな出会い」より	② 性的な発達への適応	⑦ 国際理解と国際交流
③ 学校給食と望ましい食習慣の形成	③ 学校給食と望ましい食習慣の形成	(2) イ 健康や安全に関すること
(3) 学業生活の充実、将来の生き方、進路の適切な選択に関すること	(3) 学業生活の充実、将来の生き方、進路の適切な選択に関すること	① 心身の健康と健全な生活態度や習慣の確立 《主☆》高3①「ストレスとの上手なつきあい方」 《関★》高3②「考え方を柔らかくする」
① 学ぶことの意義の理解 《関★》中1③「有意義な冬休みにしよう」	① 学ぶことの意義の理解 《関★》中1③「有意義な冬休みにしよう」	② 生命尊重と安全な生活態度や習慣の確立 《主☆》高1③「デートDVってなに?」
② 自主的な学習態度の形成と学校図書館の利用 《主☆》中1③「有意義な冬休みにしよう」	② 自主的な学習態度の形成と学校図書館の利用 《主☆》中1③「有意義な冬休みにしよう」	(3) 学業生活の充実、将来の生き方と進路の適切な選択決定に関すること
③ 選択教科等の適切な選択	③ 選択教科等の適切な選択	① 学ぶことの意義の理解
④ 進路適性の吟味と進路情報の活用	④ 進路適性の吟味と進路情報の活用	② 主体的な学習態度の確立と学校図書館の利用
⑤ 望ましい職業観・勤労観の形成 《関★》中1①「自分を知らう(人と個性)」 《関★》中3③「未来の自分からのメッセージ」	⑤ 望ましい職業観・勤労観の形成 《関★》中1①「自分を知らう(人と個性)」 《関★》中3③「未来の自分からのメッセージ」	③ 教科・科目の適切な選択
⑥ 主体的な進路の選択と将来設計 《主☆》中3③「未来の自分からのメッセージ」	⑥ 主体的な進路の選択と将来設計 《主☆》中3③「未来の自分からのメッセージ」	④ 進路選択の理解と進路情報の活用 《主☆》高1①「私の就きたい職業は・・・」
⑥ 主体的な進路の選択決定と将来設計 《関★》高1①「私の就きたい職業は・・・」 《主☆》高3②「考え方を柔らかくする」 《主☆》高3③「進路決定に向けて一職業選択の基準を考える一」	⑥ 主体的な進路の選択決定と将来設計 《関★》高1①「私の就きたい職業は・・・」 《主☆》高3②「考え方を柔らかくする」 《主☆》高3③「進路決定に向けて一職業選択の基準を考える一」	⑤ 望ましい職業観・勤労観の確立 《関★》高3③「進路決定に向けて一職業選択の基準を考える一」

◎指導主事の個人研究

1 中学校保健体育科

小・中・高等学校の連携を重視した保健授業の在り方

－「喫煙」を共通教材としたモデルプランの構築－ 72

I 研究の趣旨	72
II 研究の概要	72
1 研究の進め方	72
2 共通単元の設定	72
3 単元設定の理由	72
4 小・中・高等学校保健講座の取組み	72
III 研究のまとめ	75
IV 今後の課題	75

2 高等学校家庭科

高等学校におけるテーブルコーディネートの指導の在り方 76

I 研究の趣旨	76
II 研究の概要	76
1 テーブルコーディネート及び高等学校における指導について	76
2 高等学校における授業実践	76
III 研究のまとめ	79
1 成果	79
2 課題	79
3 テーブルコーディネートの展開の可能性	79

小・中・高等学校の連携を重視した保健授業の在り方 —「喫煙」を共通教材としたモデルプランの構築—

指導主事 渡部 光毅

I 研究の趣旨

社会環境が大きく変化している中、若年層における性の逸脱行為や、それに伴う性感染症の増加、肥満や生活習慣病の蔓延、喫煙・飲酒・薬物乱用等に見られる非行の低年齢化など、現代の子どもたちは様々な健康被害の危険にさらされている。これらの問題に対処するため各校種における保健の授業では、広い視野から健康や社会問題に迫り、児童生徒を主体とした授業へ転換を目指す意識や指導法の改善が求められるようになってきている。

また、喫煙や飲酒、薬物乱用防止、性に関する分野など、小・中・高等学校の全ての校種で取り上げられている単元では同じ内容の繰り返しになる傾向もあり、児童生徒が主体的に学ぶ姿勢を引き出せないという問題点も生じている。そこで、一人の子どもが小学校、中学校、高等学校というそれぞれの発達段階において、各校種の連携を重視した保健の授業づくりを目指し、本主題を設定した。

II 研究の概要

1 研究の進め方

研究を進めるにあたっては、本年度より開設した専門研修「小・中・高等学校保健講座」における、各校種の連携を重視した保健の授業づくりの過程を基本とした。

2 共通単元の設定

本年度は、3つの校種に共通する単元の中から「喫煙」教育を取り上げ、一人の子どもが小学校、中学校、高等学校というそれぞれの発達段階において「喫煙」について学ぶという状況を想定し、小・中・高等学校の連携を重視した保健の授業を構想した。

3 単元設定の理由

(1) 喫煙は健康に重大な影響を及ぼす問題として、社会的に関心が高い事象である。

(2) 児童生徒の興味・関心が高い内容である。

(3) 小・中・高等学校の全ての校種で取り上げられている単元であることから、連携を重視した指導内容を考察することが可能である。

4 小・中・高等学校保健講座の取組み

(1) 「喫煙教育」の課題

小・中・高等学校の各校種で行われている「喫煙教育」の授業を、比較、検討することにより以下のような課題が明らかになった。

① 保健の授業で扱うロールプレイングや実験内容の類似

② 喫煙による健康被害についての指導内容の重複

③ 発達段階に応じた系統的な学習内容、指導法の見直し

(2) 連携を図るポイントの重点化

(1)の課題を改善し、校種間の連携を重視した保健の授業を行うため、以下の3つのポイントを重点事項とした。

① 保健の授業で押さえるべき喫煙教育の基礎・基本の明確化

② 各校種における学習の重複を避け、指導内容を重点化

③ 児童生徒の発達段階に応じた指導内容、指導方法の工夫

①の「各校種における喫煙教育の基礎・基本の明確化」については、学習指導要領に示されている「喫煙」に関する内容の比較により、各校種で教えるべき「喫煙教育」の基礎・基本を明らかにした。

学習指導要領では、小学校が(3)「病気の予防」ウ生活行動がかかわっておこる病気の予防

中学校では、(4)健康な生活と疾病の予防 ウ 喫煙、飲酒、薬物乱用と健康

高等学校では、(1)現代社会と健康 イ 健康の保持増進と疾病の予防の中に示されており、校種別

に以下のようにまとめられる。

【小学校】

- ・ 喫煙による急性や、長期的な影響
- ・ 受動喫煙による周囲への影響
- ・ 低学年からの喫煙の影響
- ・ 喫煙に関する法律の理解

【中学校】

- ・ たばこに含まれる有害物質の理解と依存性
- ・ 有害物質が身体に及ぼす急性影響
- ・ たばこの常習化による影響
- ・ 未成年者の喫煙が引き起こす、具体的な身体への影響

【高等学校】

- ・ 疾病と喫煙との関連性
- ・ 周囲の人々への影響
- ・ 胎児への影響
- ・ 社会に及ぼす影響
- ・ 自分を大切にする気持ちの低下
- ・ 周囲の行動やマスメディアの影響
- ・ 有害物質の薬理作用

これらの内容を授業で取り上げながら、さらに学習指導要領に示されている以下の内容を確実に指導することが、各校種で押さえるべき基礎・基本であると考えられる。

【小学校】

- ・ 喫煙が健康を損なう原因となることの理解

【中学校】

- ・ 喫煙が及ぼす体への影響
- ・ 生徒個人の好奇心や過度のストレスなどの心理状態、人間関係から生じる断りにくい心理、宣伝、広告などの社会環境に惑わされない適切な対処能力の育成

【高等学校】

- ・ 自分が適切な生活行動を選択し、改善していくための意志決定と行動選択

さらに、校種間の連携の視点として示した②番目の「重複を避ける」こと、③番目の「発達段階に応じた指導方法の工夫」として、主に「実験」を取り

入れた保健の授業を校種別に構想した。

(3) 授業の実際

① 小学校の授業案

－テーマ－

「たばこが健康に及ぼす影響を知り、喫煙をしないという意識を高める授業」

－学習過程－

学 習 活 動・内 容	時 配	○教師の指導・支援
1 アンケートの結果から、本時の課題をつかむ。 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;"> どうして子どもはたばこを吸ってはいけないのだろう。 </div>	5	○ アンケートの集計結果を提示し、授業の興味・関心を高めさせる。 ○ 未成年者の喫煙を禁止しているパッケージを提示して本時のめあてにつなぐ、主体的に課題解決に取り組ませる。
2 たばこが、体にどのような影響があるか視覚的に理解する。 (1) 煙で紙が変色する実験 ・ 煙を紙に吹き付けると色が変わることを知る。 (2) ミミズでの実験 ・ 煙によりミミズの血管が収縮する様子をビデオで知る。 (3) 実験を見ての感想を話し合う。	20	○ 事前に行った実験のサンプルを提示し、変色させた物質が、喫煙により体内に取り込まれることを理解させる。 ○ ミミズの実験では、体内に取り込まれた有害物質が、身体に悪影響を及ぼすことを視覚的に理解させる。
3 資料を見て話し合う。 ・ 受動喫煙の害 ・ 発病率や死亡率	12	○ 喫煙開始年齢と肺ガン死亡率比から、児童期にたばこを吸うと肺ガンで死ぬ確率が高くなることを強調する。
4 本時の学習のまとめをする。 ・ 分かったこと ・ 今後の生活で気を付けたいこと	8	○ アンケートの結果で、「興味がある」吸ってみたい」と答えた児童に本時の感想を発表させる。

児童のたばこに対する知識や興味・関心などの実態を把握するために、アンケート調査を行い、学習過程に示した主に2つの「実験」を取り入れた授業を考えた。

「たばこの煙で紙が変色する様子」がわかるサンプルと、「たばこの煙でミミズの血管が収縮する様子」を写したVTR、さらには受動喫煙の害、喫煙とがんの発病率の関係を示した資料等から、喫煙が健康を損なう原因となることを視覚的に理解させ、

なぜ子どもがたばこを吸ってはいけないかを考えさせることで、喫煙をしないという強い意志につなげていく。

②中学校の授業案

－テーマ－

「たばこの煙に含まれる有害物質が人体に与える影響を理解する授業」

－学習過程－

学習活動・内容	時配	○教師の指導・支援
1 小学校で学習したことの発表	5	○ 既習内容を確実に把握する。
2 たばこの肺への影響を考える。 [実験1] たばこ人形の映像から有害物質の成分を視覚でとらえる。	10	○ 既習内容を踏まえた上で本時の説明をする。 ○ たばこ人形用、実験のVTRを活用し、たばこを吸った肺と、吸わない肺の違いに注目させる。
3 たばこの煙が人体に与える影響について考える。 [実験2] 金魚を三角フラスコに入れ、たばこの煙をフラスコに入れると金魚はどんな反応を示すかを考える。 (1) 予想を立てる。 (2) 実験結果の根拠を考える。 (3) 金魚が人間であったとしたらどのようなのかを考える。 (4) 煙に含まれる有害物質について考える。	25	○ VTRの映像から、たばこの煙によって金魚がどのように変化するか考えさせる。 ○ 予想を簡単に発表させた後に、たばこの煙で金魚が苦しむ映像を見せ、なぜこのような結果になったかを考えさせる。 ○ たばこに含まれている有害成分は人間にも大きな影響を与えることを強調し、有害物質の正体に迫る。
4 たばこに含まれる有害成分の名称と、それらが人体に与える影響について確認する。	10	○ ニコチン、タール、一酸化炭素が人に与える害について説明する。
5 本時のまとめをする。 ・ ワークシートに感想を書く。		○ 本時のまとめをし、次時の予告をする。 (誘いを断るロールプレイング)

小学校の既習内容を確認した上で、効果のあった「実験」を取り入れ、たばこの煙に含まれるニコチンやタール、一酸化炭素等の有害物質の名称や、それらが人体に与える影響について、発達段階に応じた理解を深める授業を考えた。

「たばこ人形」を使った実験では、喫煙をすることで肺に影響が及ぶこと、また、「金魚の実験」からは、有害物質の影響を予想・検証していく学習を通して、たばこの煙に含まれる有害物質が人体に与える影響について考えさせる。

また、「心理状態、人間関係、社会環境に惑わされない適切な対処能力」を育成する必要性から、次の時間にはロールプレイングを授業に取り入れ、誘いに対する断り方のスキルを学ぶ。

③高校の授業案

－テーマ－

「たばこの害を知り、社会の喫煙に対する動きを理解しながら、現在あるいは将来の自分はどのようにすべきか、適切な意志決定や行動選択ができる授業」

－学習過程－

学習活動・内容	時配	○教師の指導・支援
1 有害物質と健康への影響、および受動喫煙について確認する。	7	○ 小・中学校で学んだ知識を具体的に引き出し、たばこが喫煙者本人だけでなく、周囲の人々にも影響を与えることを確認させる。
2 本時の目標 社会での喫煙(禁煙)に対する動きを察しながら、現在・将来の自分はどうか適切な意志決定・行動選択ができる。	3	○ 自己の現状を把握させ、現在あるいは将来の自分がどのようにすべきかを考えさせる。
3 たばこのパッケージから、記載されている文章が変更になった理由を考える。	5	○ なぜこのような表記に変化したのかを考えさせ、以前よりさらに健康に対する考え方が強まったことに気付かせる。
4 身近な生活の中で、タバコが吸えなくなっている所を考える。	5	○ 身近な生活の中にも急速に禁煙化が進んでいることから、今後、どう変化していくか予想させる。
5 日本を含む先進諸国の喫煙者数の変化を予想する。	5	○ 他の先進国では喫煙者が減少傾向にあることに注目し、喫煙に対する社会の変化に目を向けさせる。
6 あなたならどうする? 本時で知った内容をまとめ、自分は今後どうすべきか、それぞれの立場で考えをまとめる。	25	○ 喫煙者・非喫煙者のどちらを選択するかは、本人の自由意志である。しかし、周囲の人々も含めたたばこが人体に及ぼす影響は大きく、幸せな生活を脅かす可能性もある。そのため、適切な意志決定と行動選択が必要であることを強く伝える。

小・中学校での既習内容を生かし、授業に必要な知識を具体的に引き出した上で、自分が適切な生活行動を選択し、改善していくための意志決定と行動選択を重視する授業を考えた。

たばこのパッケージに記載されている文章が、例えば「喫煙は、あなたにとって肺気腫を悪化させる危険性を高めます。」など、警告的な内容に変更されたことを取り上げ、喫煙が健康に及ぼす影響についての関心が、以前にも増して高まっていることに気付かせる。さらに、校地内全面禁煙化や先進諸国の喫煙状況等の資料から、「身近な場所の禁煙化」や「喫煙に対する社会の動き」にも目を向けさせ、「現在あるいは将来の自分は、どのようにすべきか」を具体的に考えさせる。

有害物質の説明や身体への影響、受動喫煙の害について、当初は説明や実験を予定していたが、小・中学校の復習・確認という形で効率よく授業を進めたことで、高校生にとって重要な「意志決定・行動選択」に費やす時間を十分に確保することが可能になった。

(4) 研修者の感想

【小学校】

- ・ 小・中・高等学校で喫煙をテーマに指導内容を検討できたことは大変意義深い。
- ・ 小・中学校で同じことを教えていた事に気が付いた。
- ・ 中学校との連携を図る必要性を感じた。

【中学校】

- ・ 小・中・高で情報交換したことで、指導内容の見通しをもつことができた。
- ・ 小学校や高校の学習指導要領の内容を比較したことで、それぞれの学校で指導すべきポイントの違いが明確になった。

【高等学校】

- ・ 小・中学校の教科書の充実が驚いた。
- ・ 小学校や中学校の段階で、喫煙について予想以上に多くのことを学んでいることを知った。
- ・ 高校の「喫煙」の授業では、小・中で学んだことを踏まえ、何を重点的に指導しなくてはならないのかを考えることができた。

III 研究のまとめ

保健講座における校種別の授業づくりの取組みや

実際に授業づくりを担当した研修者の感想から、各校種、各学校で保健の授業を行う際の留意点、あるいは押さえるべきポイントが示された。

- 自分の校種の基礎・基本から、指導の重点を明らかにする。(他の校種の学習指導要領解説、教科書等の有効活用)
 - 児童生徒の既習内容を正確に把握した上で、指導内容を検討する。(事前アンケート等の実施)
 - 既習内容を復習し、知識の確認を図ることは大切であるが、同じ内容の重複指導をできるだけ避ける。
 - 小・中・高等学校の発達段階に応じた指導方法を取り入れ、児童生徒の主体性を引き出す。
- 以上の4つについて、「喫煙教育」をはじめとする小・中・高等学校に共通する単元を扱う場合には、確実に押さえた上で授業を行う必要がある。

IV 今後の課題

本年度は、3つの校種に共通する単元の中から「喫煙教育」を取り上げ、一人の子どもが小学校、中学校、高等学校というそれぞれの発達段階において「喫煙」について学ぶという視点に立ち、「喫煙」を共通教材としたモデルプランの構築をした。

今後は、作成した授業案をもとに各学校で授業実践を行い、さらに指導内容の改善を図っていく。また、保健講座では各校種に共通する単元を計画的に取り上げ、モデルプランとなる授業案のバリエーションを増やしていきたいと考える。

<参考・引用文献等>

- 1) 小学校学習指導要領解説—体育編—
(文部省 1999年)
- 2) 中学校学習指導要領解説—保健体育編—
(文部科学省 2004年5月一部補訂)
- 3) 高等学校学習指導要領解説—保健体育編—
—体育編—
(文部科学省 2004年5月一部補訂)
- 4) 体育科教育「保健科教育の確かな舵取りを」
(大修館書店 2005年4月～9月号に連載)

高等学校におけるテーブルコーディネート指導の在り方

指導主事 黒川佳子

I 研究の趣旨

現行高等学校学習指導要領により高等学校専門教科「家庭」、科目「フードデザイン」に「テーブルコーディネート」が新設された。これは「食の文化的な意味を踏まえて精神的な満足を得るための食事」という視点を重視し、作ることから食べるところまでを総合的にとらえて計画・実践できる能力と実践的な態度を育てることをねらいとする（高等学校学習指導要領解説一家庭編一）ことによる。しかし、これまで家庭科では「栄養・食品・調理」を「食」に関する指導の中心としてきたため、「テーブルコーディネート」の指導については研究や実践事例がなく未知の内容である。

そこで、食事の文化的・精神的な意義についての思考や理解を深め、食事を総合的にデザインする能力と態度の育成を目標とした「テーブルコーディネート」の指導方法について研究を行うこととした。

II 研究の概要

1 テーブルコーディネート及び高等学校における指導について

(1) テーブルコーディネートの意味と現状

「テーブルコーディネート」とは日本で作られた用語で、一般的には食事の目的に合わせたテーブルクロス・食器・花などの食卓上の演出及びインテリア・照明・音楽などの食事をする空間の演出を指す。テーブルコーディネートという言葉を用いる場合、料理を含める場合と含めない場合が見られるが、本研究では「料理も含めた食事の場の演出」という意味で用いる。テーブルコーディネートの作品例は、ホテル、レストラン、百貨店・専門店の食器売り場などで見る事ができる。しかし、これらの作品はその性質上、料理が伴わなかったり、一般家庭・学校での実現が難しい高価な食器などを用いた凝った演出であったりすることが多い。このことからテーブルコーディネートは「テーブルクロスを敷いたり、

ナプキン・食器などを並べたりすることである」という誤解が起きたり、現実の生活からかい離れた印象を持ったりすることが少なくない。

(2) 「フードデザイン」におけるテーブルコーディネートの位置づけ

「フードデザイン」の目標は、「栄養、食品、献立、調理、テーブルコーディネートなどに関する知識と技術を習得させ、食事を総合的にデザインする能力と態度を育てる」とされ、テーブルコーディネートはフードデザインを構成する5本柱のひとつである。テーブルコーディネートは前述したように料理（学校では調理）を含めた食事をする場の演出である。高等学校における調理の指導は、栄養、食品、献立などを関連付けて行うものであるため、テーブルコーディネート自体が食事を総合的にデザインするというフードデザインの目標と重なるものと言える。（図1）

本研究ではテーブルコーディネートを「食事の総合デザイン」ととらえ研究を進めることとした。

(3) 「食育」への寄与

平成17年7月に施行された食育基本法の前文においては、「食」を大切にする心の欠如や伝統ある食文化の喪失が問題とされ、「『食』に関する考え方を育て」、「豊かな食文化の継承及び発展」が期待されるなど、「栄養」や「食の安全」だけでなく、「食」の文化的・精神的な役割についても言及が見られる。ここでも「食」に関する総合力が求められており、テーブルコーディネートは国民的課題である「食育」に寄与できると考えられる。

(4) 高等学校における指導の現状

県内県立高校のうちフードデザインを履修させている20校に対しテーブルコーディネートの指導状況について聞き取り調査を行ったところグラフ1、2

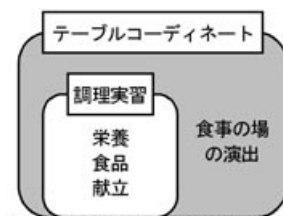
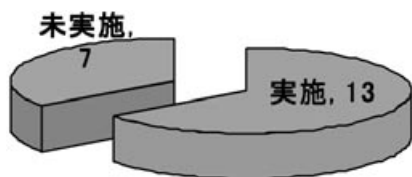


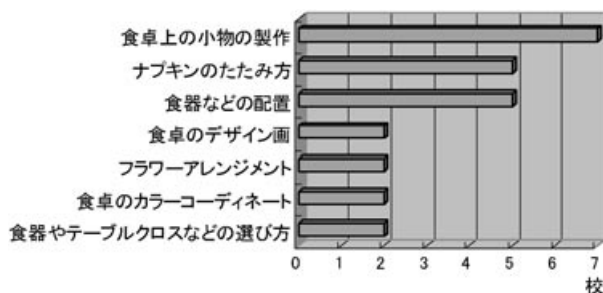
図1「食事の総合デザイン」としてのテーブルコーディネート概念図

のような回答結果が得られた。

グラフ1 テーブルコーディネートを指導していますか
(20校中)



グラフ2 どのような内容を指導していますか
(複数回答 13校中)



指導していると回答した13校のうち5校が、グラフ2に示される指導内容いずれかを調理実習と組み合わせると回答している。しかし、小物の製作やナプキンのたたみ方など断片的な指導が中心であることが分かる。

(5) 高等学校における指導の考え方

以上述べたように、テーブルコーディネートは食事に関する総合デザイン力を育成することができ、食育にも寄与できるが、業界と学校の現状がかけ離れ、学校での指導が断片的であることが明らかになった。そこで、食卓構成・食卓作法・調理実習・テーブルコーディネート・会食など、「食事を作るところから食べるところまで」を組み合わせた現実的な題材を構成し指導を行う必要があると考えた。総合デザイン力を育成するためには、総合的な題材による指導が必要であるという考え方による。

2 高等学校における授業実践

上に述べた指導の考え方をもとに、研究協力校で授業実践を行った。

研究協力校 福島県立東白川農商高等学校鮫川分校
実施学年等 2 学年フードデザイン選択者12名
実施期間 平成17年11月～平成18年3月

(1) 題材構成と授業の実際

① 題材1「クリスマスの食卓」

ア 題材1の実際（2時間×6回）

生徒になじみ深い行事食から指導を始めるのが良いのではないかという考えから、まず、西洋料理をテーマとした「クリスマスの食卓」という題材で指導を行った（表1）。3～5名のグループ学習とし、ナプキンたたむ（1, 2時間目）、テーブルコーディネートをした食卓で食卓作法の体験をする（3, 4時間目）など、体験的な学習を中心とし、段階をふみながら指導を進めた。献立と調理法について指導した後（5, 6時間目）、クリスマスにふさわしい食卓をまず生徒一人一人がデザインし、その後食器などを実際に配置しながらグループとしてのデザインを決定して行った（7, 8時間目）。それらを総合する実習として、9, 10時間目には、調理実習をし、テーブルコーディネートした食卓での会食を行った。

表1「クリスマスの食卓」の実際（12時間）

	内容	ねらい
1・2	テーブルコーディネートの基礎知識、作品鑑賞、ナプキンのたたみ方	テーブルコーディネートへの関心と意欲の喚起
3・4	テーブルコーディネート体験、西洋料理の食卓作法	西洋料理の食卓構成の理解、食卓作法の習得
5・6	クリスマスの食卓1～献立と調理法～ (ビーフシチュー、シーザーサラダ、ブッシュドノエル)	西洋料理の献立と調理法の理解
7・8	クリスマスの食卓2～食卓のデザイン～	食事のテーマにあった食空間についての思考と表現
9・10	クリスマスの食卓3～調理実習・テーブルコーディネート・会食～	調理技術の習得、食卓のデザインと表現、食卓作法の実践、総合的に食事を考える態度の育成
11・12	西洋料理の献立・テーブルコーディネートのまとめ	西洋料理の献立と食卓構成・テーブルコーディネートについての理解の深化



「クリスマスの食卓」実習の様子（9・10時間目）

イ 題材1の成果と課題

題材全体を通して、生徒の関心は高く意欲を持って学習を進める姿が見られた。題材1開始前と終了後に行った「食事の準備をするときに考えることは何ですか」という質問に対する記述式の回答を分析したところ、題材開始前に比べ終了後には食事に対する意識の広がりが見られ、特に「心」に関する記述が増加した(表3)。しかし、表3に示す通り、これまで指導してきたはずの栄養に関する記述が見られず、食事の総合デザイン力という観点からは課題である。

② 題材2「ひなまつりの食卓」

ア 題材2の実際(2時間×4回, 1時間×2回)

題材2は日本料理をテーマとした。指導の順序は表2の通りほぼ題材1と同様であるが、日本の食の伝統と、題材1の反省から日本料理の栄養的な特徴について盛り込みながら指導を進めた。(表2)

イ 題材2の成果と課題

題材2では、7時間目、ひなまつりの食卓のデザインを行う段階で大きな課題が生じた。生徒一人一



「クリスマスの食卓」実習の様子(9・10時間目)

人が食卓をデザインし、それを相互評価しながらグループとしての食卓のデザインを決定する時点で、特に題材1で取組みが良かったグループの一部生徒に意欲の低下が見られた。ワークシートなどの分析から、生徒それぞれが表現したいことがあったのに、グループ活動では十分に表現できなかったためと考えられる。このグループは5名編成で他のグループより人数が多い。他グループでは意欲の低下は見みられなかったことから、グループの人数が多すぎたこと、題材1によって「食卓をデザインする力」を身に付けてきていたことに対応した指導内容でなかったことが意欲の低下につながったと考察できる。生徒の実態にあった表現の場を確保していく重要性を実感した。

題材2終了後の食事に関する意識は、題材1終了

表3 食事を準備する時考えること(12人中)

	題材1開始前	題材1終了後	題材2終了後
栄養			●●
味覚	●●●●●●●	●●●●●	●●●●●●●
視覚		●	●●●●●●●●
配膳		●●●	
量	●●	●	
効率	●●	●	●●●
嗜好	●	●	●
心	●	●●●●●●●	●
衛生			●●●

※「食事の準備をする時どのようなことを考えますか」という質問に対し、例えば「味や見た目を考え、食器を正しく配置し、楽しい食事となるよう考える」という回答の場合、「味覚、視覚、配膳、心」と捉えそれぞれ1ポイント(●)とする。ここでいう「心」とは「精神的な満足」について言及していることを指す。

表2「ひなまつりの食卓」の実際(10時間)

	内容	ねらい
1・2	日本料理の食卓構成、日本の行事と食事	日本料理の食卓構成と日本の食文化への理解
3・4	ひなまつりの食卓1 ～献立と調理法～ (ちらしずし、はまぐりのうしお汁、桜餅)	日本料理の献立と調理法の理解
5	日本料理の献立と配膳・食卓作法	日本料理の献立と配膳の理解、食卓作法の習得
6・7	日本料理の特徴、ひな祭りの食卓2 ～食卓のデザイン～	日本料理の食材と栄養的特徴の理解、食事テーマにあった食空間についての思考と表現
8・9	ひなまつりの食卓3 ～調理実習・テーブルコーディネート・会食～	調理技術の習得、食卓のデザインと表現、食卓作法の実践、総合的に食事を考える態度の育成
10	テーブルコーディネートのまとめ、食事の意義についてのまとめ	テーブルコーディネートと食事の意義についての理解・思考の深化

後に比べ「栄養、衛生」などの面で広がったが、一方「心」についての記述は減少した（表3）。生徒の学習状況の観察及びワークシートからはこの原因を明らかにすることができなかった。

③ 題材3「日常食」（3時間）

題材2で一部生徒に意欲の低下が見られたため、それぞれの考えを表現できるよう少人数にグループを編成し直し、題材3「日常食」を実施した。事前の準備、実習を含めて3時間しか確保できなかったため詳しいデータを得ることができなかったが、「クリスマス」のようなクラス共通のテーマを設定せず実習を実施したので、それぞれのグループで季節を表現するなど工夫が見られた。献立は「和風きのこスパゲッティ、クラムチャウダー、野菜サラダ、果物」である。



「日常食」実習の様子

(2) 授業実践を終えて

研究協力員（指導者）は、前述の3つの題材による実践について以下のように反省を述べている。

- ① 生徒にとって難しいと感じられたテーブルコーディネートが、実際の生活で実践できるものだと生徒が実感を持つようになった。
- ② 生徒に分かりやすい行事をテーマとして学習を始めたことは、生徒にとって取り組みやすかった。
- ③ テーブルコーディネートに対して、今までの学習に対する取組みに比べ積極的な姿勢が見られた。自分自身で考えたり、表現したりする中で試行錯誤する姿が見られ、思考力・表現力の育成に役立つ。
- ④ 「食」に関する指導の新しい視点であり、指導

者自身が食生活に関する指導に様々な可能性を見ることができ、今後の展開が広がった。

- ⑤ 総合的な題材構成による指導は、食生活の指導法として有効である。
- ⑥ より実践的な能力と態度の育成には、年間を通じた指導が必要である。
- ⑦ テーブルクロスなどの用具の確保が課題である。

Ⅲ 研究のまとめ

本研究全体としては次のような成果と課題が得られた。

1 成果

- (1) 題材構成による現実的なテーブルコーディネートの指導の在り方の研究と検証ができた。
- (2) 総合的な題材構成による指導で、食事を総合的にデザインする意識の育成が可能であることが検証できた。
- (3) 生徒の意欲を喚起できる指導内容で、思考力・表現力の育成にも役立つことが分かった。

2 課題

- (1) 食事を総合的にデザインする実践的な能力と態度の育成には長期的な計画が必要である。
- (2) 用具の確保や活用法については検討が必要である。

3 テーブルコーディネートの展開の可能性

食事に関する総合デザインとしてのテーブルコーディネートの考え方は、小学校、中学校、高等学校普通教科での食生活の指導や学校給食の指導において、栄養や調理という今までの視点とは異なる視点から児童・生徒にアプローチできるという点で有効である。豊かな食生活とは何かを生徒自身が考え、実践していく力を育成する指導法として活用できるのではないかと考える。今後さらに活用しやすい指導法の研究を進めていきたい。

<参考・引用文献>

高等学校学習指導要領解説—家庭編—

（文部科学省 平成12年3月 平成17年1月一部補訂）

◎長期研究員の研究

1	中・高等学校英語	
	英語リスニング意欲を高める英語リスニング指導の工夫	
	－Authenticな教材と予測を生かした活動の観点から－	82
2	情報教育	
	学校を変える学校情報化からのアプローチ	
	－一人一人が関わることができるスクログ（学校用CMS）の活用を通して－	84
3	小学校生徒指導	
	心の通った「あいさつ」「言葉づかい」の定着を図る工夫	
	－学校全体での取り組みから－	86
4	中学校理科	
	生徒の原子・分子概念の形成を目指した理科指導法の工夫	88
5	小学校音楽科	
	基礎・基本を身に付けながら、進んで歌唱活動に取り組むことができる授業の工夫	90
6	小学校学級活動	
	集団の連帯意識と望ましい人間関係を育てる学級活動(1)の在り方	92
7	中学校英語	
	コミュニケーション能力の育成を目指した英語指導の工夫	
	－互いのよさを認め合うコミュニケーション活動を通して－	94

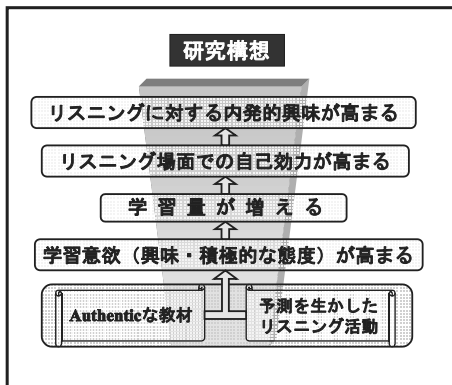
英語リスニング意欲を高める英語リスニング指導の工夫 —Authenticな教材と予測を生かした活動の観点から—

長期研究員 菊地 一彦

I 研究の趣旨

英語教育を取り巻く環境を概観すると、1980年代の英語指導助手導入に続き、平成10年の学習指導要領の改正では、国際化の進展に対応して、中学校で外国語科が必修教科になり、外国語による実践的コミュニケーション能力の育成が一層重視された。しかしながら、依然として英語を聞きとれない、話せない生徒が多いのが現状である。それらの問題の原因として、「リスニング意欲」、「教材の質」、「リスニング指導法」の3点が考えられる。

本研究では、上記3点を改善するため、学習者にAuthenticな英語（英語圏の実際場面において、英語を母国語として話す人の英語）を提供できる外国映画を教材とし、予測を生かすという具体的な活動を取り入れることで、中学生・高校生のリスニング意欲の向上を図った。



II 研究の概要

1 研究仮説

- 仮説1 学習者はリスニングに対する興味を高めるであろう。
- 仮説2 学習者はリスニング場面において、不安が少ない積極的な態度を促進できるであろう。
- 仮説3 学習者は学習量を増加させ、リスニング場面における自己効力を高めるであろう。

2 研究計画

- (1) 対象者 中学校3年生 161名
高等学校3年生 97名
- (2) 条件の設定
- リスニング力に応じた群分け（中高共通）
上位群・中位群・下位群
 - 学習スタイルに応じた群分け（中学生のみ）
視覚優位群・聴覚優位群・運動覚優位群・それらの複合型群
- (3) 教材の選定及び提示

事前アンケートを行い、中高生に共通して興味が高かった映画を7本選んだ。その中から、既

タイトル	時間	言語の使用場面	言語の働き
スパイダーマン	14秒	a 御礼とそれに対して	c 礼を言う
ハリポッター賢者の石	22	b 動物園で	c 礼を言う
ターミネーター	6	a 月日を探す	b 質問する
タイタニック	32	a 遺囑時の捜索	b 質問する b 約束する
ハリポッター賢者の石	39	b 駅の構内で	b 質問する c 応答する

習事項を中心として、実践的コミュニケーション能力を高めるのに重要な表現が含まれている21の場面をリスニング教材として選んだ。提示の際には、言語の使用場面と言語の働きを明確にするとともに、学習者の負担を考慮し、1場面あたりの提示時間を短くしたり、部分聞き取りの形式を取り入れたりするなどの工夫をした。

13 「ターミネーター」から：サラコーナーという女性に会うために、警察署にやってきたターミネーターと警察官との会話です。サラコーナーの友達と言うが、世の中の人と会うことができない。ターミネーターは、「来た場所」と言って、立ち去ります。

ターミネーター：(1) (2) (3) (4) Sarah Connor.
I was told that she's here. Could I see her, please?
Police: No. You can't see her. She's making a statement.
ターミネーター：(5) (6) (7) ?
Police: Look, it may take a while. If you wanna wait, there's a bench over there.
ターミネーター：(8) (9) (10))

*この場面を見たことがあるかどうか。(ある、ない)
*自分の予測はどの程度だったか。
(A: 予測通り, B: はほぼ予測通り, C: 予測と大分違う, D: 予測と全く違う, E: 予測できなかった)
*今回のチャレンジの感想

(4) 研究方法

- ① Authenticなリスニング教材に対する興味
- ② リスニングに対する一般的興味

- ③ リスニングに対する積極的な態度及び不安
- ④ リスニング場面での自己効力
- ⑤ リスニング力テスト
- ⑥ 自主学習用リスニング教材の活用状況

①～④は質問紙で回答を点数化し、⑤はリスニングテストを実施し、それぞれ事前・事後で比較した。⑥は全指導終了後、活用希望者の把握と家庭での自発的学習の実施状況からとらえた。

3 リスニング指導の実際

リスニングノートを使用しながら学級単位で行い、英語の授業時間内の最初の10分間～15分間にWarm-upとして設定した。説明や指示は、学習者の学習スタイルに十分配慮して行うとともに、学習者の表情やつぶやきを適切に取り上げるよう配慮した。段階ごとに以下に示す。

1	場面を知る	<ul style="list-style-type: none"> * 言語の使用場面及び言語の働きを含めた全体的な場面の説明をすることで、物事を全体的にとらえることを得意とする学習者や、聴覚情報からとらえることを得意とする学習者に対して、場面をとらえやすくする。 * 音声なしの映像を提示し、時系列で場面を説明することで、物事を順序立ててとらえることを得意とする学習者や、視覚情報からとらえることを得意とする学習者に対して、場面をとらえやすくする。
2	予測する	<ul style="list-style-type: none"> * 聞き取る表現を個人で予測させる。「はずれてもよい」ことが大原則で、文章予測が困難な場合は、キーワード予測を認め、全ての学習者の予測を活性化させる。 * 個人の予測を、仲間との話し合い、全体中での発表を通して、修正・発展させながら再構築させる。
3	聞く	<ul style="list-style-type: none"> * 予測を生かしながら、「聞く」「見る」「書く」活動を通して、集中して聞き取らせる。 * リスニングに集中させるために、縦りに自信がない場合は、カタカナでの書き取りを認める。 * 数回視聴後、聞き取った内容を仲間と確認させ、教材への関与を深めさせる。 * さらに視聴させ、聞き取った内容を決定させる。自信がない場合は、ヒントカードを利用させ、答えを選ぶようにする。ヒントカードの利用は生徒の意志による。 * 解説用紙を配付し、チェックをさせる。適用可能な予測表現はきちんと認める。「知っている」と便利な情報を解説用紙に加え、リスニングの基礎知識(音の変化、強勢、イントネーション等)に触れさせる。
4	まねる	<ul style="list-style-type: none"> * 「正確に言うことのできる英語は、聞き取ることができる」の視点から、発話の練習をきちんと行わせる。 * 役者になったつもりで、聞き取った表現を、口や体を使って実際に発音させる。このことで、場面に適した表現を心がけさせる。 * 「声の大きさのものさし」を作成し、自然に音量調節ができるようにするとともに、場面に適した声の大きさに気付かせる。
5	確認して聞く	<ul style="list-style-type: none"> * 確認しながら視聴させ、リスニングの基礎知識をもとに、「聞き取れる」という自信を高めるとともにリスニング意欲を向上させる。 * 感想を記入させ、感想内容をもとに個人に迅速にフィードバックする。また、感想集として配布する。

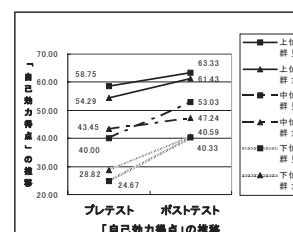
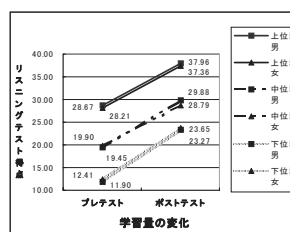
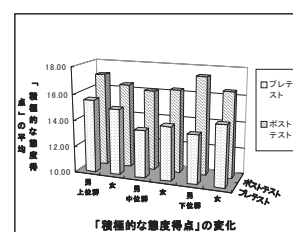
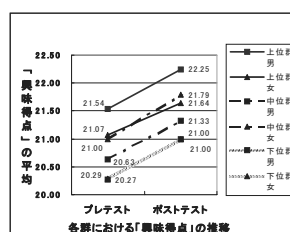
III 研究のまとめ

1 成果

中学生、高校生のどちらにおいても、リスニング力の差に関係なく以下のような結果が得られた。また、中学生における、学習スタイルに応じた群分けでも、同様の結果が得られた。これらのことから、研究仮説は立証されたとと言える。

- ① Authenticな教材に対する興味の向上
- ② リスニングに対する一般的興味の向上
- ③ リスニングに対する積極的な態度の促進とリスニングに対する不安の軽減
- ④ リスニング場面での自己効力の向上
- ⑤ リスニング力の向上
- ⑥ 自主学習用リスニング教材の活用

リスニング教材を希望し、自発的にリスニングを行った生徒は、中学生で156名、高校生で32名だった。中学生の結果の一部を下図に示す。



2 課題

本研究では、外国映画のリスニングを通して、リスニングの基礎知識に触れてきたが、授業の中に、音声指導を系統的に位置付けて継続した指導を行うことで、生徒のリスニング意欲がどのように変化するかは、今後の検討課題である。また、聞き取る語数を拡大したり、新出事項の紹介として位置付けたりするなど、リスニング場面を拡大した場合の効果の検討も必要であると思われる。

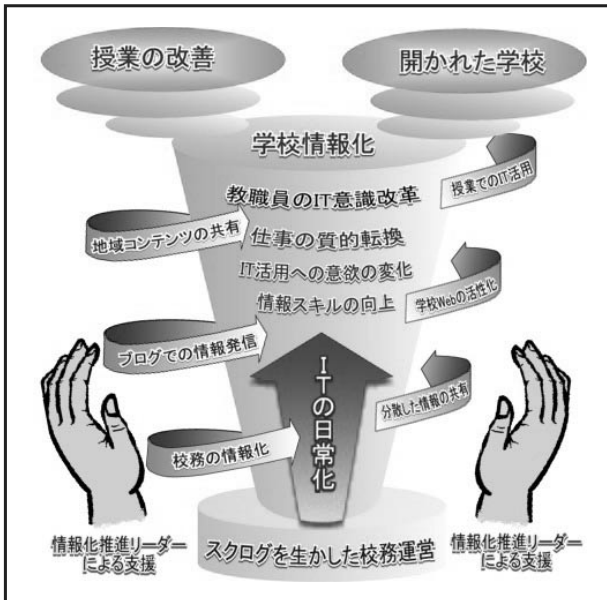
学校を変える学校情報化からのアプローチ

— 一人一人が関わることができるスクログ（学校用CMS）の活用を通して —

長期研究員 角田 雅仁

I 研究の趣旨

学校におけるITの活用は、情報教育の推進、分ける授業の展開、開かれた学校運営の推進等、その教育的な効果が期待されている。しかし、ITを活用する教師としない教師の二極化や学校のホームページの日常的な更新の困難さ等、情報教育には多くの課題がある。そこで、本研究では学校の情報化を切り口として学校の教育活動を改善するために、以下の研究構想に示す見通しをもち、主題に迫った。



※CMSとは、コンテンツ・マネジメント・システムのこと。Web上でデータの管理、運営をメール感覚で容易にできる。スクログは学校での利用を考慮したCMSで、学習、Web作成、情報共有に活用できるシステム。

II 研究の概要

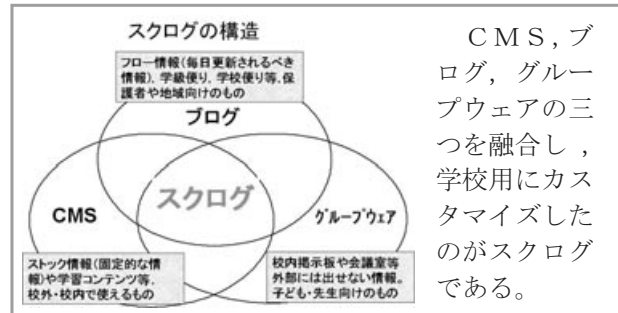
1 研究内容

- (1) スクログの開発と運用についての理論
- (2) 学校情報化を推進する担当者の在り方
- (3) スクログの教育的効果

2 研究対象校 郡山市内の小・中学校3校

3 研究の実際

(1) スクログの開発と運用についての理論



CMS、ブログ、グループウェアの三つを融合し、学校用にカスタマイズしたのがスクログである。

(2) 学校情報化を推進する担当者の在り方

学校全体への働きかけとして、情報教育について全職員で共通理解が図られるよう、情報教育の全体計画と指導計画を整備した。更に、教職員に対して、ITの日常化と活用が図られるよう校内研修会を実施し、「e-活用News」によるIT活用情報を継続的に提供した。また、授業改善に向け、教職員のIT活用への不安と悩みの解消に取り組んだ。

(3) 学校でのスクログの活用（協力校との共同研究）

① 学校情報化への取り組み

学校の実態とニーズを踏まえ、以下のようなスクログの構築を行った。

- ・ ブログによる学校Web環境づくり
- ・ 校務文書共有システムの構築
- ・ 学習支援システムの構築

② 学校Web活性化への取り組み

普及率の高い携帯電話からもアクセスしてもらえよう、家庭にQRコードを配付してアクセス拡大の工夫を図った。また、メールマガジンを配信し、伝えたい情報が確実に伝わるように工夫した。

③ 授業改善への取り組み

IT活用に不安をもつ教員に対しては、授業構想の相談、機器の準備、授業中の活用を支援し、授業改善の一助とした。また、学習支援システムを構築し、授業で利用したい教育コンテンツの登録や活用が容易にできるようにし、学習環境の改善を図った。

【学習支援システムの入力画面】

4 スクログの教育的効果

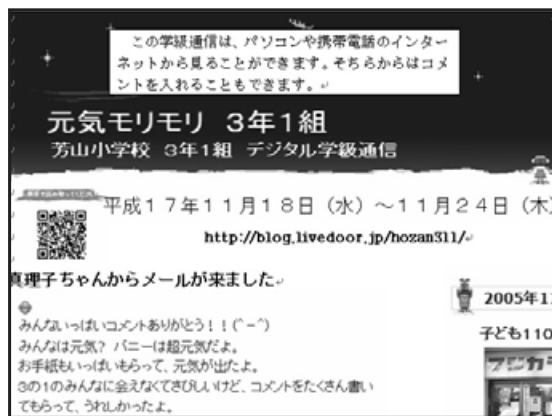
① 学校情報化への効果

ア 学校にブログを導入したことで、教職員のIT活用が促進されたので、IT活用のスキルが向上してきた。IT活用への苦手意識がなくなり、主体的にスキルを獲得する姿も見られた。

イ 7割以上の教職員が学校Webに関わったため、更新するページが増え、Webが活性化した。

ウ ブログの導入により、Web上での情報発信にとどまらず、学級通信や学級掲示物としての利用、週案等の反省材料としての活用等、多方面の校務に役立った。

【記事を印刷し家庭へ配布】



② 学校Web活性化への効果

ア 普及している携帯電話にも対応したことで、全家庭の約7割が学校Webにアクセスしている。

イ 携帯電話からのアクセスとリピーターが増加した。また、学級Webへのコメントにより学校と子どもと保護者との交流が生まれた。

ウ 更新の頻度が高くなり、保護者の約7割が「学校の姿が見える。」と感じていることが分かった。

エ 学校Webを参考にして、転入校を選択する保護

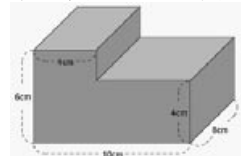
者や、他県から学校行事に参加する方も現れた。

③ 授業改善への効果

IT活用に不安を持つ教員が、スクログを活用しながらITを授業に取り入れていった。

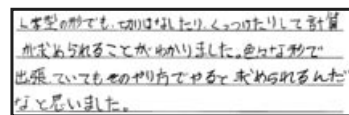
ア コミュニケーションのツールとして活用した例

- ・ 国語でのグループ発表、練り上げの後、ブログで「人に優しい街づくり」について情報交換を行い、友達や市民など他者と関わる力を高めることができた。



イ シミュレーションを個に応じた指導に活用した例

- ・ シミュレーションによる立体図形の分割提示が、児童の自力解決のヒントとなった。



Ⅲ 成果と今後の課題

(1) 成果

① スクログとIT活用への支援が、教職員のIT活用の意欲とスキルの向上につながった。

② ブログは一人一人が関わられるため、学校Webが活性化できた。また、双方向的なWebが保護者の学校理解を深化させる一助となった。

③ 授業に密接に関わるコンテンツとITコーディネーターの支援が、ITの特性を生かした授業の展開を助けた。

(2) 課題

① Webの更新時にチェック方法を工夫した。ブログの特性を考慮した情報の発信・受信を行うには、モラル意識の更なる高揚が不可欠である。

② トラックバック、コメントスパムなどへの日常的な対策をとる必要がある。

③ ITを活用した実践モデルが学校でまだ十分整っているとは言えない。モデルはITの活用範囲を広げて活用を推進することから、モデルの蓄積と利用拡大に努めたい。

心の通った「あいさつ」「言葉づかい」の定着を図る工夫

— 学校全体での取り組みから —

長期研究員 遠藤正幸

I 研究の趣旨

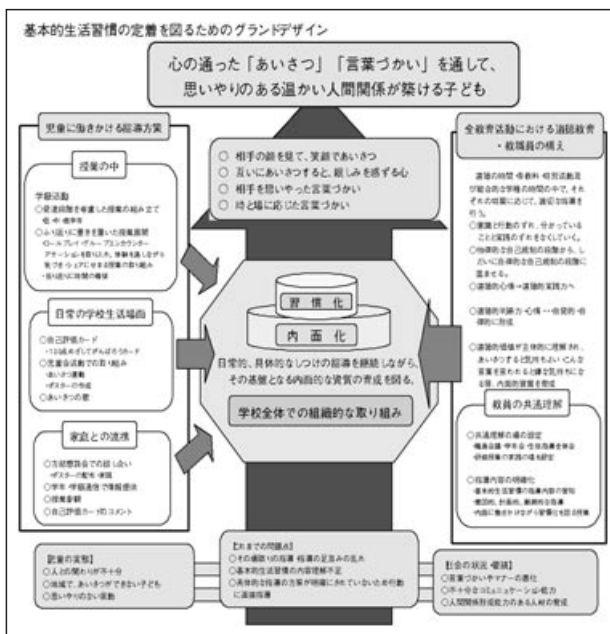
現任校の児童の実態として、「あいさつ」「言葉づかい」等、基本的な生活習慣が十分に身に付いていない状況が見られる。この基本的な生活習慣については、どの学校でも常に重視されており、その育成に様々な努力がなされてきている。しかし、実際の指導の場面では、行動面に対する注意等「教え」の部分が多く、内面に働きかける等「育む」部分が少なかった。そのため、必ずしもその効果が上がっているとは言いがたい。そこで、全校的な指導体制のもと、授業や学校生活の様々な場面、そして、家庭や地域との連携を通して、心の通った「あいさつ」「言葉づかい」について、児童の内面に働きかけながら習慣化を図るための指導の方策を探っていくこととした。

II 研究の概要

1 研究内容

(1) 研究の見通し

児童の基本的な生活習慣の定着を図るための全体構想を下図に示す。



2 研究の実際

(1) 教職員同士が共通理解を図るための手立て

① 共通理解の場の設定

- 生徒指導に関する情報交換や反省の機会の定例化（職員会議・学年会・週番会等）
- 「あいさつ」「言葉づかい」についての研修授業及び研究協議

② 共通理解を図る内容の明確化

ア 基本的な生活習慣の指導内容の習知

小学校における基本的な生活習慣の指導内容について通理解を図る。（参考資料・文部省・1985）

イ 意図的・計画的・継続的な指導

ウ 内面に働きかけ、習慣化を図る授業づくり

(2) 授業の中での手立て

① 発達段階を考慮した授業の組み立て

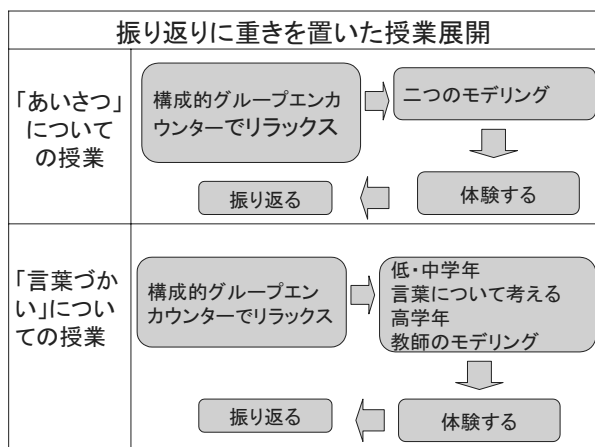
内面に働きかける授業を行うにあたり、下図に示したように、児童の発達段階を考慮した学級活動の授業を組み立てた。

	低学年	中学年	高学年
あいさつ	指導内容	学級活動 (2)-(イ)	学級活動 (2)-(イ)
	題材名	あいさつラリー	最高にうれしい「おはよう」
	発達段階に応じた指導内容	いろいろなあいさつ言葉	あいさつの心地よさ + ジェスチャー
言葉づかい	指導内容	学級活動 (2)-(ウ)	学級活動 (2)-(ウ)
	題材名	ふわふわ言葉とチクタク言葉	いやな言葉とうれしい言葉
	発達段階に応じた指導内容	言葉の持つ力	言葉による心の痛みの感じ方

② 振り返りに重きを置いた授業展開

心の通った「あいさつ」「言葉づかい」について内面化を図るために、児童に、教師が行うモデリングを見せたり、ロールプレイをさせたりしながら、今までの自分を振り返らせるような授業を展開した。また、全ての学年で授業の終末に「振り返り」の時間を設けた。この時間を使って、児童自身がこれま

での自分の思いと、授業を受けての気持ちを比べ、その変化を感じ取ることができるようにした。以下に2つの授業についての流れを示す。



(3) 日常の学校生活場面における手立て

① 「100点目指してがんばろう」カードの実施

児童が毎日、心の通った「あいさつ」や相手を思いやる「言葉づかい」を意識して生活できるように、自己評価カードを使用した。

② 児童会活動での取組み

朝の「あいさつ運動」やあいさつに関する「ポスターの作成・横断幕の掲示」を行った。

③ あいさつの歌について

6年生から「あいさつ」についての詩を募集し、その詩から曲を作り、学校独自のオリジナル曲を作成して、毎日の朝の会で歌うようにした。

(4) 家庭との連携を図るための手立て

① 方部懇談会における話し合い

担当職員が方部懇談会に出向き、心の通った「あいさつ」「言葉づかい」の指導についての趣旨説明を行い、協力をお願いした。さらに、全家庭に「あいさつ推進ポスター」を配布して実践を呼びかけた。

② 学校の取組みを保護者に伝える

学級・学年通信・ホームページ等で、心の通った「あいさつ」「言葉づかい」の指導について、学校での取組みを紹介した。

③ 授業参観

「言葉づかい」について考える授業を、保護者を交えて行った。また、学校での取組みの様子や児童の様子を保護者に伝え、家庭での現在の取組みをさらに深めてもらうための場とした。

Ⅲ 研究のまとめ

1 成果

(1) 学校全体の取組みについて

指導方針・内容を明確にすることで、全職員で共通理解が図られ、一貫した取組みができた。

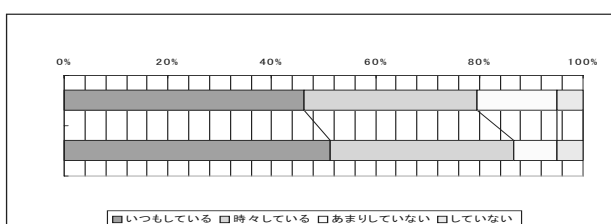
(2) 「あいさつ」「言葉づかい」の定着について

内面化を図る「あいさつ」「言葉づかい」の授業を全学級で行ったことは、下記の児童の感想に見られるように、その必要性を児童が自覚するようになり、行動へと結び付くきっかけになった。また、保護者のしつけに対する意識が大幅に向上してきた。

- ・ 自分からあいさつできなかったけど、どんどん自分からあいさつできるようになった。
- ・ 今まで悪口を言ってたけれど、言われた友達の気持ちがよく2分かった。

(3) 温かい人間関係について

意識調査の結果、笑顔で「あいさつ」ができる児童が増加している。また、「言葉づかい」についても、相手の気持ちを考えて、傷つけるような言葉を言わないようにする姿が見られるようになった。



2 課題

(1) 長期的視野に立った取組みについて

今後も長期的な見通しをもって、学校全体での組織的な取組みを継続・維持していく必要がある。

(2) 授業について

道徳の時間においても、児童の内面に働きかけるような授業を学校全体で実践することで、より一層学級内の温かな人間関係の確立に努めていく必要がある。

(3) 地域との関わり

今後は、あいさつを通して、学校関係者(児童も含む)と地域住民相互が顔見知りとなり、不審者等による犯罪の抑制へつなげていくような、地域を巻き込んだ取組みまで発展させていく必要があると考える。

生徒の原子・分子概念の形成を目指した理科指導法の工夫

長期研究員 佐藤 広行

I 研究の趣旨

化学的な現象の理解に、原子・分子概念は欠かせないが、その概念形成に重要な単元である「化学変化と原子・分子」は、生徒の苦手意識が強い単元であるとされている。自分自身の実践を振り返っても、実験には自発的に取り組む生徒が、原子・分子概念の学習になると興味を失ってしまうのが常であった。その原因として、生徒にとって目に見えない原子・分子はイメージしにくく、目に見える化学現象との関連付けが困難なことが挙げられる。

これらを解決するためには、化学現象と原子・分子の考えとの関連を深める場面を設定し、生徒が原子・分子の概念を徐々に形成できるように単元の構成を工夫することが必要と考える。さらに、生徒にとって現実感もてるような原子・分子モデルの工夫が必要であると考える、本研究に取り組んだ。

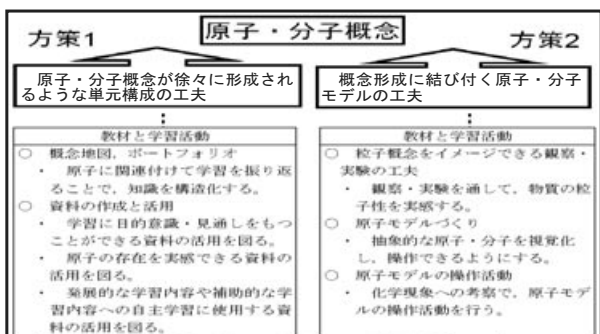
II 研究の概要

1 研究仮説

「化学変化と原子・分子」の指導において次の方策をとれば、生徒に原子・分子の概念を形成させることができるであろう。

- 原子・分子概念が徐々に形成されるような単元構成の工夫（方策1）
- 概念形成に結び付く原子・分子モデルの工夫（方策2）

仮説に迫る具体的な手立ては、下図のとおりである。



2 研究計画

- 研究対象 中学校2年生 1学級
- 単元名 「化学変化と原子・分子」26時間

3 研究の実際

(1) 方策1について

生徒の原子・分子の概念形成の過程に沿うように単元構成を工夫する。そのために単元全体に、意図的・計画的に概念形成の場面を設定するとともに、概念形成に結びつくような資料の提示により、生徒の原子・分子概念を徐々に形成できるようにした。(下表)

単元の流れと学習内容	方策の活用場面		教材
	方策1	方策2	
1 単元の学習の前に…2時間 単元の学習へ目的意識と見通しを持つ。 ・オリエンテーション・既習内容の復習 ・化学史 原子の存在を実感する。 ・物質の粒子性	○	○	・概念地図 ・ポートフォリオ ・資料「単元の導入時に使用する資料」【資料1】 ・資料「単元の学習の系統図」【資料2】 ・資料「原子発見の歴史」【資料3】 ・実験「水とエタノールの混合」 ・資料「電子顕微鏡写真」【資料4】
2 原子と分子…3時間 原子・分子をモデル、記号で表す。 ・ドルトンの原子説・アボガドロの分子説 ・原子記号・化学式 原子と関連付けて学習を振り返る。	○	○	・原子モデルづくり ・原子モデルの操作活動 ・資料「周期表」【資料7】 ・資料「原子・分子の運動」【資料8】 ・概念地図
3 物質はじまで分解できるか…5時間 ・蔗糖とホウ酸の分解・水の電気分解 分解を原子のモデルを用いて考察する。		○	・原子モデルの操作活動
4 物質どうしが結びつく変化…4時間 反応を原子のモデルを用いて考察する。 ・水の合成・鉄と硫酸の化合・燃焼 原子と関連付けて学習を振り返る。		○	・原子モデルの操作活動 ・概念地図
5 化学変化と質量の保存…5時間 化学変化に関する質量の変化を原子のモデルを用いて考察する。 ・質量保存の法則・化学変化に関する質量の割合		○	・原子モデルの操作活動
6 化学変化を記号で表そう…5時間 化学変化を化学反応式で表す。 ・化学反応式 ・資料「化学反応式を作成する課題に取り組み資料に使用した資料」【資料4】	○	○	
7 単元のまとめ…4時間 化学現象を原子・分子の考えで説明する。 ・二酸化炭素や水申でのマグネシウムの燃焼 単元終了後の学習への意欲付けをする。 原子と関連付けて学習を振り返る。 単元テスト 準備	○	○	・原子モデルの操作活動 ・資料「単元の学習を振り返る資料」【資料5】 ・概念地図

- ① 概念地図を用いて、単元の節目ごとに合計4回、「原子」に関連付けて学習を振り返る場面を設定した。そして、学習内容と生徒の概念形成の関連付けを図った単元構成により、生徒の原子・分子概念の形成に結び付くようにした。検証に当たっては、次の視点で生徒の作成した概念地図の分析を行った。
 - ア 生徒が、どのようにして原子・分子について説明することができたかの語句数
 - イ 語句と語句の関連を説明した内容
 - ウ 生徒が作成した概念地図の形態による分類
- ② 原子・分子概念の形成に結び付く資料を作成し、

単元の指導計画に沿って活用した。資料は、次に示す3つの目的により作成した。

ア 生徒に、学習への目的意識と見通しをもたせるための資料

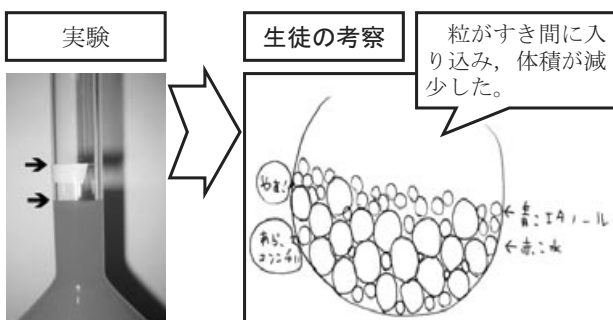
イ 原子・分子の存在を実感させるための資料

ウ 自主学習のための参考資料

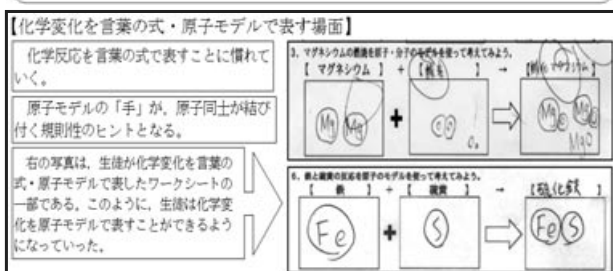
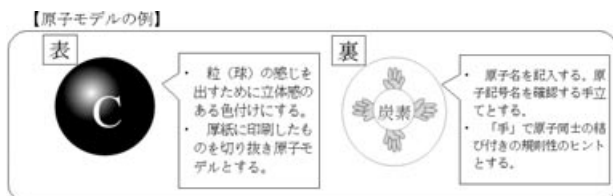
(1) 方策2 について

原子・分子とモデルの関連付けを図るために、原子・分子モデルの提示に先立って、物質の粒子性を実感できる観察・実験を行い、原子・分子の存在に現実感をもたせてから、原子・分子モデルを提示するようにした。

- ① 水とエタノールの混合による体積変化と、ゴマと豆の混合による体積変化の共通性を意識させることで、原子・分子と粒子の大きさに着目させた。



- ② 化学反応式の作成において、原子・分子モデルを活用させることにより、抽象的な原子・分子を視覚化するとともに、操作活動によって学習ができるようにした。また、作成した原子・分子モデルを各自が持つことにより、生徒が必要なときにいつでも使用できるようにした。これにより、生徒に化学変化を原子・分子モデルと関連付けて考えさせることで、原子・分子概念の形成に結びつくようにした。



III 研究のまとめ

1 研究の成果

(1) 方策1 について

単元の節目ごとに、原子・分子に関連付けて学習を振り返る場面で概念地図を作成させた。生徒の概念地図の分析から、記入した語句数が増加しただけでなく、語句と原子・分子の関連付けができるようになった。また、概念地図の形が単純なものから構造化されたものへと変容していった。特に、資料の活用や粒子性をイメージできる実験は効果的であった。また、方策2の原子・分子モデルの操作活動も生徒の概念形成を助けた。概念地図を作成させることにより、生徒の原子・分子概念の形成に役立たせることができた。

(2) 方策2 について

原子の存在に現実感をもたせてから、考察場面で原子モデルの操作活動に繰り返し取り組んだことにより、生徒は原子・分子概念と化学現象とを結びつけていくことができた。その結果、生徒は提示された化学現象を原子・分子モデルに当てはめて説明することができた。このことから、原子・分子モデルを単元を通して活用することは、生徒が微視的な見方・考え方で思考する上で役立つことが分かった。

2 研究の課題

- (1) 教材の開発や課題の設定において、生徒の理解を深めるために、補充・発展的な学習内容の取り扱いについて研究していく必要がある。
- (2) 単元を構成するに当たっては、化学領域の学習について関連を考慮したのだが、これを、他の領域にも広げることで、より有効な単元構成の改善へと役立てたい。
- (3) 他の単元についても、モデルによる生徒の学びの姿を明らかにし、より有効なモデルの提示の在り方と活用方法について改善を図っていきたい。

<参考・引用文献>

- 1) 『小中学校教育課程実施調査状況調査』
(国立教育政策研究所教育課程研究センター 2002, 2004年)
- 2) 『キーワードから探るこれからの理科教育』
(日本理科教育学会 東洋館出版社, 1998年)

基礎・基本を身に付けながら、進んで歌唱活動に取り組むことができる授業の工夫

長期研究員 佐藤 三和子

I 研究の趣旨

児童が進んで音楽に関わり、音楽活動の喜びを味わい、生涯に渡って音楽に親しむようにするためには、子ども一人一人が主体的に音楽活動を進めていく仕方を学び、成就感や満足感を得たり、新たな活動意欲を高めたりするような、学習指導を展開していくことが大切であると考える。

一般的に、小学校高学年では歌唱活動に対する積極性が失われる場合が多く、これまでの指導を振り返ると、授業や全校合唱などで生き生きと歌う姿を引き出すことは難しかった。

そこで、本研究では歌唱表現を楽しむための「音楽活動の基礎的な能力」を培いながら、歌うことに自信をもち、進んで表現活動に取り組む児童の育成を目指した授業の工夫をしていくこととした。

II 研究の概要

1 研究仮説

歌唱の基礎・基本を押さえて、児童一人一人に合った学習課題をもたせ、学び合うことのできる授業の展開を工夫すれば、児童は歌うことに自信をもち、進んで歌唱活動に取り組むであろう。

2 仮説に迫るための手立て

(1) 歌唱における基礎・基本を身に付けるための課題のめあての工夫

- ① 自分の声の特徴に気付かせ、どんなふうに歌えるようになりたいかを考えさせる。
- ② 問題を解決するための方法を提示し、時間ごとのめあてをもたせる。

(2) 学び合うことのできる授業展開の工夫

- ① 曲に対するイメージをもたせ、歌う意識を高める。
- ② 自分や友だちの声を聴き合うようにさせ、教師や友だちと話し合いながら練習を進めさせる。

3 研究の実際

(1) 検証授業計画

- 対象学年 小学校第5学年 3学級
- 題材名 豊かな表現
- 教材名 「ハロー・シャイニングブルー」
「星の世界」

(2) 検証授業の実際

<手立て(1)－①>

歌唱表現に対する意識を高めるために、自分の声の特徴に気付かせる機会を工夫した。そのために、録音した声を聴く・自分の声を自分で聴く・友だち同士で聴き合うといった方法で、自分たちの声を聴かせた。そして、自分の歌声の好きなところや嫌いなところを確認したり、歌声の問題点を友だちと共有したりすることで、個々の歌唱についての目標をもたせた。

<友だちに聴いてもらう様子>



<腹式呼吸の練習の様子>

<手立て(1)－②>

個々の目標を達成するためには、表現技術が必要であることを知らせ、その基礎的な能力を身に付けさせるための活動として、歌う時の正しい姿勢や呼吸法の練習、リラックスするための体操などを取り入れた。その際、それらの練習と歌唱についての課題解決との結び付きを説明し、基礎練習を毎時間の導入に取り入れた。また、一単位時間ごとの具体的な目標をもたせる際には、基礎練習と関連した具体的な視点(資料1)を与え、その時間に達成可能なめあてを設定できるようにした。

資料1

〈めあてづくりの視点〉

- 姿勢 … 大きな声を出せるように良い姿勢で歌う。
- 呼吸 … 高い声を余裕をもって歌うために呼吸に気を付ける。
- 音程 … 一つ一つの音をていねいに。
- 声 … かすれないように、やさしい声で。

〈手立て(2)－①〉

曲のイメージをふくらませるために、①歌詞だけを見ながら聴き、言葉のイメージをつかむ、②教科書の楽譜を見ながら聴き、音符の動きや挿絵と曲の関わりを感じ取る、③大事にしたい言葉やどんなイメージで歌いたいと思ったかを教科書や学習カードに書き込む、といったステップで曲と出会わせた。

曲の仕上げの段階では、児童それぞれが初めにもった曲に対するイメージを出し合わせ、グループやパート、クラス全体で歌うための表現の工夫について話し合わせた。この活動によって、「自分たちの歌」という意識をもって歌えるようにした。

〈手立て(2)－②〉

グループやパートで練習するときは、自分の声だけでなく、友だちの声にも耳を傾けて歌うように言葉をかけ、「聴く」意識を高めた。その際、正しいリズムや旋律を意識させたり、音程や発声に不安のある児童を個別指導したりした。また、授業の終わりには、自分たちの歌声を録音したものを聴きながらその時間の反省をさせることで、1時間の変化を感じ取らせるようにした。教師に聴いてもらうだけでなく、自分自身で、友だち同士で聴き合って、よい歌声や反省点について気付きながら、学び合えるようにした。

Ⅲ 研究のまとめ

1 研究の成果

(1) 歌唱の基礎・基本を身に付けることについて

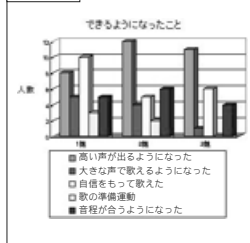
単元に関わる課題と時間単位の課題のもたせ方を工夫することによって、歌唱に対する意識が高まり、歌唱に必要な基礎・基本を身に付ける必要性を実感させることができた。そのことにより、児童は呼吸法の練習や歌い方の工夫などに進んで取り組み、基礎・基本を身に付けることができた。

(資料2)

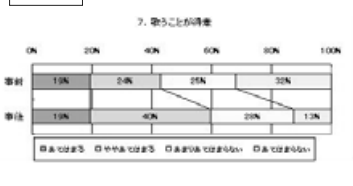
(2) 自信をもって歌うことができるようになることについて

自己課題の解決の積み重ねにより、児童に歌うことに自信をもたせることができた。事後のアンケートでは、歌うことを苦手と感じていた児童が減少しており、自信を持って歌うことができるようになってきている。(資料3)

資料2



資料3



2 研究の課題

(1) グループ活動のさせ方について

メロディのパート練習に支障を来すことがあったので、グループでの活動を有効に機能させるためには、その都度、カセットテープを活用するなど、児童の実態に対応させる必要がある。

(2) 基礎・基本の評価について

基礎・基本の定着について、個人ごとの定着度を確実に確かむことができなかった。今後は一単位時間の中に、簡単に評価できる方法を取り入れていく必要がある。

(3) 学年間の系統性

本研究を通して、各学年ごとに、歌唱に関する基礎・基本を確実に定着させることが必要だと実感した。そこで、下のような各学年の指導ポイントや学年間の系統性が分かる年間指導計画を活用し、歌唱の基礎・基本が段階を踏んで身に付けられるような指導をしていきたい。(資料4)

資料4

月	題材名	時数	教材名	表現…○ 鑑賞…◎ 歌唱…◇ 関連…△
4	歌と友たち	①	あの青い空のように	○お気に入りの歌や曲をかけっここの歌を歌ったり身体表現したりして楽しむ。
4		②	1学年の練習曲など	○強さや歌い方の工夫をしたり、楽器を加えたりして楽しく歌う。
4		③	かくれんぼ	○スキップのリズム
5		④	山びこっこ	○自分の声に耳を傾けて歌う。
5		⑤	♪キャンディマン	◎旋律の重なりや交差感のおもしろさを感じ取って歌ったり聴いたりする。

集団の連帯意識と望ましい人間関係を育てる学級活動(1)の在り方

長期研究員 太田 守彦

I 研究の趣旨

豊かな人生を送るためには、他者との望ましい人間関係の構築が最も重要であり、そのために必要な対人関係能力は、子ども時代から様々な人と関わることによって身に付けられなければならない。

この能力を育てるためには、特に児童期の集団活動において、他者と温かな関わりをもつことが重要である。そこで「望ましい集団活動」を基本原理とした特別活動(学級活動(1))に焦点を当て、「教師の支援における基本姿勢」を整理し、支持的風土づくりに努めるようにした。また、これを踏まえて各活動における「身に付けさせたい力とその手立て」を設定し、適切に支援することにより、児童一人一人の自己存在感・有用感の感得を図り、集団の連帯意識や望ましい人間関係の醸成を目指したいと考え、本主題を設定した。

II 研究の概要

1 研究計画

(1) 研究方法・内容

児童の実態に応じた活動内容の選定と、一つの議題における計画・実践・振り返りまでの一連の活動を通して、「支持的風土づくり」「自己存在感・有用感の感得」「集団の連帯意識の高揚」「他者と友好的に関わる力の育成」を図る学級活動の展開と、教師の支援の在り方を追究する。

(2) 研究対象および研究期間

- 研究対象 小学校4年生・6年生 各1学級
- 研究期間 9月～11月

2 研究の実際

(1) 実践を支える教師の支援の在り方について

学級集団に支持的な風土をつくり、児童が望ましい集団活動を展開できるようにするために、教師の指導における基本姿勢を「三つの柱」に整理し、それを常に心がけるようにした。

- 認める

児童の意図をしっかりと理解し、その中にある「よさ」を認め、「ズレ」があれば修正することにより、児童が前向きに考えられるようにする。

- 待つ・任せる

「成すことによって学ぶ」という特別活動の指導原理を踏まえ、児童による思考・判断・実践の機会を十分に与える。また、教師はその活動に対して可能な限り「待つ・任せる」という姿勢で支援する。

- 支える

児童の失敗や間違いを肯定的にとらえ、「失敗しても大丈夫」といった姿勢で支援する。

(2) 各活動における具体的な支援

前記の「三つの柱」を踏まえ、学級活動(1)の各活動における「身に付けさせたい力と、身に付けさせるための手立て」を次のように設定し、児童に対する支援内容の具体化を図った。

① 身に付けさせたい力

- 計画委員会

- A：互いの役割を理解し、協力して遂行する力
- B：活動全体を見通して運営する力

- 話し合い活動

- C：他者の考えを受け入れ、折り合いを付ける力
- D：目的意識をもち、前向きに考える力

- 係活動

- E：活動の目的を意識し、自主的に実践する力
- F：他の係に関心をもち、相互に高め合う力

- 集会活動

- G：積極的に協力・協同して運営する力
- H：全員の考えを生かして計画する力

② 身に付けさせるための手立て

- 計画委員会

- A'：役割分担の輪番制による経験の共有
- B'：「一議題コーディネート制」の導入

- 話し合い活動

- C'：全員の考えを生かすことを前提とした話し合い
- D'：学級目標やねらいが意識できる議題設定

- 係活動

E' : 「自分にできること」による係の組織化

F' : 児童相互の助言による活動の活性化

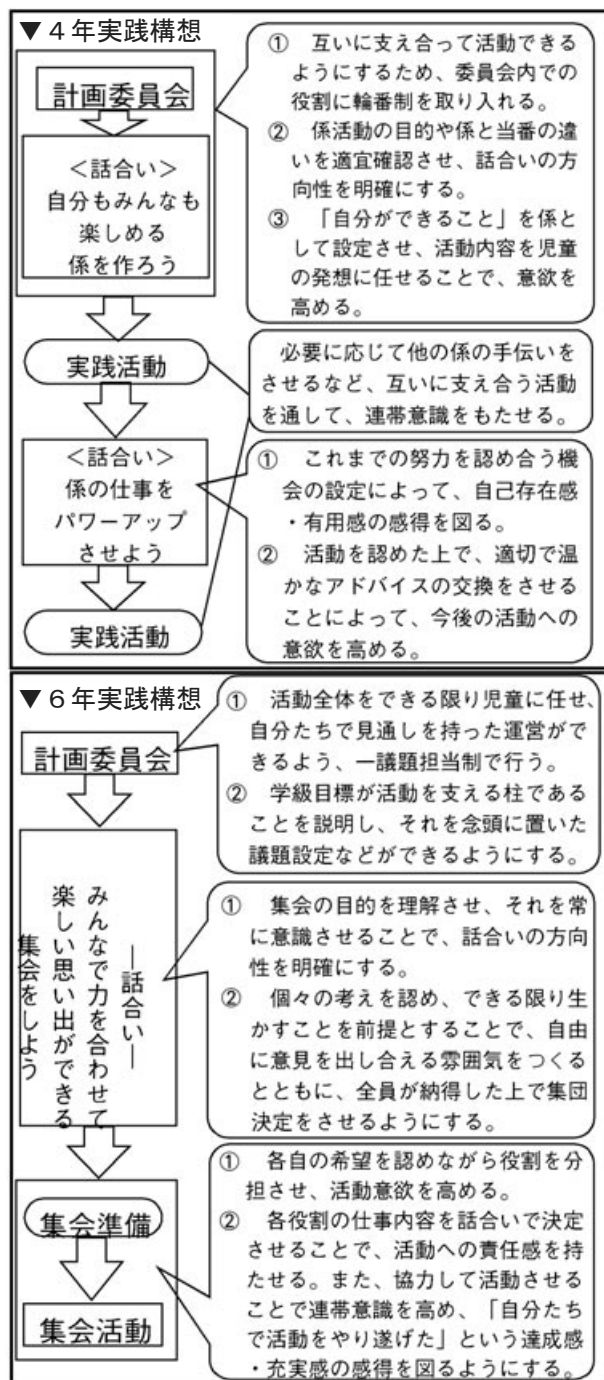
○ 集会活動

G' : 準備段階における「自分にできる役割」の選択による、活動意欲と責任感の高揚

H' : 全員が納得できる活動計画の立案

(3) 活動実践

実態調査をもとに、4年生では係活動を、6年生では集会活動をそれぞれ議題として設定し、下記の構想の中で前述した手立てを講じて実践を行った。



III 研究のまとめ

1 研究の成果

- (1) 教師が3つの基本姿勢を意識して支援したことにより、他者の考えを受け入れ、支え合う支持的風土が学級内につくられてきた。また、児童に自ら思考・判断・活動する意欲をもたせることができた。
- (2) 「身に付けさせたい力とその手立て」による具体的な支援をしたことで、児童の活動への意識や意欲を高めることができた。
- (3) 児童一人一人の希望を尊重した役割分担や、児童の発想を大切に活動させたことで、「自分の考えが生かされた・役に立った」という自己存在感や有用感の感得を図ることができた。
- (4) 活動の目的や目標を全員に理解させたことにより、目指す方向が一本化され、全員の力で一つのことを成し遂げようとする集団の連帯意識を高めることができた。

2 研究の課題

- (1) 今回の実践は児童の実態を考慮し、教師側から議題のヒントをもちかける形で行った。今後は、児童自らが学級生活の諸問題に気づき、議題として提案できるようにするために、様々な経験を通して、よりよい学級生活の実現を目指す「目と心」の育成を図っていきたい。
- (2) より望ましい支持的風土をつくるため、個々の児童の実態を詳細に把握し、指導における教師の基本姿勢の在り方を、さらに具体的なものにしていく必要がある。
- (3) 望ましい人間関係を築く力は、より多くの人の様々な関わりの中で、長い時間をかけて育つものである。したがって、全校的な共通理解・共通実践のもと、長期的な見通しを持って育成していく必要がある。

<参考・引用文献>

- 1) 小学校学習指導要領解説 特別活動編 (文部省 1999年)
- 2) 豊かな心を育てる「社会性育成」力
高階玲治編 (ぎょうせい 2005年)
- 3) [特別活動]実践チェックリスト
宮川八岐編 (教育開発研究所 2005年)
- 4) アドラー博士が教える「失敗に負けない子」に育てる本
星 一郎著 (青春出版社 2004年)

コミュニケーション能力の育成を目指した英語指導の工夫 —互いのよさを認め合うコミュニケーション活動を通して—

長期研究員 遠藤 こずえ

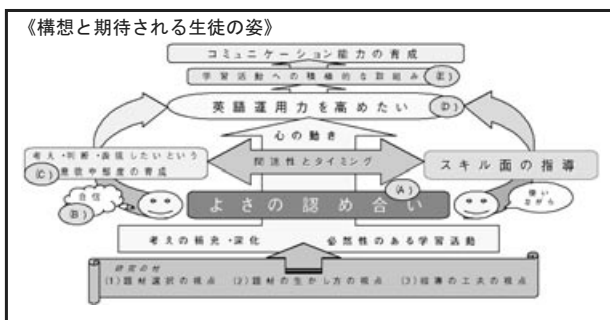
I 研究の趣旨

中学校英語教育の目標である「実践的コミュニケーション能力の基礎を養う」には、コミュニケーション活動を支える英語運用力が確かに身に付く授業の工夫を行うばかりでなく、生徒自らの考えを深めるようなコミュニケーション活動を授業に位置付けることが必要である。しかし、自分のこれまでの指導を振り返ると、基礎・基本の定着には重点を置いてきたものの、英語を言語として位置付けた、生徒が互いのよさを認め合うコミュニケーション活動や、積極的に伝え合いたいという気持ちの高まりのある学習活動の工夫は、十分でなかったように思う。

以上のことから、互いのよさを認め合うコミュニケーション活動を通じた英語指導の在り方を探っていきたく考えた。

II 研究の概要

1 構想



実践的コミュニケーション能力を育成していくには、従来から行われているスキル面の指導に加え、(1)生徒の興味関心を高める題材を選択し、(2)その題材の特性を生かし、考えの補充・深化を図り、(3)英語運用力を育てる指導の工夫を行うことが必要である。そして、図のように、スキル面の指導と表現への意欲や態度を育てる指導との関連を意図的に図りながら、生徒の「なるほど」といった心の動きを引き出し、英語学習へのさらなる意欲につなげていきたい。

(1) 題材を選択する際の視点

① fun, ② interesting, ③ controversial, ④ moving, ⑤ challenging, の5つの視点で題材を選択する。

(2) 題材の生かし方の視点

①題材を生徒自らの生活体験と結びつける, ②過去に学習したことと結び付け, スパイラルな学習を生み出す, ③答えに複数のオプションを持たせる, ④書籍やインターネット等からの付加情報で題材を深める, ⑤音楽や映像, 小道具などを加える, ⑥脚色・劇化することで学習効果を高める, の6つの視点で題材を生かす。

(3) 英語運用力を構築する際の指導の視点

①文字と音声の一体化を図る, ②段階的な音読指導を行う, ③日本語と英語の語順の違いに着目した語順指導を行う, ④間違いリストを何度も参照させる, ⑤アウトプットに焦点を置いたインプット指導を行う, ⑥様々なタイプのライティング活動を行う, 学習理論を取り入れたペア・グループ学習活動を行う, の8つの視点で, 英語運用力を構築する。

(4) 期待される生徒の姿

学習場面において生徒は、(A)互いのよさを認め合い、(B)自分の思いや考えを英語で伝える場面での自信が高まることによって、(C)自ら考え判断し、表現しようとする態度が高まり、(D)英語運用力を高めたいという願いが高まるだろう。それらの高まりから、(E)その後のスキルトレーニングや学習活動に積極的に取り組むだろう。

2 研究の実際

(1) 題材の選択と生かし方に関する教材分析

<視点4> 書籍やインターネットなどからの付加情報で題材を深める

- ① 天気図をダウンロードし、実際の天気を読み解く [NH 1, PP. 38-39]
- ② 留学旅行先の情報を調べ、英語でまとめる [NH 3, PP. 24-25] [TE 3, PP. 33-37]
- ③ 外国の人々の日常生活をのぞいてみる [NH 3, PP. 36-39] [NC 1, PP. 6-8]
- ④ 海外の同世代の子どもの学校生活の様子をのぞいてみる [NH 2, PP. 24-25] [AC 2, P. 6] [OW 1, PP. 36-43] [NC 1, PP. 50-52]
- ⑤ 水質調査や農業汚染、大気汚染、温暖化など地球環境について [NH 3, PP. 66-69] [OW 3, P. 18] [OW 3, PP. 22-26] [NC 1, PP. 40-41] [NC 3, PP. 36-38] [TE 1, PP. 100-103] [TE 2, PP. 74-78] [TE 3, PP. 65-69] [AC 1, PP. 52-54] [CO 2, PP. 80-85] [SE 3, PP. 64-68] [SE 3, PP. 72-76]
- ⑥ ボランティアに対する海外の同世代の子どもの取り組みを知る [Seven Summits] [TE 3, PP. 65-69]
- ⑦ 戦争・平和について [OW 2, PP. 78-82] [NC 2, PP. 70-73] [NC 3, PP. 16-19] [NC 3, PP. 56-58] [TE 3, PP. 76-80] [AC 2, PP. 36-38] [雑誌の記事など]
- ⑧ バリアフリー・人権について

既存の教科書について、(1), (2), (3)の視点をうけ、どのような活用が可能か分析し、整理した。(なお、教科書名は省略してある。)

(2) 授業実践

今回の授業実践では、構想にある視点から特にペア・グループ学習を取り入れ、生徒が互いのよさを認め合う活動を意図的に位置付けた授業を行った。

- 対象 中学校3年生 1クラス
- 題材 New Horizon Book 3

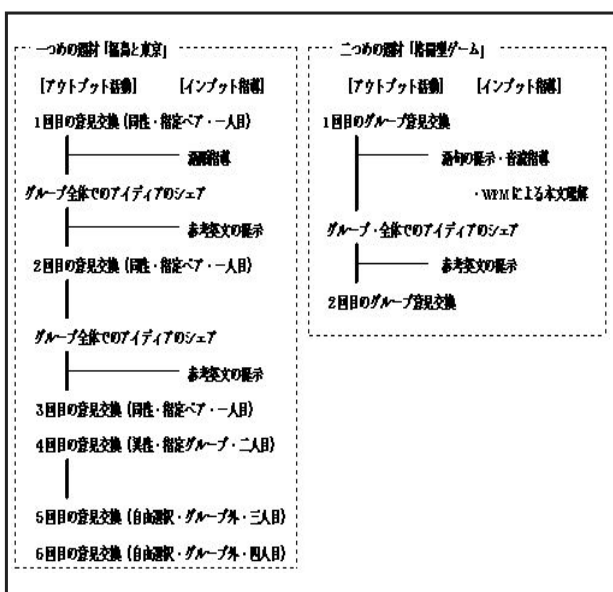
Unit 5 Reading for Communications

① 論争を引き起こすような題材を生徒自らの生活体験と結びつける (柱(1)③と柱(2)①)

本教材は、アカデミックな論争を仕組むことができ、生徒の生活体験と結びつけることによって生きる題材である。そのため、生徒にとって身近と思われる教材「福島と東京に住むのではどちらがよいか」を作成した。次に、教科書の英文を書き換えた「インターネットの掲示板に載った格闘型ゲームに関する意見」を2つめの学習の題材とした。

② 必然性のあるペア・グループ学習活動とスキル面の指導のタイミングの工夫 (柱(3)③⑤⑦⑧)

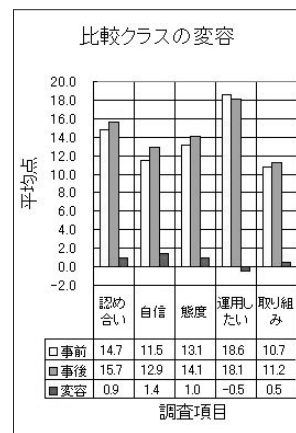
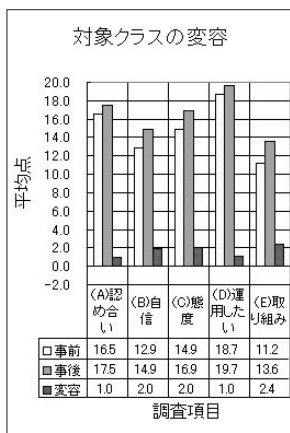
まず、語彙サイズテスト等の結果を踏まえ、ペアとグループ分けを行った。そして、一つめの題材では、ペア→グループ→全体→再びペアというサイクルの段階的体験的スピーキング活動を行い、二つめの題材では、個→グループというサイクルの段階的体験的ライティング活動を行った。



III 研究のまとめ

1 研究の成果

期待される生徒の姿から、(A)から(E)の5観点に基づく事前事後アンケート調査を行った。比較対象として、通常の展開により本単元を学習したクラスにも同様のアンケートを実施した。



両者を比較すると、対象学級の方が各項目とも伸びが大きく、各項目間での正の相関関係がみられた。特に、(B)(C)と(D)の相関関係が高いことから、「自分の思いや考えを英語で伝える場面での自信」をもたせ、「自ら考え判断表現しようとする意欲や態度」を育成することが、生徒の「英語運用力を高めたい」という願いへとつながると思われる。また、(A)(D)と(E)の相関関係が高いことから、「互いのよさを認め合うこと」と「英語運用力を高めたい」という願いの高まりが、「その後の学習活動への積極的な取り組み」へと結び付くと考えられる。

以上のことから、従来のスキル面の指導に加え、生徒が互いのよさを認め合うようなコミュニケーション活動や、生徒相互に積極的に伝え合いたいという気持ちの高まりのある学習活動を、英語の授業に位置付けることの重要性と有効性が、改めて明らかになったと思われる。

2 今後の課題

今回授業で生かし、取り上げたのは、三つ柱の視点のうちの一部である。長期的展望に立った検証を行い、いつ、どの段階でどのような手立てが有効であるかを明らかにする必要がある。そして、それらをもとに、3年間および各学年毎の到達目標を設定し、具体的な指導計画を作成していきたい。

平成17年度 研究協力校・研究協力員一覧

研究協力校

福島市立三河台小学校
福島市立矢野目小学校
伊達市立上保原小学校
郡山市立芳山小学校
須賀川市立仁井田小学校
田村市立上大越小学校
白河市立白河第五小学校
棚倉町立近津小学校
会津若松市立湊小学校
下郷町立旭田小学校
南会津町立檜沢小学校
相馬市立中村第二小学校
南相馬市立原町第一小学校
いわき市立平第五小学校
いわき市立上遠野小学校

福島市立岳陽中学校
伊達市立伊達中学校
郡山市立御館中学校
須賀川市立仁井田中学校
田村市立常葉中学校
白河市立五箇中学校
会津若松市立第六中学校
喜多方市立第二中学校
南会津町立田島中学校
相馬市立中村第一中学校
南相馬市立原町第一中学校
いわき市立平第一中学校
いわき市立湯本第一中学校

福島県立福島高等学校
福島県立福島北高等学校
福島県立安達東高等学校
福島県立郡山商業高等学校
福島県立光南高等学校
福島県立会津高等学校
福島県立喜多方工業高等学校
福島県立耶麻農業高等学校
福島県立小高工業高等学校
福島県立磐城高等学校
福島県立勿来工業高等学校
福島県立石川養護学校

福島市立瀬上小学校
伊達市立伊達小学校
本宮町立五百川小学校
郡山市立安子島小学校
須賀川市立稲田小学校
白河市立白河第二小学校
白河市立五箇小学校
会津若松市立謹教小学校
会津若松市立河東第一小学校
下郷町立楢原小学校
南会津町立荒海小学校
相馬市立大野小学校
南相馬市立石神第一小学校
いわき市立小名浜第一小学校
いわき市立高坂小学校

福島市立北信中学校
伊達市立桃陵中学校
須賀川市立第一中学校
須賀川市立西袋中学校
白河市立白河第二中学校
棚倉町立棚倉中学校
会津若松市立湊中学校
三島町立三島中学校
南会津町立檜沢中学校
相馬市立中村第二中学校
南相馬市立石神中学校
いわき市立平第三中学校
いわき市立上遠野中学校

福島県立本宮高等学校
福島県立福島明成高等学校
福島県立安積高等学校
福島県立須賀川高等学校
福島県立白河旭高等学校
福島県立若松商業高等学校
福島県立喜多方商業高等学校
福島県立原町高等学校
福島県立小高商業高等学校
福島県立湯本高等学校
福島県立いわき海星高等学校

福島市立湯野小学校
伊達市立東小学校
本宮町立岩根小学校
須賀川市立第一小学校
田村市立船引小学校
白河市立白河第三小学校
棚倉町立棚倉小学校
会津若松市立永和小学校
会津若松市立河東第三小学校
南会津町立田島小学校
相馬市立中村第一小学校
相馬市立磯部小学校
いわき市立平第一小学校
いわき市立植田小学校

福島市立西根中学校
二本松市立二本松第一中学校
須賀川市立稲田中学校
田村市立船引中学校
白河市立白河南部中学校
会津若松市立第三中学校
会津若松市立河東中学校
下郷町立下郷中学校
南会津町立荒海中学校
相馬市立磯部中学校
広野町立広野中学校
いわき市立小名浜第一中学校

福島県立福島商業高等学校
福島県立安達高等学校
福島県立安積黎明高等学校
福島県立清陵情報高等学校
福島県立塙工業高等学校
福島県立喜多方東高等学校
福島県立会津農林高等学校
福島県立双葉翔陽高等学校
福島県立新地高等学校
福島県立平工業高等学校
福島県立磐城農業高等学校

研究協力員

福島市立岡山小学校	校長	野崎 修司	福島市立岡山小学校	教諭	山本 巖
白沢村立和田小学校	校長	原瀬久美子	郡山市立芳山小学校	教諭	増子 春夫
郡山市立芳山小学校	教諭	渡邊三穂子	郡山市立芳山小学校	教諭	渡辺 洋之
郡山市立芳山小学校	教諭	成田 和邦	郡山市立芳山小学校	教諭	遠藤 隆宏
郡山市立芳山小学校	教諭	渡辺 友佳	郡山市立芳山小学校	教諭	渡邊 純子
郡山市立芳山小学校	教諭	武田 文子	郡山市立芳山小学校	講師	森合 耕一
西会津町立尾野本小学校	教諭	佐藤 千賀	郡山市立安子島小学校	教諭	添田 浩明
南会津町立田島小学校	教諭	梅宮 弘子	南会津町立田島小学校	教諭	児島 敦
南会津町立田島小学校	講師	湯田 吉保	相馬市立中村第二小学校	教諭	白木 次男
相馬市立中村第二小学校	教諭	加藤 京子	南相馬市立原町第一小学校	教諭	高橋澄子(代表)
伊達市立桃陵中学校	教諭	八巻 智子	二本松市立二本松第一中学校	教諭	矢内 由美
二本松市立二本松第一中学校	教諭	渡邊 邦裕	郡山市立郡山第一中学校	教諭	関根 宏房
郡山市立御館中学校	教諭	大橋 克全	郡山市立御館中学校	講師	山口久美子
須賀川市立西袋中学校	教諭	二瓶 裕一	会津若松市立一箕中学校	教諭	山口 智
広野町立広野中学校	教諭	猪狩 孝(代表)	三島町立三島中学校	講師	阿部 英俊
福島県立安達高等学校	教諭	千葉 優子	福島県立東白川農商高等学校・鮫川分校	教諭	緑川 祐子
福島県立湯本高等学校	教諭	加藤 香洋			

研究紀要執筆・編集者一覧

所長	青木 崇郎						
次長	篠崎 浩作	岩渕 賢美	丹野 学				
○企画振興チーム							
	主任指導主事	原田 宏明	主任指導主事	田中 靖則	指導主事	渡邊 健順	
	指導主事	菅原 克章	指導主事	渡辺 さやか	指導主事	森下 陽一郎	
○教育調査チーム							
	主任指導主事	箱崎 良二	指導主事	中目 雅彦			
○学校評価研究チーム							
	主任指導主事	鈴木 久米男	指導主事	穂積 裕一	長期研究員	吉田 洋子	
○カリキュラム開発研究チーム							
	主任指導主事	渡辺 郁哉	指導主事	安瀬 一正			
○情報化推進研究チーム							
	指導主事	島 和宏	指導主事	坂本 晴生			
○教科教育チーム							
	主任指導主事	佐藤 誠一	指導主事	中根 猛	指導主事	黒須 智則	
	指導主事	片平 仁	指導主事	安斎 美智男	指導主事	桑名 俊之	
	指導主事	鈴木 睦治	指導主事	渡部 光毅	指導主事	小野田 義和	
	指導主事	黒川 佳子	指導主事	菊池 淳一	指導主事	名嶋 明宏	
	指導主事	鈴木 敦					
○教科外教育チーム							
	主任指導主事	二本松 義公	主任指導主事	村上 正義	指導主事	渡邊 晋一郎	
○情報教育チーム							
	主任指導主事	伊豆 幸男	指導主事	佐藤 浩正	指導主事	大内 順一	
	指導主事	山田 徹	実習教諭	鹿俣 和子			
○FKS担当							
	主任指導主事	池田 和則					
○教育相談チーム							
	主任指導主事	内田 恒一	指導主事	二瓶 重和	指導主事	安田 浩子	
	指導主事	渡邊 兼綱	長期研究員	遠藤 潤			
○長期研究員							
	長期研究員	菊地 一彦	長期研究員	角田 雅仁	長期研究員	遠藤 正幸	
	長期研究員	佐藤 広行	長期研究員	佐藤 三和子	長期研究員	太田 守彦	
	長期研究員	遠藤 こずえ					

研究紀要 第35集

2006.6 印刷発行

編集発行 福島県教育センター
 〒960-0101 福島市瀬上町字五月田16
 ☎(024)553-3141 FAX(024)554-1388
 印刷所 株式会社印刷
 〒960-8044 福島市早稲町8-26
 ☎(024)523-4475 FAX(024)523-4556
